ISSN　1348-6101

東京経済大学学術研究センター

ワーキング・ペーパー・シリーズ

2021-E-01

マルクス経済学の現代的スタンダードを語る

――学術フォーラム報告書――

岩田佳久・新井田智幸

ワーキング・ペーパー・シリーズ

2021-E-01

マルクス経済学の現代的スタンダードを語る

――学術フォーラム報告書――

東京経済大学　経済学部

岩田佳久（いわたよしひさ）・新井田智幸（にいだともゆき）

2022 年 2 月 22 日

東京経済大学学術研究センター

東京経済大学学術フォーラム

「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」

2021 年 10 月 23 日 9:00－17:15　Zoom にて開催

報告

泉正樹（東北学院大学教授）「資本主義の歴史的発展を理論的に捉える方法について」

結城剛志（埼玉大学教授）「商品貨幣論の再構成」

小幡道昭（東京大学名誉教授、東京理科大学非常勤講師）

コメント

村上允俊（京都大学・院・博士後期課程）

海大汎（北海道大学・助教）

司会　岩田佳久（東京経済大学教授）

目次

第１部：資本主義の歴史的発展を理論的に捉える方法について

報告者：泉正樹

報告資料（泉）　4

口頭報告（泉）　9

報告へのコメント：村上允俊

コメント資料（村上）　13

口頭でのコメント（村上）　14

第１部の討論　15

第２部：商品貨幣論の再構成

報告者：結城剛志

報告資料（結城）　23

口頭報告（結城）　49

報告へのコメント：海大汎

コメント資料（海）　55

口頭でのコメント（海）　56

第２部の討論　57

第３部：労働概念の拡張

報告者：小幡道昭

報告資料（小幡）　63

口頭報告（小幡）　63

第３部の討論　71

まとめのあいさつ　78
質問一覧　79
質問への事後の回答
　泉氏による回答
　　村上氏のコメントへの回答　83
　　参加者の質問への回答　84
　村上氏による回答　86
　結城氏による回答
　　海氏のコメントへの回答　87
　　参加者の質問への回答　87
　小幡氏による回答　89
関連文献　91

はじめに

マルクス『資本論』以降、マルクス経済学は変化してきました。とくに宇野弘蔵は『資本論』の解釈にとどまらず、抽象化された理論として再構成するとともに、現実の資本主義を段階論と現状分析の対象としました。その後も理論的な発展と現実の資本主義の変化の中で、新しい方向が提起されています。

最近では、小幡道昭氏の『経済原論』(2009 年)や、さくら原論研究会の『これからの経済原論』(2019 年)が、マルクス経済学の原理論の領域での新たな発展を示しています。逆にいうと、マルクスの著述だけから得られるイメージと、現在のマルクス経済学とはかなり大きなギャップがあります。今回の学術フォーラムではこのギャップを埋めるように、こうした発展の方向を専門外の人にもわかる形で新しいスタンダードとして提起します。

方法については、「資本主義の歴史的発展を理論的に捉える方法について」と題して、資本主義が歴史的に発展してきたことを基礎理論のレベルで捉え返す「変容論的アプローチ」を紹介し、新たな段階論の土台として耐えうる資本主義の原理像の構成方法を提起します。

貨幣については、「商品貨幣論の再構成」と題して、資本主義の歴史的展開を強く反映した金貨幣論を相対化し、より一般的な貨幣論を構想する方法を提起します。

労働について、搾取論を論じるために狭く限定されたこれまでの労働概念を大きく更新し、「労働概念の拡張」と題して、現代の多様な労働過程を原理的に解明する方法を提起します。

このワーキングペーパーの構成についての説明

第１部 と第２部では、まず報告者による事前配布資料 のスライドを掲載し、次に報告者の当日の口頭報告と続く。したがって口頭報告の部分を読む際にはスライドも同時に確認してほしい。なお、第 3 部の事前配布資料はウェブサイトにある。銀座経済学研究所「労働概念の拡張」

https://gken.jp/gken/2021/09/18/%e5%8a%b4%e5%83%8d%e6%a6%82%e5%bf%b5%e3%81%ae%e6%8b%a1%e5%bc%b5/

コメントでは、まずコメンテータによる事前配布資料を掲載し、次にコメンテータの当日の口頭でのコメントへと続く。二つは重複する部分も多い。

すべての文字起こし部分には、文字起こし業者（コエラボ）による整文と、編集者（岩田）による修正が行われている。

質問は「質問一覧」に番号付きで一括して掲載してある。討論で現れる質問はそちらを参照しながら読んでほしい。なお、質問については当フォーラム終了後に、報告者とコメンテータ（村上氏）から回答を寄せていただいた。このワーキングペーパーの後ろに掲載した。

最後のページには報告者、コメンテータ、司会の最近の論文やウェブサイトなどを掲載した。

第１部：資本主義の歴史的発展を理論的に捉える方法について

報告者：泉正樹（東北学院大学・教授）

報告資料（泉）

東京経済大学 学術フォーラム
「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」

資本主義の歴史的発展を理論的に捉える「方法」について

2021年10月23日

泉　正樹（東北学院大学）

問題関心

① 〈現代〉はどのような時代か？

② ①に対して、「資本主義の歴史的発展を理論的に捉える」という立場を採る基礎理論は、どのような工夫を行ってきたか？

③ ①を考えるためには、②に加えて、さらにどのような考察領域が必要か？

- 今回は、

泉正樹［2021］「資本主義の歴史的発展と経済原論：『変容論的アプローチ』からの展開」、『東北学院大学経済学論集』第194・195号、35-57頁

と、その後に考えたことを報告してみます

概　要

- 画期としての1970年代？
- 資本主義の歴史的発展を理論的に捉える
  - ✓ マルクス
  - ✓ 宇野弘蔵
  - ✓ 「変容論的アプローチ」（小幡道昭）
- 「現代」を捉えるためにさらに求められること

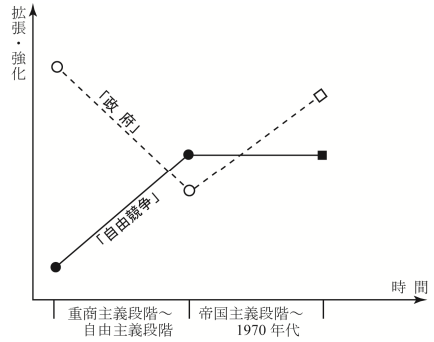
画期としての1970年代？

- 「資本主義」にはいくつかの画期があるといわれます
  - ✓ 「労働力の商品化」［＝「元来無理な形態」｛宇野弘蔵『経済政策論 改訂版』序論（1971年）｝］という論点に注目すると・・・
    - ➢ 旧来の社会関係を強制的に解体して「労働力の商品化」を準備する段階（発生期）
      - ● 15世紀末～18世紀後半（17、18世紀のイギリスが典型）
    - ➢ 商品売買の論理に基づき（景気循環を通して）再帰的に「労働力の商品化」が確保できるようになる段階（成長期）
      - ● 18世紀後半～19世後半（イギリスが典型）
        - □ 旧来の社会関係の自力的解消｛「資本家的な社会関係の全面的展開への傾向」（前掲宇野［1971］19頁：引用は『著作集』第7巻より）｝

- ➢ 確立された「機械的大工業」を輸入し、「不断の過剰人口を基礎とする労働力の商品化」（前掲宇野［1971］180頁）が生じる段階（爛熟期）
  - ● 19世紀末～第1次世界大戦（株式会社形式による独占的利益の追求）
    - □ 進出的：ドイツ
      - ◆ 「機械的大工業」による資本主義の導入
      - ◆ 巨大な固定資本を要する大工業の重点化
        - ■ 旧来の社会関係の不徹底な解体
        - ■ 高度な資本主義的発展

        → 「政策」を「重要な補強手段として要請」（前掲宇野［1971］19頁）
    - □ 防衛的：イギリス

- こうした見方（宇野の発展段階論）は、1970年代までの現実を読み解く視点としても有効
  - ✓ 「自由競争」と「政府」との組み合わせとしてアレンジすると、第1次世界大戦後も「爛熟期」とみなせる



7

- 1970年代以降の現実は、こうした見方では捉えきれない相貌を示しているように見えます

① 国際通貨制度の転換（金融のグローバル化）

- ✓ ドルの兌換停止（1971年）
  - □ 固定為替相場制から変動為替相場制へ｛主要国の実質的移行：1973年、制度的承認：1976年（キングストン会議：1978年発効）｝
- → この時期以降、金融取引の領域にもデリバティブ（先物、オプション、スワップなど）が普及（金融市場の発達：時間を組み込んだ通貨間の関係）
- → 債権の「証券化」と呼ばれる手法も登場

その後の通貨金融危機の素地

8

② 多国籍企業の躍進（「生産」のグローバル化）

- ● 自由な資本移動：△
- ● 安定的な為替相場：○
- ● 自立的な国内金融政策：○

⇩

- ● 自由な資本移動：○
- ● 安定的な為替相場：×
- ● 自立的な国内金融政策：○

→ 新興国・地域（とりわけ東アジア）における市場を活用した急速な経済発展（資本主義的発展）
- □ 輸出指向型工業化政策

9

③ 政府機能の「新自由主義」的転換

- ● 「ケインズ主義」に象徴される積極的な経済管理

⇩

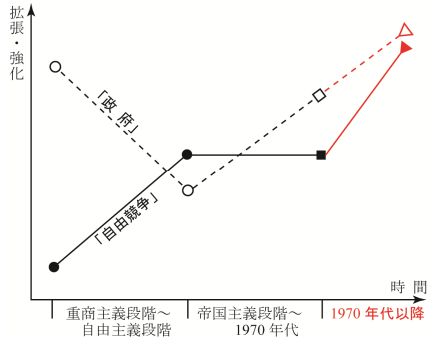
- ● 市場機能を重視した公的部門の民営化・規制緩和
  - □ 家事・保育・介護・医療等の市場化

- ①～③のいずれにおいても、「自由競争」は、強力な「政府（国際機関も含む）」とセットで発達
  - ➢ 「〈現代〉はどのような時代であるのか？」という問いに対して有力な回答を提示してきたマルクス経済学の時代認識との間に、ズレを生じさせているように思われます

10

- 「政府」↘ ならば「自由競争」↗
- 「政府」↗ ならば「自由競争」→（または ↘）

という関係では捉えきれない1970年代以降の経験・・・



11

資本主義の歴史的発展を理論的に捉える

- マルクス経済学の時代認識ってどんなもの？
  - ✓ マルクス経済学＝『資本論』の検討を通して登場
    - ➢ では、『資本論』の時代認識ってどんなもの？

「産業の発展のより高い国は、その発展のより低い国に、ただこの国自身の未来の姿を示しているだけである。」｛初版『資本論』序文（1867年）｝

- ● 『資本論』は、理論展開の主要な例解として、最先端の資本主義を体現していたイギリスを引き、ドイツ語圏の読者に向けて公刊
- ● 資本主義には、「鉄の必然性をもって作用し自分をつらぬく」（同上）傾向がある

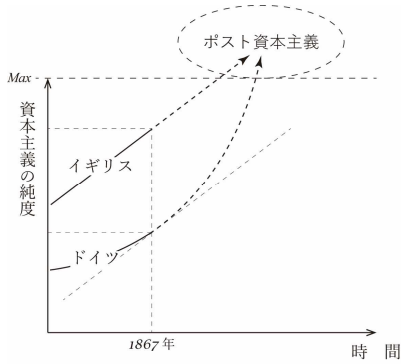
マルクス

12

- ドイツに追いかけられるイギリスも、立ち止まって待っているわけではない
  - ✓ 最先端を走るイギリスも服する「傾向」とはどんなもの？
    - ➢ その解明が『資本論』の研究課題
      - ● 資本主義は発展すると、ある状態に行き着く・・・
        - □ 生産の大規模化（⇒ 大企業の独占）
          → 中小・零細企業の没落
          かつ
        - □ 事業における機械化の進展
          → 労働内容の単純化 & 失業問題
    - ➢ 「資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす」（現行版『資本論』第1巻第24章）

マルクス

- 『資本論』第1巻が示した時代認識のイメージはこんな感じになるでしょうか



マルクス

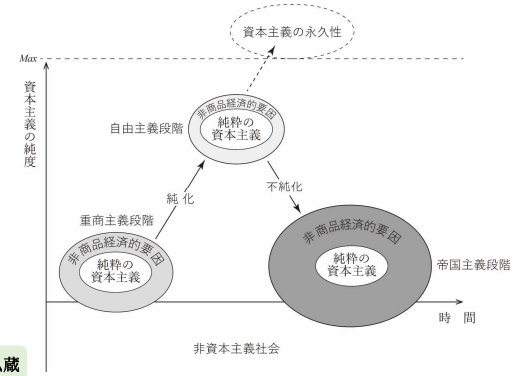
- 『資本論』第1巻が示した時代認識は、19世紀末以降の現実を踏まえて、次のように評価されるようになります

「『資本論』では、資本主義の発展は一社会を益々純粋に資本主義化するものとされていたのであった。そしてそれは慥かに十七、八世紀以来の歴史的事実に基づくものであり、また資本主義経済の一般的規定をなす経済学の原理を確立するためには欠くことのできない前提をなすのであるが、しかし歴史的発展は決してそういう純化を一筋に続けるものではなかった。資本主義は十九世紀七十年代以後漸次にいわゆる金融資本の時代を展開し、多かれ少かれ旧来の小生産者的社会層を残存せしめつつ益々発展することになったのであって、もはや単純に経済学の原理に想定されるような純粋の資本主義社会を実現する方向に進みつつあるものとはいえなくなったのである。」

宇野弘蔵『経済原論』序論（1964年）

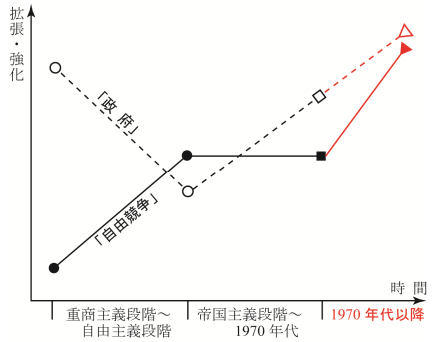
宇野弘蔵

- 資本主義の歴史的発展に対する宇野の見方は、「商品経済」（純粋の資本主義）と「非商品経済」との関係として、下図のように捉えられるでしょう



宇野弘蔵

- この見方が、1970年代以降の現実にフィットしないように見えるのです



  - ✓ 宇野の「発展段階論」の根本的な見直しが必要では？

  - ✓ 労働力の商品化という「非商品経済的要因」を想定すれば「純粋の資本主義」を構成できるという、「資本主義なるもの（＝経済原論）」に対する理解も見直すべきでは？
    - ➢ 「純粋の資本主義」は、「あたかも自立するかのごとくに説くために、いくつかの問題をいわばブラック・ボックスに入れている」{山口重克『類型論の諸問題』37頁（2006年：初出は1992年）}

➢ 前スライドの山口「ブラック・ボックス」論に対して

「原理論がそれ自身理論として実際には特殊な想定ないし前提のうえに展開されている点が明確にされている」といってよい。社会的生産を市場経済的な原理だけで自立的に編成することには、すでに原理的に無理があることを積極的に認めているわけである。従来の原理論では得てして、労働力の商品化という唯一の外的な条件さえ与えられれば、あとは市場経済的な原理だけで理論上は永久に繰り返すがごとく、その自立性を強調してきた傾向に照らしてみると、この主張は決定的な変更を求めるものであるといってよいし、私もまたその意義を高く評価したい。{小幡道昭『マルクス経済学方法論批判』86頁（2012年：初出は1999年）}

➢ そのうえで・・・

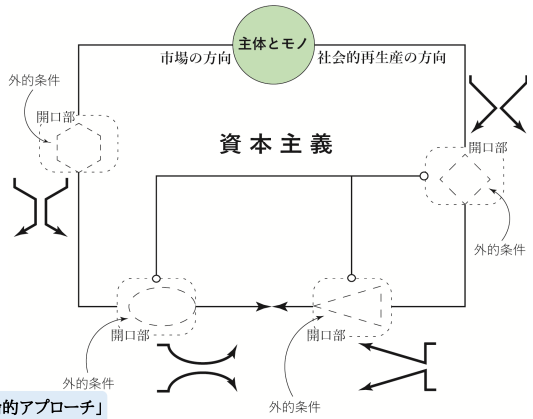
「原理論の論理を精密化しようとすれば、逆にどこに慣行的な規制が作用し、また制度的な補強が強く求められるのか、商品経済の原理で社会的再生産を編成しようとする場合に外的条件が組み込まれる、いわば開口部の存在が理論的に推定できるわけである。そして、そこに導入される条件如何で、資本主義の外観も変化する。」（前掲小幡 [2012] 17頁）

- 経済原論を構成する軸は「商品経済の原理」
  - その内部に、「外的条件」（「慣行的な規制」や「制度的な補強」）が組み込まれる「開口部」が存在する

✓ 「資本主義なるもの」には、その「外観」を変化させる仕組みが原理的に備わっている
＝「変容論的アプローチ」

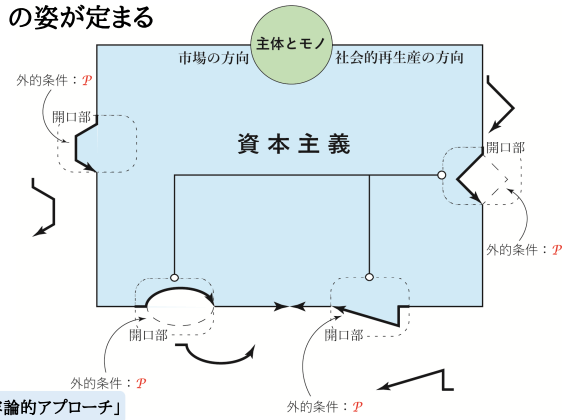
「変容論的アプローチ」

✓ 「変容論的アプローチ」に対する報告者のさしあたりのイメージはこんな感じです



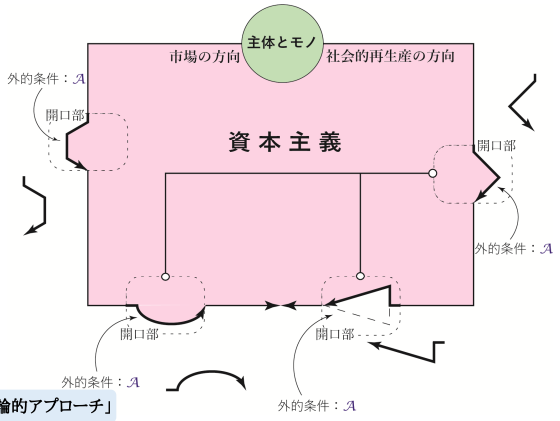
「変容論的アプローチ」

✓ 「開口部」に特定の「外的条件」（$\mathcal{P}$）が組み込まれると、「商品経済の原理」があるかたちで接続され、資本主義の姿が定まる



「変容論的アプローチ」

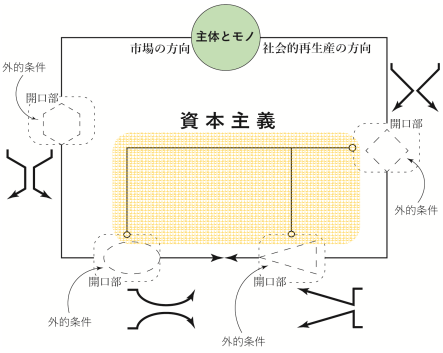
✓ 別の「外的条件」（$\mathcal{A}$）が組み込まれると、資本主義の「外観」が変わる



「変容論的アプローチ」

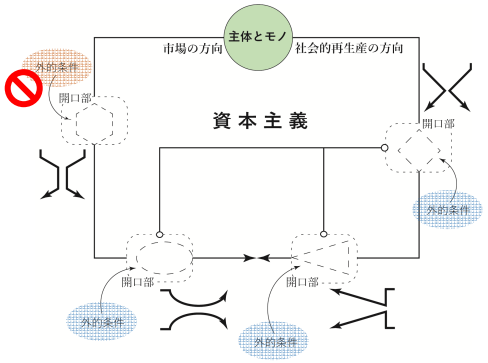
- 基礎理論の問題として追究すべき課題が、原作者から提示されています（前掲小幡 [2012] 237-40頁）

① 各開口部は、他の開口部とどのように連動している？



② 各開口部に作用する「外的条件」を一貫したものとして正当化する「イデオロギー」の考察

- ➢ [ ] として束ねられる「外的条件」のセットに反する [ ] を組み合わせることはできない



「現代」を捉えるためにさらに求められること

- 報告者が理解する限りの「変容論的アプローチ」について、駆け足で説明してみました
  - ✓ 「資本主義なるもの」には、原理的にいくつかのタイプを生み出す仕組みが備わっている
    - ➢ 原作者から提示されている課題
    - ➢ 実際にどんなタイプの資本主義を構成できる？（原理論＋α）
    - ➢ 資本主義のタイプの構成方法として、{（開口部への外的条件の作用）→ 論理の分岐} というのとは異なるスタイルはあるか？
      - ● 基礎理論の問題として、さらに詰めていく必要がありそうです

- 「開口部」と「外的条件」を確定して、資本主義が原理的に採りうるいくつかのタイプは解明できるとして・・・
  - ✓ 各タイプの差異は、資本主義の歴史的な発展（ある時期に始まって、やがて終わりを迎える）に対してどのような意味を持つ？
    - ➢ 基礎理論の問題として構成できる各タイプを、資本主義の歴史的な発展と突き合わせ、「現代」の意味を問う独自の考察領域が必要になるでしょう（→「原論」に没頭すれば自ずとワカルようになるわけではない）
      - ● 発展段階論とよばれてきた領域だと思います

参考文献

宇野弘蔵 [1964]『経済原論』（岩波文庫,2016年）

宇野弘蔵 [1971]『経済政策論 改訂版』（宇野弘蔵著作集第7巻: 岩波書店,1974年）

小幡道昭 [2009]『経済原論：基礎と演習』（東京大学出版会）

小幡道昭 [2012]『マルクス経済学方法論批判』（御茶の水書房）

桜井毅・山口重克・侘美光彦・伊藤誠編 [1980]『経済学 II』（有斐閣）

樋口均 [2016]『国家論：政策論的・財政学的アプローチ』（創成社）

山口重克 [2006]『類型論の諸問題』（御茶の水書房）

SGCIME編 [2017]『第3版 現代経済の解読：グローバル資本主義と日本経済』

口頭報告（泉）

泉　東北学院大学の泉正樹です。本日はこのような報告の機会を設けていただき、ありがとうございました。本日の報告論題は、方法論についての話をするという大きなテーマですが、資本主義の歴史的な発展を理論的に捉える方法という形でタイトルを付けました。それについて、少し報告をしてみたいと考えています。大きな問題関心ですが、「現代」は、いまの目の前の問題だけではなくて、マルクスや宇野弘蔵が目にした「現代」という意味でもあります。論者がそれぞれの方法を用いて、自分が目にした「現代」を捉えようとしたのではないか。それを大きな問題関心として持っています。

この問題関心に対して、資本主義の歴史的発展を理論的に捉えるために、マルクス経済学はどのような工夫を行ってきたのかということを、少し振り返ってみたいと思います。その中でマルクス、宇野弘蔵以降に提示された、本日の第3報告をされる小幡先生が提唱する変容論的アプローチを紹介します。それらを踏まえて、最後に現在私が考えていることを報告したいと思います。

今回の報告のネタは、2021 年 3 月に大学の紀要に書いた論文（「資本主義の歴史的発展と経済原論：『変容論的アプローチ』からの展開」『東北学院大学経済学論集』）です。そこで考えたことを基本にして、その後この論文の書き方ではまずいと考えたところもあるので、それを少し報告します。本日の問題関心の説明をするために、このようなメニューを考えてみました。あらためて考えると、入れ替えたほうが話の流れは良いような気もしましたが、今回はこの方向でいきます。

1 番目の論点は、目の前に見えている現実が、マルクス経済学のこれまでの現状認識とは少しずれてしまうのではないか、2 番目の論点は、マルクス経済学は資本主義の歴史的発展をどのように工夫して捉えようとしていたのかについて報告します。そして最後に、変容論的アプローチの私なりの理解を示した上で、「現代」はどのような時代なのか？ という問題を考えるためにさらに必要なことがあるという点について報告します。そのようなことを念頭に置きながら、早速、話を始めます。

資本主義にはいくつかの画期があるといわれていますが、今回は宇野弘蔵の議論を参考にしてみたいと思います。宇野弘蔵は、労働力の商品化という論点に着目して、資本主義にはいくつかの画期があるという議論を組んでいます。労働力の商品化は、もともと無理な形態だが、その無理が現実化するという話です。15 世紀から 18 世紀後半の頃、中でも 17、18 世紀のイギリスが典型とされます。旧来の社会関係を解体し、労働力の商品化が準備されたこの頃が、資本主義の発生期に当たるといわれています。

その後、ある程度条件が整うと、景気循環を通してということだと思いますが、商品売買の論理に基づき、無理だった労働力の商品化を再帰的に確保できる段階になっていきます。これが資本主義の成長期だといわれています。18 世紀後半から 19 世紀後半のイギリスが典型になっていて、先ほど言った旧来の社会関係を自立的に解消させていくようなスタイルでした。それは、宇野弘蔵が経済原論という、純粋の資本主義を論理的に組み立てる際の、一つの根拠になっていた純粋化傾向と呼ばれるものが、このときに見ることができるという話になっています。

さらに時代は進んでいき、資本主義を引っ張っていく主役がイギリスからドイツに移っていきます。確立された機械制大工業を新しく外から入れてくるのですが、固定資本が巨大化しているので、それに比して吸収する労働力がそれほど増えません。常に景気循環を通じて相対的過剰人口が増減するというよりも、常に過剰人口があるという下で、労働力の商品化が生じていきます。これが爛熟期、末期、没落期といわれています。旧来の社会関係を残しながら、高度な資本主義的な発展をしていき、政策を重要な補強手段として要請するという話になっています。

宇野弘蔵自身はこの議論を第 1 次世界大戦までで打ち切っていますが、議論の組み立ては、1970 年代までの現実を読み解く視点としても、有効だったのではないかと思います。少し話を思い出してもらうと、労働力の商品化という無理を通していくために、外的な強制力を用いてそういう条件をつくり出し、それが一定程度、落ち着くと、市場の論理で資本主義が拡大成長していくという話をしていると思います。

先ほどの一つ前のスライドで見てもらった話でいくと、旧来の社会関係を残しつつ、しかも、政策を重要な要因として要請していくという見方で、19 世紀末から 1970 年代ぐらいまでを見通すことができるのではないか。これは無理をしているかもしれませんが、その間、市場の領域が横ばいであるのに対して、政策等を行う政府が伸びていくと考えていくと、宇野が第 1 次世界大戦までで切った見方で、1970 年代までをある程度は見ることができると考えてみました。この点について、この後に村上さん

からコメントをもらえると思います。

ところで、スライドでは政府と書きましたが、行政だけではなくて、司法や立法も行うということで、国家と言ってしまえばよかったかなと今は思っています。ともあれ、差し当たり、1970 年代までの方向はこのような形で見ることができると考えています。問題は、1970 年代以降の現実が、どうも先ほど見てもらったような図式では捉えきれないのではないかという点にあると考えています。

いろいろと考えてみましたが、一つは金融のグローバル化があると思います。1971 年のドルの兌換停止に引きずられて、固定為替相場制から変動為替相場制への移行がありました。その辺りから通貨の間の関係も、時間を組み込んだ取引を念頭に置く必要が出てきて、1990 年代以降繰り返されていくような、通貨金融危機の素地のようなものがこの辺りで形づくられているのではと考えています。

もう一つは生産のグローバル化だと思います。金融のグローバル化でかなり自由な資本移動のようなことが行えるようになり、新興国、とりわけ東アジアにおいて、資本主義的な諸関係のもとでの急速な経済発展が 1970 年代以降に出てきています。

さらに、それまでの福祉国家という枠組みを超えて、政府機能の新自由主義的な転換が行われていることが、これぐらいの時期からだと思っています。ケインズ主義に象徴されるような積極的な経済管理から、市場機能を重視した公的部門の民営化や規制緩和が行われます。その中でこれまではあまり市場の領域に浸されてこなかった部分が、市場の中に取り込まれていくような流れも出てきています。

市場や自由競争が 1970 年代以降に伸びていくときに、それは勝手に伸びていくというよりも、国家が強力にバックアップをしながら、伸びていったのだろうと見ていいと思います。福祉国家に対して、そういう国家像を競争国家と言うと、この間に教えてもらいましたが、そのような形でフェーズが変わったのだと思います。そう考えると、現代はどのような時代であるのかという問いに対して、少なくとも 1970 年代ぐらいまでは結構な説得力があった宇野弘蔵の示した時代認識との間に、ズレが生じているということになると思います。

これも単純化のし過ぎかもしれませんが、国家や政府が後ろに退くと、自由競争や市場が伸びていき、国家や政府が伸びてくると、市場が横ばい、ないしは縮小していくというのが、宇野の基本的な議論の組み方だと思います。しかし 1970 年代以降は、市場も伸びるし国家も伸びるという流れが生じたのではないか。このように私には見えてしまっているので、これをこれまでのマルクス経済学の流れの中に、どのように位置付けることができるかを考えてみたいとなります。では、マルクス経済学の基であるマルクスの経済学、『資本論』において、マルクスは現実をどのように捉えたのか。マルクスの現実認識は、年齢を重ねるに従って見方が変わっているというのが、最近の見解だと思います。今回の報告は、『資本論』の見方に絞りますが、その基本は、産業の発展のより高い国は発展がより低い国の、未来の姿を示しているというものです。そのような形で『資本論』は、当時の最先端のイギリスを理論的な例解としてとり、それをドイツ語圏の読者に向けて公刊したのでした。ドイツもやがてイギリスのようになるだろう、そういう観点で書かれています。資本主義には鉄の必然性をもって自分自身を貫いていく、そういう傾向があると言っているのが、『資本論』の第 1 巻でかなり強く出されている観点だと思います。

当然、イギリスもドイツに追いかけられるのを待っているわけではありません。イギリスも資本主義が持っている必然性、傾向に服していると『資本論』はいいます。そのことを示したのが『資本論』の第 1 巻だと思います。これも単純化が過ぎるかもしれませんが、資本主義は発展するとある状態に行き着く、大企業の独占が進むのに伴って、中小、零細企業は没落していく、機械化が進んで労働内容は単純化していき、吸収する労働力の量もそれほど増えないので、基本的には失業問題が大きくなっていくという筋で理解できます。

資本主義はそのような形で、必然的に自分自身を否定して、その次の経済の在り方、社会の在り方を生み出してしまうというのが、『資本論』の強いメッセージだろうと思います。このような『資本論』が示した時代認識が、19 世紀末以降の現実を踏まえて、宇野弘蔵によって先ほどのように評価されていきます。資本主義は発展すれば発展するほど、ますますそれ自身の論理を展開していくというよりも、多かれ少なかれ旧来の小生産者的社会層を残存せしめつつ、ますます高度な発展をする。そこでは政策が重要な要因として要請されることになる。結論としては、単純に経済学の原理に想定されるような、純粋の資本主義社会を実現する方向に進まなくなったと、宇野弘蔵は現代、現実を捉えたということに

なります。

そう考えてみると、資本主義の歴史的発展に対する宇野弘蔵の見方は、このようなかたちで捉えられると思います。つまり、どんな資本主義であれ、それが資本主義である以上は変わらないコアがあるという話を基礎理論の領域でする。しかし、現実は常に非商品経済的要因が作用することでコアがそのままのかたちで現れることはない。この「非商品経済的要因」という用語について、論文を書いたときもどのように分けるかで悩みました。今回は政府や国家と思いきりましたが、これではまだダメです。村上さんにコメントをしてもらえると思いますが、そこはもう少ししっかりと分けないと駄目だと思っています。

ただ、コアに作用する非商品経済的要因が、ある時期には、饅頭の皮がどんどんと薄くなるような形で純粋化が進んでいき、ある時期を境にして、今度は皮をどんどんと厚くまとうかたちで不純化していくというストーリーで、宇野は現実を捉えたのではないかと思っています。このような見方が、大体1970 年代以降はフィットしなくなっているのではないかと考えています。宇野の発展段階論の根本的な見直しが必要になってくるのではないか、ということが一つの論点として挙げられると思うわけです。

そして、もう一つ、この宇野弘蔵の現実の見方を支えている、どんな資本主義にも共通する純粋の資本主義というコアについて、従来、労働力の商品化という外的条件を一つだけ与えれば構成できる、このように考えてきた経済原論に対する理解も、発展段階論の側の妥当性に疑問符がつくというのであれば、発展段階論を支えてきた基礎理論の原論の側も、見直してみればいいのではないかということを考えています。

宇野弘蔵の純粋資本主義論には検討がなされてきています。山口重克先生は、純粋の資本主義とは、あたかも自立するかのごとくに説くために、いくつかの問題をブラックボックスに入れて、基礎理論の段階ではそれをあえて取り出さずに伏せておいて、次のステップで中身をはぐってさまざまな条件等を変えてみればよいと、言われました。それでしばらく純粋資本主義論がまた精緻化されていって、完成度を高めていくことになりました。

このブラックボックス論に対して、小幡先生が、もう一歩先に進める議論をなされたと思います。原理論自身が実際には特殊な想定、ないしは前提の上に展開されている、これをブラックボックス論は明確にしたということで、そのこと自体は高く評価した上で、さらにその先にもう一歩いきたいと小幡先生は言われたのだと思います。つまり、原論の論理を精緻化しようとすれば、どこに慣行的な規制や制度的な補強が強く求められるのか、商品経済の論理で社会的再生産を編成しようとする場合に外的条件が組み込まれる開口部の存在が、商品経済の論理を突き詰めれば突き詰めるほど明らかになる、と言われているのだと思います。

資本主義なるものは何であるのかと追求していくと、単一の純粋の資本主義が出てくるのではなくて、いろいろな外的条件が作用する開口部が明らかになる、そこに実際に外的条件がはまることで、ある一つの総体としての資本主義、全体としての資本主義の形が整えられると考えると、原理的に資本主義は自分の姿を変化させる仕組みを備えていることになる。この点が、変容論的アプローチのポイントだと私は理解しています。

この理解を、自分なりに図に描いてみるとどうなるかということで、最近、少し興味を持って取り組んでいるところです。差し当たり、このような形を今は考えています（報告資料の 21 枚目～23 枚目を参照されたい）。原論の出発点について、こちらが流通論の方向で、こちらが生産論の方向だと今はイメージしています（報告資料の 21 枚目）。出発点を同じにそろえる必要はないのかもしれませんが、主体とモノという概念をある方向に突き詰めていくと、そこから商品という概念が組み立てられて、さらに貨幣と資本に進むということで、こちらが市場の方向だと考えています。他方、主体とモノという同じ出発点から、外的世界を利用して何か自分の思い描く目的を実現する、そのような観点で論理を引っ張っていくと、社会的再生産を構成できるのではと考えています。差し当たり、同じ出発点から進んでいく方向を違えると、生産論、流通論の領域を構成できるのではないか、と考えています。

例えば市場の方向に進んでいって、論理的に推論を重ねていくと、貨幣のすがたとして特徴的には二つあり得るというスタイルの議論になっていくと思います。論理的に推論をしていってもどちら側のルートに乗るかは確定できませんが、外的条件が作用することで例えばこちら側に接続するような形で論理が続いていくようなことをイメージして、図を描いています。

ただ、生産論のほうは、このままの図では説明できません。社会的再生産の方向に進んでいく生産論も、資本が社会的再生産を編成するという論理を組んでいくので、どこかで市場や資本が絡んでいくような形の回路を組んでいかなければうまくいかない。もう少し考えなければいけない、と思っています。それは今後の課題とさせてください。いずれにしても、極端かもしれませんが、開口部に外的条件がはまっていない状態を示すことが、基礎理論だろうと私は理解しています。

この開口部に特定の条件をはめる場合、例えばPという条件の束を加えると、実際にどのような形で回路が接続されて、総体としての資本主義が構成できるのかということは、もう一つ先のステップと理解しています（報告資料の22枚目）。このような形をつくっておくと、別の外的条件が組み込まれるとどうなるかという話もできると思います。実際に違う条件をはめてみる場合、例えばこのような形で、回路のスイッチの仕方が変わって形が変わり、そのことによって灯る資本主義の色も変わる。今の変容論的アプローチを展開させていくと、このような考え方ができるのではないかと私自身は理解しています（報告資料の22枚目と23枚目）。

ただ、原作者の小幡先生は、仮にこのような原論を考えるとしても、さらに追求すべき課題があると提示されています。それは何かというと、開口部と言われた部分が全て独立しているわけではなくて、つながっているという論点です。たとえば、ある開口部に特定の条件がはまると、それに連動するかたちで、別の開口部にはまる条件も決まってしまう。ポイントは、原論の内部には穴がいろいろと空いていますが、そこにいろいろなものがはまって、資本主義が自由自在に姿を変えるのではない、ということだと思います。開口部が相互に連動してしまっているので、あるところで接続の仕方が決まってしまうと、それに引っ張られる形で、つながっている部分の開口部の接続の仕方も決まってしまうということです。さらにもう一つ指摘されています。それは各開口部に作用する外的条件についてです。これも開口部の接続に関する論点だと思いますが、原論内部の話ではなくて、開口部に作用する外的条件も独立しているのではなく、それらを正当なものとして納得させるようなイデオロギーが、外的条件を束ねていると言われています。例えば赤い網掛けにした外的条件の部分です。これを開口部にはめようとしても、こちら側の青い網掛けで表されているような部分の外的条件が決まってしまうと、それに反するような外的条件はなかなかはめることができないことを、イデオロギーの問題として考察する必要があると言われていると思います（報告資料の25枚目）。

この間の打ち合わせのときに、これが要はこれまで段階論として考察されてきたことですよと教えていただいて、なるほどと納得してしまいました。ともあれ、このような形で、先生ご自身から課題が提示されています。ところで、変容論的アプローチは、論理が分岐するという形で資本主義のタイプを構成してみるというスタイル、二者択一で論理が進んでいくというスタイルが前面に押し出されていると思います。今回の報告の元になった論文では、論理の分岐に対して、論理が分かれて併存するスタイル、二者択一ではなくて、両方の可能性が分流していくスタイルも、もしかするとあるかもしれないと問題提起だけはしてみました。その辺りはもう少し基礎理論の問題として詰めて考えていってもいいと思っています。

そのような形で基礎理論のレベルで開口部、外的条件を明確にしていって、資本主義が原理的にとり得るいくつかのタイプが解明できると考えたとします。そのうえで、今回の報告の問題関心である、現代はどういう時代なのか？ という問いに答えるためには、もう一歩、必要だと思います。

現代は、16 世紀以来の資本主義の歴史的な発展の中で、どういう意味を持っているのか、この問題は論理的な推論に徹すれば、おのずと分かるようになるわけではないだろうと思います。要するに、発展段階論と呼ばれて取り組まれてきた領域が改めて求められているということです。現代はどういう時代であるのかを考えようとすれば、基礎理論の領域で考えていく問題があると同時に、発展段階論と呼ばれてきた領域が、今はまさに求められていると思います。自分自身で段階論ができるかというとあまり自信はありませんが、そういうものがあるといいという願望も含めてそう思います。

報告資料の 28 枚目は、今回の報告の参考文献です。興味を持ってもらい、さらに勉強を進めることができるように参考文献を出しなさいということでしたので、このような形で参考文献を挙げておきます。大体、今回の報告の骨組みはここから取ってきました。そこからさらに、みなさまご自身で考えていただけるといいと思います。40 分ぐらいで報告するようにと言われていますので、私の報告は以上です。ありがとうございました。

報告へのコメント：村上允俊（京都大学・院・博士後期課程）

コメント資料（村上）

●発表全体に対する所感：現代資本主義に対する規定から旧来型の発展段階論の有効性を問い、その勢いで原理論（純粋資本主義）にまでその再考を迫る、というものであったと思います。その領域も現代資本主義に対する分析から発展段階論、基礎理論（原理論）、広い意味での方法論等多岐にわたっているように見受けられました。一般的には、それらの領域はそれぞれ独立して論じられることが多い中、それらを一挙に鋭角に貫くような、視野の広い、エッジの効いた試みであるように思われます。その一方で、それぞれの領域がどういった関係性で繋がっているのかという問題に関しては、一足飛びに説明されている印象があり、個人的に理解が追い付かない部分がありました。以下、コメンテータが感じたいくつかの疑問点を提示させていただきます。

①（スライド 7 枚目、10 枚目、11 枚目など）現代をどのような時代かを規定する際に、70 年代を「画期」とし、70 年代以降の発展は「「自由競争」は、強力な「政府（国際機関も含む）」とセットで発達」（スライド⑩）してきたことから、時代認識がズレてしまっているのではないか、という形で問題提起をされています。しかしながら、政府と市場（自由競争）が手を携えて発展するという現象は、1970 年代以降に特殊なものだとは必ずしも言えない側面があるように思います（例：「自由貿易帝国主義」論、財政＝軍事国家論など）。そのように考えると、70 年代以降に初めて国家と市場が手を携えて発展し始めた、と規定するのではなく、70 年代を画期に国家と市場との関係性が質的に変化した、と考える方が説得的な気がしています。

②（スライド 16 枚目、17 枚目）16 枚目のスライドで、宇野発展段階論を整理した図式が提示され、それに先述の政府と自由競争が 70 年代以降ともに強化されていくことを示す図式を対比させる形で、宇野発展段階論の現代への有効性に対して疑義が呈されています。しかしながら、16 枚目のスライドで「非商品経済的要因」とされているものと、17 枚目のスライドで「政府」とされているものの間にはどういった関係があるのでしょうか。一口に「非商品経済的要因」と言っても、自作農や家事労働に代表される、商品経済の滲透作用を受けうる領域（ある意味で「経済的」ではあるが、「商品経済的」ではない領域）と、そもそも「経済的」とすら言い難く、商品経済の滲透作用によって解体されることのない「政府」のような領域があると思います。純粋化傾向において退潮するのは前者、「逆転」以降肥大化するのは後者と言うこともできるかもしれません。

③（スライド 18 枚目）ここまでの論の展開で、宇野発展段階論が現代（70 年代以降）という時代にそぐわないことは、一応理解できるように思います。その一方、この箇所で労働力の商品化を唯一の外的な条件とする「純粋の資本主義」の見直しの必要性にまでいきなり歩を進めており、その部分がいささか言葉足らずな印象を受けました。なぜ原理論にまで手を付ける必要が出てくるのでしょうか。「純粋の資本主義」の回し者というわけではありませんが、そこを温存したまま発展段階論を改良するだけでは不十分な理由や、70 年代以降の変化を「ブラックボックス」論や「開口部」を有する資本主義でしか捉えられないという事情があったりするのでしょうか。

④（スライド 27 枚目）ここまでの展開で、外的条件の変化に応じてそれ自体変容するものとしての資本主義像が提示されています。開口部がそれぞれ独立して変容するというわけではなく、外的条件の束や開口部どうしの連動（？）によって、資本主義が取りうるタイプをある程度絞ることができるということだと思います。しかしながら、このスライドで提起されているのは、そうした変化を並べ立てるだけでは不十分であり、そこに何らかの「意味」を持たせたストーリー（発展段階論）が要請される、ということです。極端な言い方をすれば、現代の資本主義を解明するという目的ならば、そうした「意味」は必ずしも必要ではない気もします。なぜ「意味」が要請されるのかということに関して、もう少し敷衍していただければ幸いです。（個人的には、「ある時期に始まって、やがて終わりを迎える」という必ずしも自明ではない資本主義の「歴史」性をどこかで担保する必要がある、という側面が大きいように思います）

口頭でのコメント（村上）

村上　京都大学大学院の村上です。泉先生、発表をありがとうございました。早速、コメントをします。まずは発表全体に対する感想というか、私の雑感です。この発表は取りあえず現代資本主義に対する現状認識から始まり、旧来型の発展段階論の有効性に問いを発し、その勢いをそのまま原理論まで再考をせまるという、とてもとがった挑戦的な試みだったと思います。その対象となった領域も、現代資本主義に対する分析から発展段階論、それから原理論、基礎理論に加えて、それらを広く包括した方法論にまで、とても広い領域にわたるものと感じました。一般的に宇野理論の内部では、そうした領域は個々が独立して論じられる傾向がありますが、一方でそれらを結構、最短距離というか鋭角に貫くような、とても珍しい試みだったと思いました。

ただ、領域が広くて、なおかつ最短距離で駆け抜けているところもあるので、とりわけ各領域がどうつながっているのかに関しては、本日の発表に私の理解が追いつかない部分があったので、以下の 4 点について、簡単ですが疑問点を提示します。泉先生のスライドを参照したほうがいいと思うので、持っている方はスライドを確認しながら聞いてください。

まず一つ目の疑問です。スライドの 7 枚目と 10 枚目、11 枚目あたりになると思います。現代の規定で、1970 年代を画期として、1970 年代以降の発展は政府と自由競争がセットで発達してきたというところから、旧来の発展段階論の構図とずれてしまっているという形で問題提起がなされていると思います。しかし、歴史的に、政府と市場が手をたずさえて発展するという言い方だけであれば、1970 年代に特化すると、必ずしも言えないというのは感想として持ちました。少し前であれば、自由貿易帝国主義論のようなところや財政軍事国家論のような形で、自由主義段階でもそういう政府と市場の関係はあったのではないかという知見はあるので、国家と市場が手をたずさえて発展し始めたというよりも、関係性の質的な変化のようなもので規定したほうが、どちらかというと説得的ではないかと思いました。

2 点目です。スライドの 16 枚目と 17 枚目あたりです。16 枚目のスライドで宇野発展段階論を整理した図式が提示されて、その次のスライドです。先ほどの図ですが、政府と市場の関係性が提示された図を出されました。それを比べることによって、宇野発展段階論が現代に対して有効ではないのではないかということを言われています。しかし、この 2 枚の図でいうと、16 枚目のスライドで先ほど泉先生からも少しコメントがあったと思いますが、非商品経済的要因とされているものと、17 枚目で言われている政府について、先ほどの言葉でいうと国家ですが、これには開きがあるというか、1 対 1 対応するものではないのではないかと感想として持ちました。

例えば非商品経済的要因というと、政府や国家とはまた別に零細自作農のような形で、まだ資本主義というか商品経済には包接されてはいないけれど、残存しているような領域も含んでしまう言葉だと思います。そこについては、言葉の使い方として少し疑問に感じました。純粋化傾向で退潮していく非商品経済的な要因と、鈍化ないしは不純化で肥大していく非商品経済的な要因が一緒のものなのか少し違ってくるのかも、少し考える必要があると感じました。

3 点目です。スライドの 18 枚目です。ここまでの論の展開で、発展段階論の旧来的な図式が現在にそぐわないことは一応、理解できるように思いますが、この段階で経済原論への見直しも必要ではないかと言われています。その部分がなぜなのかについて、少し言葉足らずではないかという印象を、正直なところ受けました。純粋資本主義の回し者というわけではありませんが、その部分を温存したまま発展段階論の部分だけを組み替えるような形ではなぜ不十分なのか、後々に展開されているブラックボックス論や開口部を有する資本主義でしか、1970 年代以降の資本主義の変化を捉えることができないという事情があるのであれば、それは補足してもらえるとありがたいです。

4 点目です。最後から 2 番目、最後のスライドになると思います。ここまでの展開で外的条件の変化に応じて、それ自体が変容するものとしての資本主義像が提示されています。そこで、開口部がそれぞれ独立して変容するものではなくて、外的条件の束や開口部同士・・・。

第１部の討論

岩田　村上さんがフリーズしてしまったので、泉先生、コメント 1 から 3 まで答え始めてもらえますか。

泉　はい。1 点目の政府と市場が手をたずさえて発展する現象は、特に 1970 年代以降に特徴的なことでもないだろうと言われています。それはそうだと思います。ただ、この次のコメントでも対応しなければいけませんが、市場の自由競争と国家や政府との関係性について、政府が後ろに退くと市場が伸び、政府が前に出てくると市場が少し停滞、横ばいになるという宇野の発展段階論の捉え方からすると、1970 年代以降の現象がずれて見えるのではないかと思っています。

それからスライドの 16、17 枚目についてです。非商品経済的要因の中身をもう少し切り分けなければいけなくて、そこには自作農や家事労働に代表される側面も含まれていて、スライド 17 枚目で出した国家や政府だけを非商品経済的要因とするのは、ずれているでしょうというコメントだと思いますが、たしかにずれています。帝国主義段階のところで非商品経済的要因といったときに、おそらく二つを宇野弘蔵は含めているのではないかと思います。自作農や家事労働のような話で村上さんが指摘したものが一つと、もう一つの政府や国家のような要因の二つぐらいが一緒に含まれていて、19 世紀末以降にこの二つが旧来の社会関係を維持しながら、政策を重要な要因にしてくるということで、二つが厚くなっていっていくと考えてみました。その中から、政府・国家の部分だけを取っていくと、スライド 17 枚目のように伸びる。そして、市場が伸びるということのうちには、それまでに市場の中に取り込まれていかなった旧来の社会関係が解体されていくことを含んでいると読んでもらえると、少しは解消するのでは、と思っています。

それから、3 点目の 18 枚目のところです。発展段階論の見方が少しずれてしまっていることを仮に認めるとしても、なぜそこから原論まで見直さなければいけないのか、というところがつながっていないという指摘に関してですが、おそらく二つぐらい答え方があるかなと思います。

宇野の発展段階論の大きな枠組みは、純粋の資本主義というコアに対して非商品経済的要因がどのように積み重なっていくかという造りだと思いますが、その見方から現実がずれることを認めるとすると、原論と段階論がセットになっている以上、段階論の側に疑義が生じるのであれば、原論の側にも見直してみる余地があるのではないかということが、一つ目の答え方だろうと思います。

もう一つの答え方は、原論自身の内部の組み立てとして、本当に労働力の商品化という外的条件だけを与えれば、純粋の資本主義は構成できるかという基礎理論の問題として追求していくと、そうではないという答え方です。この論点が純粋資本主義論の精緻化の中で出されていったのではないかと思います。今回の報告では一つ目のほうから説明をしてみましたが、原論の側の問題としても、見直しの方向が出されているところだと回答したいと思います。村上さんが戻ってこられました。では、4 番目の途中だったところをお願いします。

村上　はい。失礼しました。4 番目の点です。変容論的なタイプだけで解消されない意味のようなものが要請されてくることについて、もう少し説明をもらいたいところです。かっこ内にある、「やがて終わりを迎える」というところについては、マルクス経済学においてはある程度は感覚として共有されているところだと思いますが、必ずしも自明なことではありません。むしろ、それが永久に続くものというのが古典派的な感覚だと思います。原理論でもそういうところがあるので、そこについてもう少し敷衍してもらいたいところがありました。

泉　ありがとうございます。これはコメントの中に、「『意味』を持たせたストーリー（発展段階論）が要請される」のはなぜか？ と言われているところです。逆にいうと、そのストーリーはなくてもいいのではないかというご指摘だと考えて大丈夫ですか。

村上　私個人の感覚としては、むしろ必要だと思います。なぜ必要だとされるのかのところを、もう少し展開してもらえるとありがたいです。

泉　そこは素朴に、ある時点で始まったものは、いつかは終わるのではないかぐらいのことしか考えていませんでした。今はどういう時代なのかを知りたいと考えて、マルクスはやがて資本主義の時代は終わっていくでしょうと考え、宇野弘蔵も末期だと考えました。それを少し引き受けて、今、どういう時代なのかを知りたいと思っています。なぜ、そうしたストーリーが必要なのかと問われると、始まったものはいつか終わるだろうという直感に留まっており、論理的に回答することができません。4 に関しては、しっかりと答えることができません。すみません。

◆質問１１について

泉　報告資料の 21 枚目で労働論について話をしました。主体とモノを出発点にして、市場（流通論）の方向と社会的再生産（生産論）の方向に進んでいくという件です。一般的に生産論は労働過程論から始まるので、その際の出発点を主体とモノに設定してみたいと報告しましたが、それは無理があるのではないかというご指摘でした。仮にそのように設定した場合に、例えば感情労働はどう説明するのかというご質問です。労働主体が自分の感情をモノとしてコントロールするというのは見なしが過ぎる、現代の労働を考えるためには、デカルト的な心身二元論の批判が必要ではないだろうかというご質問です。ありがとうございます。

『これからの経済原論』の労働過程論のところで、主体とモノを出発点にして頑張って書いてみましたが、感情労働をどう説明するのかということだと思います。私自身が感情労働をしっかりと捉えられているかどうかは分かりませんが、感情労働においては、相手側を一種のモノとして捉えるのではないかと理解しています。はたらきかける主体側は自分の感情をコントロールしなければいけませんが、それは労働一般の目的を設定して、目的が達成できるように自分自身をコントロールする、主体が身体を動かしてモノをコントロールしていくような話と、それほど違いはないのではないかと考えています。感情労働の限りであれば、主体とモノという道具立てでもいけるではと思っています。

ただ、ご指摘のとおり、そもそも労働とは何かを考える際には、心身二元論の批判を根本的に考えてみなければいけないと思います。心身問題をしっかりと真正面から捉えて、それを労働論に反映させる必要があるだろうと思います。

◆質問２について

泉　今回は方法論を中心とした報告ですが、イメージしやすくするために開口部、外的条件の変化の具体例を挙げなさいとあります。20 世紀、現代、これらの違い等です。それとも今回は方法論なので、具体的に論じないほうがいいのかというご質問です。

具体的に挙げるとすると、方法論の他に私自身は貨幣論を少し勉強してきています。そこでは特徴的な分岐が出たのではないかと思っています。1971 年のドルショックで、はっきりと貨幣の領域では、究極的には金が貨幣であるという世界から、それとは異なるような世界に移行したことを、少しイメージしてもらうといいと思います。

貨幣の姿として或る単一の商品種、たとえば金が貨幣の地位につくという回路のつなぎ方から、1970 年代を境にして単一の商品種が貨幣の地位につくのではない回路のつなぎ方に移っていったと私は思います。現在、信用貨幣について活発に議論がされているところで、私の考え方が標準だとは思いませんが、貨幣の領域でそのようなスイッチが生じると、それが信用論の領域に波及して、兌換の銀行券から不換の銀行券に回路がスイッチするといったことをイメージしています。これが二つ目のご質問に対する回答です。

◆質問７について

泉　続いて、非商品経済的要因について、中身としてどのようなものを考えるか、というご質問です。これは先ほども村上さんのコメントで指摘してもらったところだと思います。「非」なので、商品経済的ではないという、とても広い領域を含むものになっていると思います。これまでに市場化されていないような領域と、国家のなかで商品経済に関わらないような領域をいまは考えています。ちなみに、国家の中でも例えば価格の度量標準を制定するようなところは商品経済的といっていいと思います。

◆質問３について

泉　開口部の活動は活発、不活発になることはあるのか、もしあるとすると開口部の活動の活動、不活発の程度を規定する基本的な要因とは何かというものです。私が描いているイメージと少し違いがあると感じます。開口部の活動が活発、不活発になるとはあまり考えていませんでした。開口部は外的条件が作用する箇所で、そこに或る条件が作用すると、或る形で商品経済、資本主義の姿が接続されると考えています。開口部自体の活動はあまり考えていません。開口部に作用するのが外的条件という理解です。

岩田　この二つは関連しますが、今回は方法論が中心ですが、あまり具体例が出されていません。それで少しイメージしにくいのでこういう質問が出ています。それから、逆にいえば今回は具体例を論じないほうが方法論としてははっきりするという理解もあるかもしれませんが、この二つはお考えと関連するものです。

泉　最後の二つ目のところは、先ほど答えたと思っています。ただ、実は違う研究会でも少しだけ方法論の話をしてみたときに、具体的な話を求められ、方法ばかりを話していて中身がないではないかと、とても怒られました。私が挙げることができる具体的な例は、先ほど言ったような貨幣と信用貨幣の領域です。自分が責任を持って挙げることができるのはさしあたりそこです。それと、資本主義の諸タイプを構成する必要があるというが、諸タイプというのはどのような具体的なイメージになるのかというご質問です。

◆質問１について

泉　事実上、スライド21~23の話ではないかと思います。外的条件が作用すると、いくつかの可能性のあるうちのどれかが論理をつなぐ。そのように考えていくと、例えばある論理のつなぎ方をすると、このようなタイプの色の資本主義と形になって（報告資料の22枚目）、別の条件がつながるとこの形と色の資本主義になっていく（報告資料の 23 枚目）。そういうイメージです。それだとどうでしょうか？タイプとはどういうイメージですかというご質問に対して、今の報告資料（21~23）のようなイメージだと答えさせてください。

岩田　はい。重商主義等のタイプの具体例です。そういうものかもしれません。意図的にそれはしない、とお考えですか？

泉　しないというよりは、まだできる準備がないのが正直なところです。

岩田　はい。具体的な事例をどんどんと挙げていくよりも、方法論としてもう少し厳密に考えてみてはというところがあると思います。

泉　そうとも言うかもしれません。

岩田　次は非商品経済です。村上さんもぜひ思うところがあればお願いします。村上さんの持論でもいいです。それから、泉報告を聞いて、こういうことを言いたいのではないかという意見でもいいです。先に泉先生から答えてもらって、その後に村上さんからもお願いします。

最初の質問については先ほど答えました。もう一つ関連した質問として、こういう質問があります。政府の活動についてどうなのかということです。これはちょうど村上さんがコメントで多少は論じていたので、ぜひ村上さんにもお願いしたいです。政府の活動についてです。商品経済ではなくて、非商品経済的な分析が必要ではないかということです。

私的部門の取り方がどういう形になるか分かりにくいですが、おそらく市場経済でしょうか。商品経済のことかもしれません。こちらは非商品経済と書いてあります。私的部門といっても家族も私的にな

ってしまうので、おそらく商品経済あるいは市場経済と考えたほうが、今回の報告には適した質問になると思います。質問者の意図にはそぐわないところもあるかもかもしれませんが、報告者の報告となじむということで、こちらは商品経済とします。それと、泉先生と村上さんの報告とうまくなじむことになります。

◆質問８について

泉　本日の話では、国家とか政府、市場がともに拡大している、手をたずさえて資本主義的な発展をしているということだが、政府の経済的活動を理論的に捉えるにはどうすればよいのか、一つの捉え方として、現代を分析するためには公共部門と私的部門の理論が経済原論として必要になるのではないかというご指摘をいただいています。

ご指摘はその通りだと思います。ただ、一気に二つを進めるのは結構、大変だと思います。例えば方法としては、商品経済を突き詰めて、本日の開口部、外的条件のようなところを明確にした上で、その次のステップで公共部門や非商品経済的要因が、資本主義に対してどのような作用を及ぼしていくのかという組み立てでいけるのではと直感的に思いました。ひとまず私からは以上です。

岩田　ありがとうございました。一般的に経済原論はこちらの私的部門と商品経済で論理を立てています。あと、公共部門は段階論として、外から補足するという感じで説かれてきました。しかし、それを経済原論の中に、既に公的部門があると考えることも一つの方法かもしれません。その辺りで村上さんもちょうどコメントで話をしていました。非商品経済的要因も含めて、村上さんの持論でも結構です。それから、泉報告ではこのように考えることができるのではないかという少し高度な回答でも結構です。村上さん、お願いします。

村上　難しいです。まずコメントと外れる可能性があるので、あらかじめ言っておきます。コメントで政府が非商品経済的だと言ったときに、商品経済的ではないけれど、再分配のようなことを考えると、商品経済的ではないにしても経済的ではないと言えない部分があると思いました。

スライドでは「政府」とあって、泉先生の口頭では「国家」とあったと思います。そこもおそらくいろいろとあります。政府と言うと、行政というかそちらの方向です。国家と言うにしても、政策的な側面なのか、それとも商品経済ないしは資本主義経済を最低限で成り立たせるためのルールを策定するものとしての国家なのか、もしかするといろいろと分けて考える必要があるところでした。

あとは、公共部門を考える話です。岩田先生からも指摘があったとおり、従来的には財政学に当たるのでしょうか。そういう領域は段階論ですることになっていたと思います。オフィシャルな回答としては、原論ではなく段階論ではありませんか、という回答だと思います。そちらを原論でするべきだというのは、今までになかった考え方でとても新鮮な指摘だとは感じました。

すみません。ずらしてしまったというか、あまり真正面から答えていないと思います。このような感じでいかがでしょうか。

岩田　あらためて泉先生から何かありますか。

泉　あらためて私からは特にありません。

岩田　分かりました。政府の関与にしても、財政支出のようなイメージがあります。それから、原論の中にも国家は少し出てくるところがあります。先ほど泉先生が言われたように、何を貨幣にするのかと決めることも多少はあります。

質問がもう一件あります。今回の趣旨とは多少は違うかもしれませんが、一つだけあるので共有します。一般的にはロシア革命、大恐慌で資本主義は変わって現代資本主義になったという言い方をします。現代といっても100年以上前の話になりますが、それの影響についてです。この辺りの文章が追いにくいです。社会主義が崩壊したので、ロシア革命の影響がなくなったのではないのかと思っていませんか、とあります。この影響がなかったかのように論じているのではありませんか、という質問内容です。

◆質問１０について

泉　過小評価をしているわけではないと自己認識しています。ロシア革命、それから大恐慌の資本主義、これらを受けて第１次世界大戦以降、資本主義は末期的な症状を呈してきたというストーリーが説得力を持っていたことは、そうだと思います。末期と見ると、1970 年代の大きな転換もいよいよ資本主義の最末期と見えるかもしれません。

しかし、もう一つの見方として、先ほど具体的な例として、貨幣の姿が変わったと言ってみました。

貨幣の姿は金貨幣や単一の商品種が貨幣の地位につくことが本来の資本主義の貨幣の在り方だと見ると、1970 年代以降の現実はいよいよ資本主義はどうしようもなくなった、末期だと見えると思います。この見方に対して、1970 年代以降、資本主義のもう一つの貨幣の在り方が実現したと見ると、末期、爛熟、崩壊というような形とはまた違う視点で見ることができるのではないかと、私自身は思っています。これで答えになっていますか。どうですか。

岩田　資本主義の変化のきっかけはいろいろとあると思いますが、それぞれの資本主義のタイプが原論からどのように、どこができるのかということになると思います。ロシア革命や大恐慌、それから物理的な発見等のさまざまなきっかけがありますが、そのきっかけによって出来上がった資本主義はどういうタイプであって、原論からいえば開口部のさまざまな視点、観点が組み合わさることによって、どういうタイプになっているのか、ということが今日の報告の視点だと思います。

それから、資本主義のさまざまなタイプは、多様な出来事から論じるのではなくて、原理論の開口部にある多様なパターンの組み合わせから、資本主義のそれぞれのタイプを論じてみようということが今回の趣旨だろうと思います。

泉　はい。

岩田　それで、質問が出尽くした感じもあります。もう少し時間があります。本日の全体の報告、質疑応答等を聞いて、村上さんからあらためて泉先生の報告へのコメントというか意見、感想等があればお願いします。

村上　はい。では、コメントに対するリプライを受けてです。3 番目の質問のところで、2 パターンの答え方がありました。段階論が駄目だとするときで、純粋な資本主義論と旧来型の発展段階論が２個で一つのところが一つ目の回答です。一応、このスライドの中でもそういう筋でされていたということです。おそらくこれは取り方が２パターンぐらいあると思います。

段階論で論じられているのは純粋化傾向のようなものということが、原理論の成立にも関わってきている側面が一つです。それと、16 枚目の図のところで、中のコアに純粋資本主義があるという捉え方が旧来の段階論にあったというところがあると思います。そういうところだと、旧来の原論と段階論は卵が先かニワトリが先かではありませんが、そういう変な絡み付き方をしている側面があると思います。それに対して変容論的なものは、変な話ですが、先にこういう段階論的な歴史認識ありきで、変容論が原論に対してだけ応答している感じがします。変容論にも変容論に対応する段階論に当たる直感的な歴史認識のようなものがあるのではないかと思います。表現がつたなくて申し訳ありませんが、それが一つです。

泉　ありがとうございます。宇野弘蔵が原論をつくったときは、歴史認識としてある時期の純粋化傾向があった、それを独自に再構成して、極限まで引き伸ばして、純粋の資本主義社会を組み立て、それを核にして、そこにさまざまに非商品経済的要因が作用するという見方をすることで原論と段階論が１セットになっている。これに対して変容論的アプローチには、そうしたことに相当する歴史的な直感があるのかというご質問と理解してもいい感じですか。

村上　そのとおりです。くみ取ってもらって、ありがとうございます。

泉　いえ。最初のほうでも少しだけ説明しましたが、帝国主義段階の基本的な見方は、旧来の社会関係を維持しながら、国家がかなり前面に出てくるということで、資本主義は全面化しない、どこまでいっても旧来の社会関係を全面的に解体しないで部分的な存在にとどまるというものだと思います。この見方に対して、1970 年代か何年代なのかはおくとしても、新興の資本主義的な発展や、先進的な資本主義の中で進行する市場化のような現象が、変容論的アプローチが原論のレベルだけではなく歴史的なところと対応していく直感ではないか、と私は理解しています。答えになっていますか？

村上　ありがとうございます。

岩田　ありがとうございます。もう一個、質問が出ていたのを忘れていましたので、出しておきます。

◆質問６について

泉　非商品経済を資本主義の外側に考えているようですが、資本主義が発展していくと、その内部に巨大企業内の官僚化、労働組合と大企業の関係といった非商品経済的要因が広がっていくことはありませんか？　というご質問です。最近の流れとして、資本同士が固定的な関係を形成することは、原論の中でも論じられていると思います。巨大企業内の官僚化や労働組合と大企業の関係といったものが非商品経済的要因に相当するのかどうかが、即座には私自身はよく分からないところです。

　これもイメージで申し訳ありませんが、非商品経済的というものも抱えて、全体として資本主義の姿ということではないかと考えています。そういうイメージを持っています。そこまでしか答えることができません。

岩田　ありがとうございます。本日の村上さんのコメント等も含めて考えると、非商品経済といってもいろいろとありそうな感じがします。

泉　そうです。

岩田　村上さんがこだわっていたのは、商品経済が浸透する対象となる昔ながらの非商品経済と、国家のような非商品経済は違うだろう、という話もありました。それから、最近の議論にある資本同士間の組織化のようなものもあります。それを非商品経済と言うのかについてはいろいろとあると思います。非商品経済といってもいろいろとあるので、さまざまな議論を聞いていて一言では済まないように思います。組織化も商品経済の取引の在り方が変わっただけと割り切るかもしれません。でも、違うもかもしれないとも思うかもしれません。

　今、それに関連してちょうど質問が来ました。泉先生は大変そうです。こちらは村上さんのほうが得意かもしれません。

◆質問９について

泉　私も不勉強でグレーバーの話を知らないのですが、相互扶助関係を非商品経済的要因として考えるか、とあります。相互のつながり方が欲得ずくならば、商品経済的なような気もします。そのようなものを排除した、本当に持ちつ持たれつ的な感覚は非商品経済的要因として直感的に考えてしまうような気がしました。

村上　記憶が定かではありませんが、基盤的コミュニズムというか商品交換的なものとヒエラルキーのようなものが対比して三つぐらいあって、その中の一つのところだったと思います。『負債論』などで論じられているのは、そういう感じだったと思います。

　本日の私のコメントでは、どちらかというと商品経済的なものの浸透によって解体されていく非商品経済的な要因です。家事労働等がそうだと思いますが、そのようなものが基盤的というかコミュニズム的なものに近いと思っています。ただ、グレーバーの言う基盤的コミュニズムはより広い概念だと思う

ので、それを全体として非商品経済的要因として私自身が考えていたかというと、そこまでは考えていません。
　会社の中で鉛筆を貸し借りするようなところで、いちいち貸し借りを考えないでしょうということも、基盤的コミュニズムの一つの例として出ていたと思います。そういうところまで考えてしまうと、基盤的コミュニズム全体として非商品経済的要因と言っているかというと、私に関してはノーです。（※後日、村上氏より追加の説明あり）

岩田　ありがとうございました。それではそろそろ時間になります。最後に泉先生からのまとめをしてもらいます。議論の方向が非商品経済に広がっていったところもあります。今回は市場経済をメインとした経済原論の中で、モードが変わるというかタイプが変わるということです。そのときに外的条件があって、その辺りから非商品経済がどんどんと広がっていくところもあります。突然で難しいかもしれませんが、その辺りの整理として、今回の質問を踏まえた上で、本日の報告の狙い等をあらためて説明して、最後の発言としてほしいです。泉先生、いかがですか。

泉　ありがとうございました。本日、報告しました論文を書いた段階ではまだあやふやな状況で、とりわけ商品経済、非商品経済は悩ましいところでした。報告をするために少しスライドを作りました。それから、村上さんからはコメントをいただき、あらためて非商品経済的要因と言われていたところを、切り分けていく必要があるだろうと自覚できたと思います。
　開口部のところに作用するのが、非商品経済的要因ということではありません。そこにある条件が加わると、総体として抱えている資本主義の内部の非商品経済的要因が、どのような影響を受けていくのかについては、考えてみる必要があり、それはいくつかのタイプがあるという話の形で考えていく必要がある気がしました。いずれにしても、報告したことで非商品経済と言っていたものが、自分の中では少し明確になりそうな気がしました。ありがとうございました。

第２部：商品貨幣論の再構成

報告者：結城剛志（埼玉大学・教授）

報告資料（結城）

商品貨幣論の再構成

2021年10月23日
東京経済大学学術フォーラム
「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」

結城　剛志
埼玉大学大学院人文社会科学研究科

問題関心

- 現代の貨幣を射程に収める貨幣論は構想できるか？
- これまでのマルクス経済学はどのように貨幣を説明してきたか
- これからのマルクス経済学はどのように貨幣を捉えるべきか？

教科書

- **さくら原論研究会『これからの経済原論』ぱる出版、2019年**

- 書評
  - 瀬尾崇『季刊経済理論』第57巻第3号、2020年
  - 結城剛志「『これからの経済原論』にたいする瀬尾崇氏へのリプライ」『季刊経済理論』第58巻第2号、2021年

目次

1. 現代資本主義の特徴
2. マルクスの貨幣論
3. 信用貨幣の捉え方
4. 商品貨幣論の再構成

④商品貨幣論の再構成

「貨幣は、商品に内在しているが視覚的に認識できない価値が目に見えるかたちで表に現れたものであり、価格は貨幣で表現された商品の価値の大きさである。商品の価値をベースに貨幣を説明する理論を**商品貨幣説**という」（さくら原論22頁）。

- この商品貨幣をベースに信用貨幣を説明する。

変容論アプローチ

理論レベル	概念の展開				
貨幣形態		金貨幣 兌換銀行券	預金通貨 不換銀行券		
変容論		物品貨幣	信用貨幣		**開口部** 外的条件の作用ポイント
原理論	商品	貨幣（＝商品貨幣）		資本	
	使用価値 価値	使用価値	価値	商業資本 銀行業資本	

資産	負債
金融資産（商品）の価値	**銀行券** **預金** **信用貨幣**
	資本

- 3　商品価値ベースの信用貨幣
- 債権債務関係の中で信用貨幣が創造される。
  - ただし、信用創造される量は、商品の価値量に限界づけられる。
- 返済還流、商品販売の確実性
  - 貨幣は物品貨幣のみ、信用貨幣のみの**2パターン**。
  - 物品貨幣に基礎づけられて、信用貨幣が現れる二階建て構造をやめる。
- 不換銀行券**制度**
  - 銀行券の無期債務化
  - 兌換請求が行われない景気循環の安定性が確保された特殊な状態に現れる。

- 信用貨幣と不換制の両面を併せ持つ現代貨幣が資本主義に生成される**契機**を原理論の内部に明示し，商品の素材や使用価値から説明する単純商品貨幣説とは区別された，**価値から説明するマルクス派の商品貨幣説を再生する。**
  - 物品貨幣と信用貨幣は「単純な商品流通」の理論レベルで並び立つ。
    - 商品　→　金貨幣　→　信用貨幣　といかないようにするためには？
      - **商品概念**の再確認が必要。

マルクスの金貨幣論の一面性

- 商品を、使用価値と価値の二要因で概念化し、価値表現の発展を追跡する価値形態論を展開したにもかかわらず、商品の価値の大きさに統一的な表現を与える一般的価値形態の位置には金が収まると結論づけた。
- 金になる理由は、歴史的・制度的・文化的要因、突き詰めると「最も適した使用価値を有する商品に帰着する」（宇野）として、使用価値論に傾斜した説明となった。
- マルクス貨幣論の複雑な論証過程にもかかわらず、結論から見ると物々交換において任意の財を貨幣とみなす**財貨幣論**と変わるところがない。これでは**商品貨幣論**とはいえない。

用語

- 商品貨幣　≠　物品貨幣
- 商品貨幣　≠　金貨幣
- 商品経済　≠　物々交換

☆　用語を分けるためには、概念を整理しなければならない。

商品 → 物品貨幣
　　→ 信用貨幣

☆　特定の制度、歴史的事例にとらわれない、
より抽象的な基準を示す

前提条件

- 対象：**資本主義**
  - 同種商品の大量性
  - 商品の複数性
  - 主体の複数性
  - 利得追求
- 『資本論』解釈において**論証されていること**と**想定されていること**，また**論証すべきこと**とが明確に区別されていなかったことが問題を複雑にしてきた。
  - 商品経済的論理が及ぼす影響の範囲を特定する。
  - 制度的な要因（兌換，不換，商品体の選定）は説明しない。
  - 制度に働く力を分析する。

再構成された価値形態論

- 主体は**資産**としての商品ストックを有する。
- 商品は**売り物**，売る以外に使い道がない。

- 貨幣のない商品経済の困難
  - 価値表現
    - 主体が所有する商品の価値の大きさがわからない
  - 交換要求
    - 主体が欲する商品を獲得する手段の欠如

暫定的な結論

- 貨幣形態　→　外的条件

- 物品貨幣　→　兌換券　→　単種商品の価値に対する債務
- 信用貨幣　→　単種商品とは兌換できない　→資産（合成商品）の価値に対する債務

簡単な価値形態

- 価値表現
  - 小麦10tの価値量は鉄1tの量に等しい。
  - 価値形態論の展開から一般的価値形態を導く通説通りのルートがある。

A：小麦10t　＝　鉄1t

- 交換を求める形態
  - 1tの鉄を欲するAは資産として有する商品の中から小麦10tを差し出す。
  - 1tの鉄が不動なのに対して、相対的価値形態に置かれる商品には任意性がある。

A：小麦10t　→　**1tの鉄**

間接交換を求める形態

- Aは1tの鉄を欲する。
  - 200頭の豚、30tの砂糖は鉄を獲得する手段となる。

A：小麦10t　→　**1tの鉄**
B：鉄1t　→　200頭の豚
C：豚200頭　→　30tの砂糖

☆　間接交換の媒介物の任意性

拡大された価値形態

A：小麦10kg＝1kgの鉄
＝鉄1kg
＝豚200頭の現物（使用価値）
＝豚200頭の価値の債務証書

☆　間接交換の媒介物の任意性から、
価値請求権としての信用貨幣が取り出せる。
☆　単種商品ベースの信用貨幣論

評価を求める形態

A：小麦90t　＝
A：合成樹脂4t　＝
A：（**小麦2t, 合成樹脂3.2t**）＝

複数商品による価値表現

A：小麦10t→**1tの鉄**
B：鉄1t→200頭の豚
C：（豚200頭，天然ゴム200kg）→60tの砂糖

☆　主体の資産、欲求の指向性、
相対的価値形態の任意性から、
複数商品による価値表現が現れる。

複数商品による価値表現

- C：証券→60tの砂糖
  - （豚200頭，天然ゴム200kg）＝証券
  - 豚，天然ゴムと天然ゴムの代理物の場合、証券バスケットの構成（比率）は組み替えられない。
  - 証券バスケットの価値量に対する請求権の場合、価値量を安定させるために、証券バスケットの構成は組み替えた方がよい。
  - 間接交換の媒介物の任意性から、証券バスケットの使用価値が不問にされる場合、この証券が求められる可能性がある。

- A：小麦10t　＝　3単位の証券
  - ここで、証券は、複数種の商品の価値に対する請求権になっているため、特定の商品を引き出すことができない。
  - 小麦の価値の大きさを表す。
  - 間接交換の媒介物。
    - 商品の価値をベースにした商品貨幣であり、かつ、商品の価値に対する請求権としての信用貨幣。
    - ただし、複数種の商品のバスケットの価値に対する請求権としての証券が等価形態に置かれるための条件が多い。したがって、物品貨幣（～金貨幣）に分岐する可能性を排除しない。

資産	負債
単種商品の価値 **複数種商品の価値**	**債務証書** **信用貨幣**

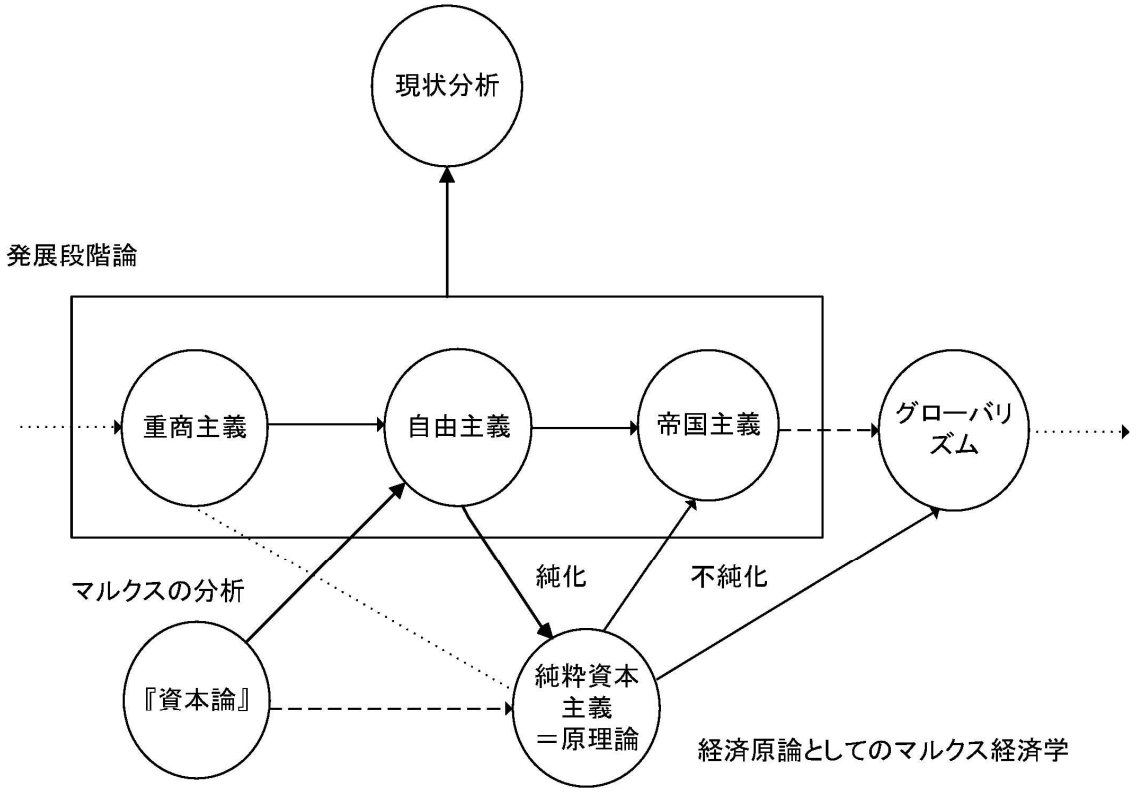
- 3　商品価値ベースの信用貨幣
  - 単種商品の価値ベースの信用貨幣
  - 複数種商品の価値ベースの信用貨幣
    - いずれも単純な商品流通、価値形態論の理論レベルから導ける。
  - 債務証書が銀行券等の具体的な形態をとるためには、
    - 信用貨幣の発行主体が資本
      - 資産価値の安定性を利潤追求に結びつける
      - 商業信用ベースの金融債権の集中
      - 銀行間組織の形成

①現代資本主義の特徴

- 国際通貨制度の転換
  - 信用貨幣は、貨幣商品・金との関係を裁ち、銀行券は兌換銀行券から**不換**銀行券へ。預金通貨も金を引き出せない。
- 国家独占資本主義
  - 管理通貨制度、裁量的な財政金融政策の展開
- 純粋資本主義からの離脱
  - 国際金本位制、自由競争的な市場経済、小さな政府

現代資本主義の特徴

- 不純化した資本主義
  - 福祉国家、社会民主主義、にじり寄る社会主義
  - 貨幣（銀行券、預金通貨、鋳貨）への信用が金との兌換によって支えられていた時代が終わり、金の国際的な支払手段としての役割も低下した。
  - 不純化した資本主義における、金との関連が説明できない貨幣はどのように説明することができるのか？
    - できる/**できない**
    - 貨幣/**非貨幣**
      - 現代資本主義は資本主義の純粋な状態から遠く隔たった地点にまできてしまった。
      - マルクス経済学の貨幣論は現代資本主義の分析の役に立たない。
        - 資本主義の動態分析に大きな役割を果たしてきた貨幣論の皮相的な顛末に疑問を感じてしまう。



現代の貨幣論への不満

- 現代の貨幣を体系的に説明できる貨幣論がない。
- さまざまな貨幣論が乱立していて貨幣の統一的な理解が妨げられている。
- もちろん、マルクス貨幣論も諸理論の中に含まれる。
  - マルクス貨幣論を**商品貨幣論の観点から**再構成し、原理論に位置づけ直す必要がある。
    - 商品貨幣論の観点から、資本主義の歴史的発展を理論的に捉え直す。

- 現代の貨幣を射程に収める貨幣論を展望する。
- そのための鍵は**マルクスの商品貨幣論**にある。

- しかし商品貨幣論の分が悪い。
  - それにもかかわらず、なぜいま商品貨幣論を問い直さなければならないのだろうか？

②マルクスの貨幣論

- いずれかの商品が貨幣になる論理的可能性を示す。
- 貨幣商品が金に帰着することを示す。

『資本論』の説明

「しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この**貨幣形態の生成**を示すことであり、したがって、**諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展**をその最も単純な最も目だたない姿から光りまばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に**貨幣の謎**も消え去るのである。」(Marx [1962], p.62; 93-94頁)

価値形態論

- 「一般的価値形態は価値一般の一つの形態である。だから，それは**どの商品にでも**付着することができる」(Marx [1962], p. 83; 130頁)
  - 価値表現の発展を追跡していくと、**どの商品も**が商品の価値の大きさを一般的に表現する媒体になりうる**論理的な可能性**があることがわかる。
- 「金の**第一の機能**は，商品世界にその**価値表現の材料**を提供すること」(Marx [1962], p. 109; 171頁)
  - 商品の価値の大きさを貨幣の量で表現する、そのための統一的な媒体。価値尺度。

金貨幣になる理由

- 歴史的・慣習的な選択
- 理論的な前提（仮定）
- 価値実現論
- 市場の外来性
- 世界貨幣

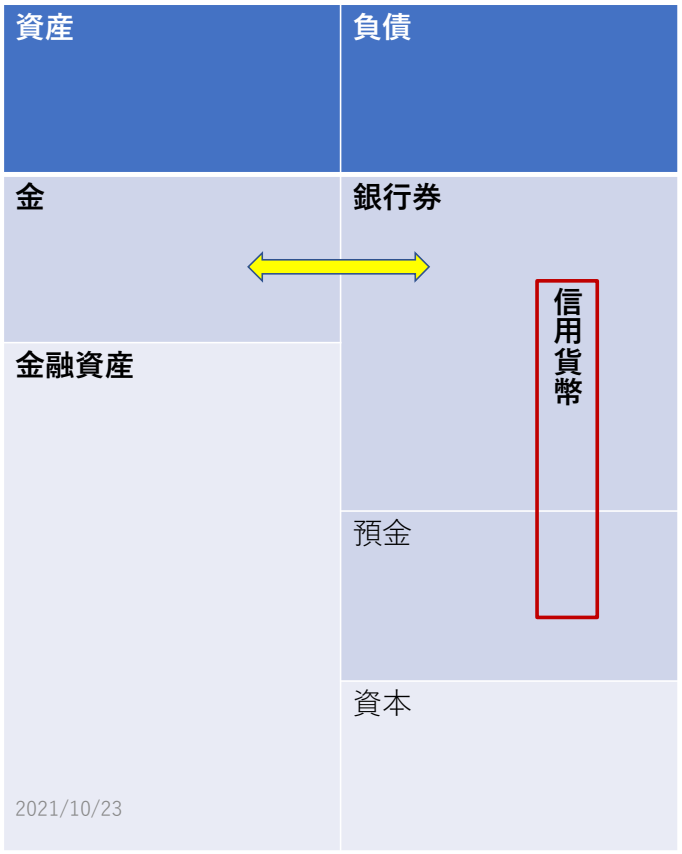
- マルクスの貨幣論は、
- 「価値表現の発展」（論理的・原理的展開）
  - どの商品が貨幣商品に選択されるか、論理的には決まらない。
- 歴史・制度・慣習・素材・使用価値
  - 貨幣商品が金に落ち着く

- 後者の結論だけ採るとマルクス貨幣論＝金貨幣論となる。
  - 金貨幣論は、なんらかの品物が貨幣になることを論じる商品貨幣論のマイナーバージョンに過ぎないことになる。
- これでは、商品論において、**商品と財を区別**した甲斐がない。
  - マルクスの資本主義分析が商品分析から始まる以上、**商品概念**にもっとこだわる必要がある。

- マルクスの金貨幣論は自明のものとして受容される。
  - 「それと同時にまた当然のことであるが、一般的等価物は等価物商品として**最も適した使用価値を有する商品に帰着する**ことになる。金、銀が、そして結局**金が**、かかる一般的等価物として固定され、**貨幣となる**のである。」（宇野弘蔵『経済原論』36頁）
    - 現代資本主義を射程に含む貨幣論が展望できない。
    - マルクス金貨幣論の射程の短さに疑問をもつ研究者が増えた。
    - このような疑問は、必ずしも貨幣論研究そのものから出てきたわけではなく、むしろ**信用論研究の蓄積**の中から出てきた。

③信用貨幣の捉え方

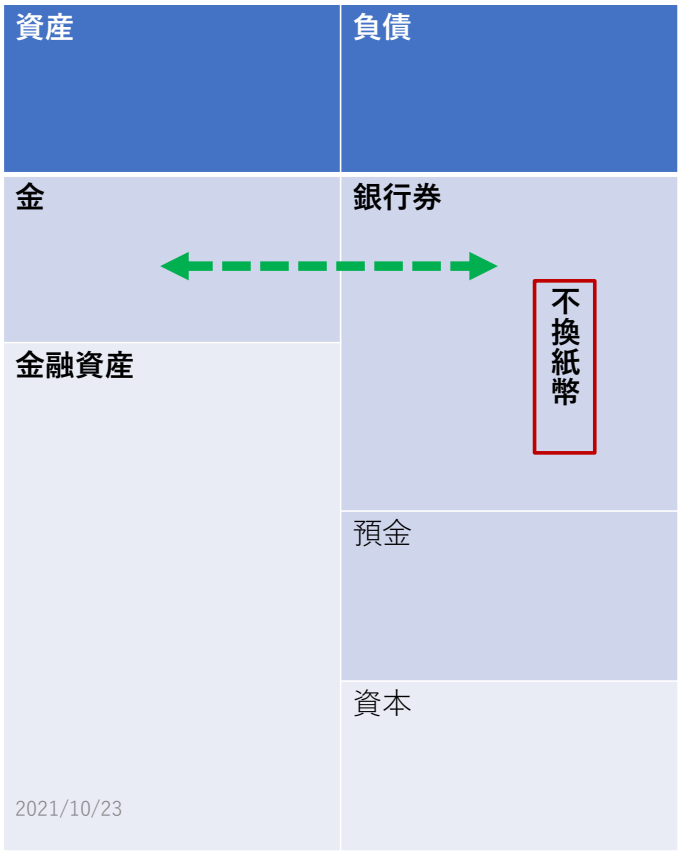
- 信用貨幣の捉え方
- 1　金兌換ベースの信用貨幣
- 2　返済還流ベースの信用貨幣
  - 兌換準備金の消極化
- 3　商品価値ベースの信用貨幣
  - 兌換停止の無期化



- 1　金兌換ベースの信用貨幣
- 銀行券は銀行の資産の中の金に対する請求権なので、銀行券の価値は、金との交換可能性に支えられている。
  - 金の使用価値・素材
  - 金の価値
    - 支えられ方は二重。

1　不換紙幣論

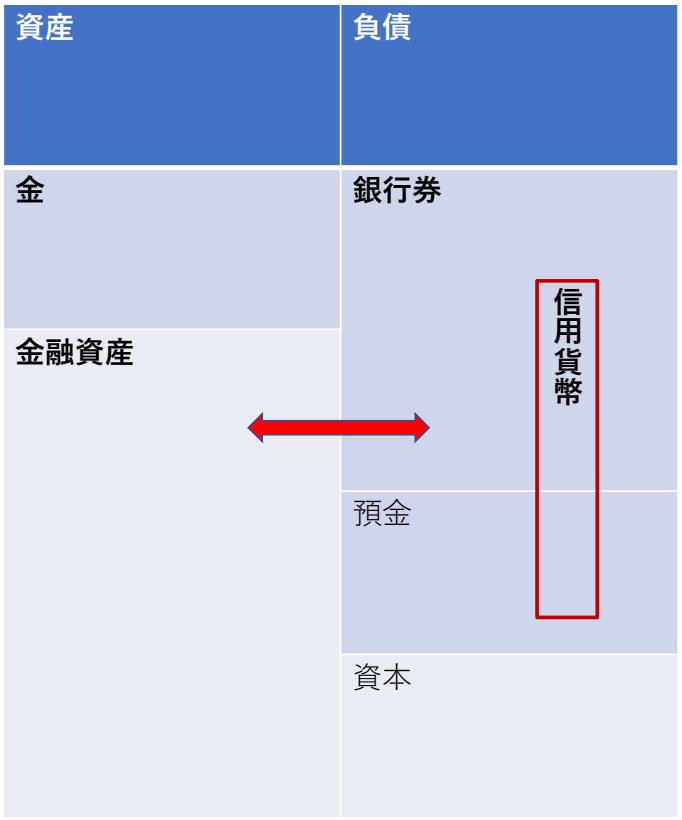
- 「われわれが**債権・債務**というばあい，その内容はとうぜん価値請求権＝貨幣請求権・価値(貨幣)の支払約束ということでなければならない。そして銀行券のばあいは，金請求権・金支払約束ということでなければならない。☆不換銀行券は兌換の停止によってこのような金債務がなくなったのだから，われわれは不換銀行券には，もはやなんらの債務性したがって手形性もなく，それはつまりは不換紙幣に転化してしまったのだと説くのである。」
  - 麓健一［1967］『不換銀行券論』青木書店(28頁、強調は引用者による)



- 1　金兌換の論理に着目した解釈
- 金兌換がなくなると、
  - 資産（金）と債務（銀行券）が無関係になる
  - 金の価値の裏付けを失う
  - 金を媒介にした商品経済との関連性を失う
    - ×　金貨幣
    - ×　商品貨幣
    - ×　信用貨幣
- **不換紙幣論**が妥当となる。
  - しかし、無価値な不換紙幣が流通するのはなぜか？　という新たな問題が生じる。

不換紙幣論の問題点

- 金貨幣（金兌換）ベースの信用貨幣を考えると、金兌換が停止された以降の貨幣は**不換紙幣**となる。
  - **価値論**との関係がなくなる。
    - 商品経済や社会的再生産との関連が説明できなくなる。
    - 貨幣の供給量のみの問題となり、貨幣数量説に近づく。
      - 貨幣価値の問題
  - **国家紙幣論**に理論的な根拠を与える。
    - 法貨規定、強制通用力
    - 貨幣は経済学の考察対象から離れる。
    - 不換紙幣、国家紙幣は、商品貨幣論の論理から展開できない。
      - マルクス貨幣論が不要になり、貨幣論のないマルクス経済学の役割も低下する。



- 2　返済還流ベースの信用貨幣
- 商業手形の割引等によって銀行券を貸し付け、返済によって銀行券が還流する。
  - 好況期は返済還流が安定するので、兌換は請求されない。
  - 兌換請求は、恐慌期のような特定の時期に限られる。
  - 銀行券の価値は金のみで支えられているのではなく、資産全体で支えている。
    - 金準備の役割の消極化

41

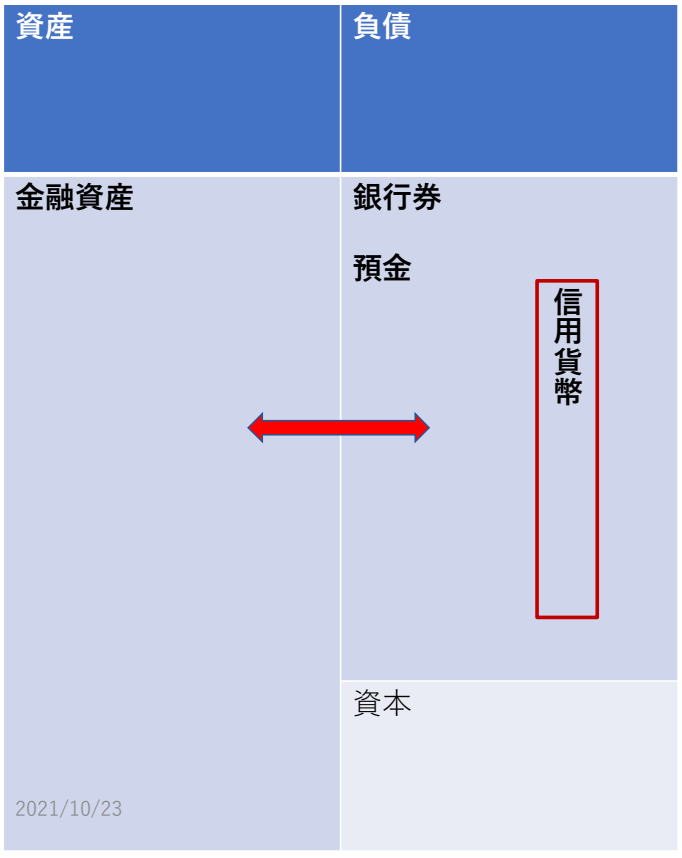
2「銀行手形ないし銀行券の流通性･･･、あるいは銀行の支払能力は、直接的には銀行の資本の一部を構成する支払準備金によって支えられているといってよい。銀行券の支払のことをとくに**兌換**といい、そのための準備のことを**兌換準備金**という。この支払準備は、しかし、銀行の支払能力にとって必ずしも実質的な基礎をなすわけではない。銀行はその専門的な情報収集活動にもとづいて広範な産業資本ないし商業資本の中から支払能力が確実に信用しうる諸資本の手形を選別し、それらの諸資本の手形を集中代位することによって、それらの諸資本による円滑な返済を銀行の手もとに集中・集積しているのであり、**銀行の債務にたいする支払能力の実質的な基礎**はここにあるのである。」（山口重克『経済原論講義』227頁）

- 割引・貸付によって信用貨幣が創造され、返済によって信用貨幣が消滅する。
- 信用貨幣の研究が進み、不換制度が長期に安定するようになると、金貨幣を当然の前提とする貨幣論に疑問が沸くようになる。しかし、金貨幣の消極化＝商品貨幣の消極化と考えるのはいきすぎ。

42

信用貨幣論

- もう一つの金貨幣論批判の行き方もある。
  - 2の論理（返済還流）を突き詰めると、金兌換はそもそも不要となる。
- 吉田暁［2008］「内生的貨幣供給論と信用創造」『季刊経済理論』第45巻第2号，15–25頁



- 2‘　預金設定による貸付によって、信用貨幣が創造され、返済によって信用貨幣が消滅する。
- 返済還流の確実性（大量の不渡りを出さない）だけが必要。
- **貨幣は信用貨幣のみ。**
  - 金貨幣は始めからない。

金債務

- 「信用貨幣を銀行の一覧払い債務としながらも，信用関係の中で発生・消滅という性質を中心とする定義には異論が多い。例えば『大月金融辞典』での『信用貨幣』……は『貨幣支払の債務証書が，貨幣に代わってその支払手段機能に基づいて流通することである』と，本来の貨幣（金）の返済約束を中心に置いて規定している」（吉田［2008］15頁）。
  - 金貨幣を前提とすると、
    - 信用貨幣は，貨幣支払の債務証書，本来の貨幣は金なので，金債務，金としての貨幣請求権となる。

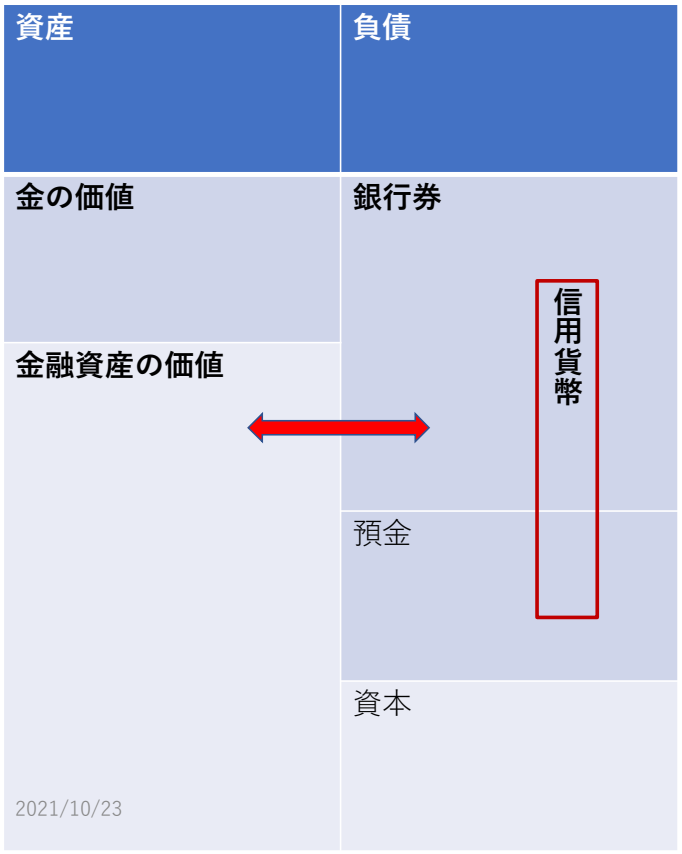
問題意識

- 金本位制から長期間離脱し続けている現実を踏まえて「貨幣・信用に関しても，**現在の中央銀行券・中央銀行預金，銀行預金……というシステムを前提に理論化を図るべきではないであろうか**」（吉田［2008］16頁）と提起される。
- そのように理論化することはもちろん可能であろうが，経済学を一時代の特殊理論とすることへの危惧がないわけではない。
  - 「現在の中央銀行券・中央銀行預金，銀行預金･･･というシステム」は，被説明対象。
    - さくら原論「第3篇　機構論」

問題意識

- 現代的な信用システムを前提して理論化した場合，**貨幣の原理的な作動**と**制度によって変化させられる関係**とが不明確になることはないだろうか。
  - 「資本主義の異質化」の原理と「兌換の停止」という制度変化とを切り分け，「金本位制から離脱して80年近く，19世紀のそれからは異質化したといっても**資本主義でなくなったわけではない**」（吉田［2008］）との認識と整合的な原理を，マルクス貨幣論の論理に即して再構成する。

- 「**貸借関係から貨幣が生まれてくる**ことがあるのは確かであるし、現代の不換日銀券もその延長線上にある**信用機構の創出した貨幣である**ことも確かであるが、しかし、貸借関係は貨幣の貸借関係であるから、**貸借関係に先行する貨幣概念をまず想定せざるを得ないではないか**と思われる。貨幣とは何かという場合、それは貨幣の貸借関係から生まれたものだというと、これも永遠の循環論になってしまう。」（山口［2008］84-85頁）
  - 債権債務関係から信用貨幣を説明する純粋信用論は「永遠の循環論」（トートロジー）になる。
  - 原因と結果、因果関係を説明するのが理論だとすると、吉田の説明にも納得ができない。
    - × 金貨幣、不換紙幣・国家紙幣、貨幣論のない信用論
      - どれも納得のいく説明となっていないが、マルクス貨幣論に対する**大きな問題提起**ともなっている。同時に、手が限られてきている。
      - 商品貨幣論の出発点に立ち返って考える。



- 3　商品価値ベースの信用貨幣
- 返済還流が確実なら、兌換は請求されない。
- 金は資産の一部に消極化される。
- 兌換停止の制度化・**無期化**
  - 不換銀行券制度
- しかし、銀行券と預金は相変わらず銀行の負債なので、銀行の資産価値に対する請求権である。この債務が請求されない状態を維持しなければならない。
  - 国家独占資本主義以降の体制の歴史的役割
  - 金貨幣論では分析できない

49

現代資本主義の貨幣研究

- 段階論的アプローチ
  - 現代の貨幣は金貨幣論から見ると貨幣ではない。
- 信用論的アプローチ
  - 返済還流に着目すると、支払準備金の役割は限りなく小さくなる。
    - 貨幣と何か？　があらためて問われるようになった。
- 貨幣論的アプローチ
  - 貨幣は、物品貨幣と信用貨幣の二方向に分岐する。
    - 商品の二要因にこだわる。
    - 貨幣形態が論理的に定まらないことの意味を再考する。
    - 外的条件が作用するポイント（開口部）を明示する。
      - 一つの対象に向かって3方向から攻めている。3つのアプローチが出会うポイントの特定が今後の研究課題。

2021/10/23

50

主な参照文献

- 泉正樹［2019］「商品貨幣論の現代的展開」『季刊経済理論』第55巻第4号，7–17頁
- 小幡道昭［2009］『経済原論：基礎と演習』東京大学出版会
- 小幡道昭［2012］『マルクス経済学方法論批判—変容論的アプローチ』御茶の水書房
- 小幡道昭［2013］『価値論批判』弘文堂
- 江原慶「価値形態論における計算貨幣」『季刊経済理論』54巻4号、2018年、55-67頁
- さくら原論研究会『これからの経済原論』ぱる出版、2019年
- 山口重克［2006］「電子マネーの貨幣論的考察」，木立真直・辰馬信男編著『流通の理論・歴史・現状分析』中央大学出版部
- 山口重克［2008］『現実経済論の諸問題』御茶の水書房
- 吉田暁［2008］「内生的貨幣供給論と信用創造」『季刊経済理論』第45巻第2号，15–25頁
- SGCIME編『マルクス経済学　市場理論の構造と転回』桜井書店、2021年
- Marx, K. [1962] Das Kapital, *Karl Marx, Friedrich Engels Werke*, Band 23, Berlin: Dietz Verlag.
- Schumpeter, J. A. [1994] *History of Economic Analysis*; Edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter; and with an Introduction by Mark Perlman, London: Routledge.
- Smith, A. [1981] *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*; General Editors, Campbell, R.H. and Skinner, A.S.; Textual Editor, Todd, W.B., Indianapolis: Liberty Fund.

口頭報告（結城）

結城　報告テーマについて始めに話します。表題についてです。表題は商品貨幣論の再構成としました。貨幣論自体は、私は近年に関心を持って研究してきたテーマです。本日、参加していると思いますが、埼玉大学のゼミでもここ何年かは貨幣論に取り組んでいます。

本日の問題になるのは、貨幣論そのものというよりも、商品というように頭に付いている言葉になると思っています。学生だけではなくてさまざまな方と話をしてみると、商品という言葉がなかなかすんなり入ってこないことがあります。商品、コモディティは新聞やニュースで小麦や大豆の実物を指すことが多いです。また、授業等で触れる経営学の内容だと、陳腐化したものや大衆向けのものを指すことがあります。商品貨幣と言われると少し苦い顔をされるというか、あまり簡単に入ってくる言葉ではないと思っています。

あと、最近はあまり引き受けないようにしていますが、近年は貨幣理論が非常に一般的な話題として取り上げられることが多くなっています。そのこと自体はうれしく思っていますので、メディアでコメントを求められると商品貨幣論について説明してきました。大抵の反応は商品とは小麦のような実物なので、実物をベースにしてその代表である金が、貨幣の本質であると主張していると受け取られることが多かったと思っています。

商品貨幣論と金貨幣論は直接に完全に重なる議論ではないことは、本日の話の中でも説明したいと思っています。そう言われても分かりませんという反応が返ってくることが多かったと思っています。

それがマルクス経済学の文脈では、長い間、金貨幣論にこだわって研究されてきたこととも関係があります。そういう意味では、商品貨幣は非常に手あかにまみれた用語になっており、マルクス自身が『資本論』で使用していた言葉でもないので、少し使いにくいところがあります。

商品貨幣という用語に着目して貨幣論を考えてみると、この概念が割と曖昧に使われていることが多いと感じることがあります。マルクス経済学以外の人が使う場合は、商品という概念に直接、それほどのこだわりがない、そもそも概念だと思っていない、何らかの物だと思っているということだと思います。しかし、マルクス経済学にとっては、さまざまな教科書を見てもらうと分かるように、商品という概念が経済学のコア、出発点に置かれるので、商品貨幣という名前をつけて議論をするからには、商品概念にこだわって考える必要があります。本日の話はマルクス経済学の立場から、商品貨幣を説明してみたいということです。商品貨幣一般とは少し違うかもしれません。

では、問題・関心ですが、本日の話の問題について、現代の貨幣を経済学で説明できるのかということです。みなさんはどのように考えていますか。ここで現代の貨幣と言っているのは、銀行券、お札です。それから預金通帳に記載してある数字で表れている預金通貨です。これらのことを言っています。さらに、最近の貨幣的な現象の展開という意味では、電子マネーの普及や仮想通貨、暗号通貨等の開発が進んでいます。貨幣の変化が資本主義の発展や変容をダイレクトに反映して、現象面での変化が早い分野になっていると思います。それに対して、理論的な説明が現実に対して後追いになっていて、なかなか変化のスピードに追いつかない分野です。

貨幣論は経済学が解決しないといけない、さまざまなテーマの中で、マルクス経済学の中では非常に重要な問題と考えられてきた研究分野です。また、これは私自身の評価かもしれませんが、理論的な未解決問題が残っている分野だろうと考えています。

本日の報告でも最終的な解決を示しているわけではありませんが、商品貨幣論の基本的なコンセプトと今後の研究の方向を示したいです。そうすることによって、なによりも本日、聞きに来てくれている学生のみなさんに研究課題として取り上げてもらいたいという思いがあって、問題提起をしてみたいと考えています。

その際にしなければいけない作業として、まずはこれまでのマルクス経済学がどのように貨幣を説明してきたかの問題を考えます。これまでのマルクス経済学が現代の貨幣をうまく説明できていないのではないかという問題意識です。ここがあまり共有してもらえません。いや、十分に説明されてきたので既に研究することはないという話にもなってしまいます。しかし私は、ここはまだ十分に説明できていないと捉えています。

これからのマルクス経済学は貨幣論の研究をどのように発展させて、現在の貨幣現象の変化をより適切に説明できるような理論構成を考えていくには、どうすればいいかという話をその先で考えていかな

ければいけません。

スライドの 3 枚目ですが、「教科書」と書いてあります。私は学生のみなさんが主要なオーディエンスだと思っていたので「教科書」と書いています。大学の授業で使っている『これからの経済原論』（ぱる出版、2019 年）という教科書に書いてある貨幣論のパートです。持っている方は第 1 篇の流通論のところを開いて見てください。流通論の中に書いてある内容に沿って、話をしたいと考えています。この教科書については、金沢大学の瀬尾崇先生の非常にありがたい、よく内容を整理してくれている書評（『季刊経済理論』57 巻 3 号、2020 年）が提出されています。また、私の瀬尾先生に対するリプライも『季刊経済理論』（58 巻 2 号、2021 年）という雑誌に載っているので、併せて見てもらえるといいと考えています。

目次です。本日は四つのことを話す予定です。みなさんのお手元にある資料が、おそらくバージョンが二つか三つあります。当初作成したスライドのボリュームが多過ぎて、40 分で収まらないものだったので、何度かアップデートをしています。今、ホームページに掲載されているものが新しいバージョンになっています。それでもなお、このスライドの整理が間に合わなかったので、本日はこの目次の順番を変えて話したいということで、スライドの 4 節の商品貨幣論の再構成を本題というか、積極的な内容のところを最初に話をさせてもらいます。

1 から 3 のパートは、どうしていまさらマルクス経済学の貨幣論をつくり直さなければいけないのかという必要性の理由を説明しようとするものです。というのは貨幣論に熟知している方ほどその必要性を疑問に思われるのではないかと感じましたので説明をしてみました。

1 節は現代資本主義論ということで、これは午前中に泉先生が話してくださった段階論との関係で説明しています。2 節はマルクス『資本論』の話です。3 節は信用論の戦後の研究を踏まえて、貨幣論を考え直さなければいけない話になっているということです。これまでの先行研究をまとめたものが 1 節から 3 の節です。4 節が貨幣論の再構成の方法で、教科書に書いてあります。

まず「商品貨幣論の再構成」です。教科書は『さくら原論』と自称していますが、このように書いてあります。「貨幣は、商品に内在しているものの視覚的には認識できない価値が目に見えるかたちで表に現れたものであり、価格は貨幣で表現された商品の価値の大きさである。商品の価値をベースに貨幣を説明する理論を商品貨幣説という」(22 頁)。タイトルは論になっていますが、セオリーということで同じ意味で取ってください。

マルクス経済学の原理論は始めに分析対象を資本主義と設定して、資本主義は商品経済だと捉えて、商品経済を分析するときに商品という概念から説き起こす論理構成になっています。その際に商品の概念を使用価値と価値の二要因で把握して、商品概念から貨幣を導く構成になっています。商品の価値から展開された貨幣という意味で、商品貨幣論です。これを原理的に説明される商品貨幣をベースに信用貨幣を説明することで、現実に存在している貨幣に接近していきたいと考えています。

これは小幡先生のホームページ（「さまざまな貨幣を理論的にとらえるには」銀座経済学研究所ウェブサイト）に書いてある絵を見て書き直してみたものです。どういうことかというと、まずは横のレイヤーがあります。ここが原理論の最も抽象度が高い議論です。資本主義を分析するときに、まずは商品から始まる話になります。商品から展開していって貨幣を導けるということなので、原理論上の貨幣が出てきます。これが商品に基づく貨幣なので商品貨幣ということです。商品、貨幣、資本、と教科書では展開しています。（図は「ポスト資本主義と貨幣」『神奈川大学評論』99 号、2021 年、69 頁を参照してください。）

次に現代の貨幣がどこに位置づくのかについてです。原理的に導かれた商品貨幣は、理論上は非常に抽象的な存在としてあります。この抽象的な存在が二つのルートで発展する可能性があると考えます。物品貨幣型の貨幣に発展・変容する可能性と、信用貨幣型の貨幣に変容する可能性です。商品貨幣が物品貨幣や信用貨幣になるという考え方を「変容論」と呼んでいます。そのため、変容論アプローチです。この変容がどちらのルートに展開していくのかを決定づけるのが、これも午前中に泉先生が説明してくださった理論上の開口部です。つまり、閉鎖系の原理論ではなくて開放系の現理論体系を考えたときに、理論上の開口部が想定されるので、そこに外的条件があって、そこになんらかの外的条件が作用したときに、どちらかのルートにいきます。つまり、物品貨幣と信用貨幣が並び立つ構成になっています。

貨幣の姿としては、物品貨幣が金貨幣になります。それから、金との兌換のある銀行券になるという、

こちらのこのように進むルートと、それから原理論から導かれる信用貨幣をベースに、預金通貨と不換銀行券に展開されるルートに分岐します。このような理論構成になっています（スライド 12）。

本日は貨幣論ということで、理論上の想定としては商品と貨幣からなる「単純な商品流通」の範囲で説明しています。それゆえに、最終的な結論で非常に条件が多くて、しっかりと一つにならない話になっています。ちょうど一昨日ぐらいに私の所に届いた『季刊経済理論』、経済理論学会の学会誌の一番新しい号（58 巻 3 号）に、大分大学の江原慶先生が「資本による貨幣の変容――現代資本主義像の再構成のために」と題する論文を書いています。まだ熟読していませんが、江原先生がこの論文で取り組もうとしている問題は「単純な商品流通」の理論レベルで説かれる信用貨幣のルートを、理論的に補強する必要があるとの趣旨で書かれていると私は読みました。

この後に説明する「複数商品による価値表現」の論理を使って、商品貨幣から信用貨幣が展開される道筋を説明したいと考えています。そのときに、主体が資本ではないことについて、現実の銀行券が理論的に接近するときに制約になっていて、ここは「単純な商品流通」で想定されている主体は商品所有者であって、銀行業資本のような資本は存在していないので、ここまでしか説くことができません。

江原さんの最新の論文では、資本まで議論の考察対象を進めて、資本から信用貨幣と不換銀行券、現代の貨幣に接続するルートをこちら側に拡張する必要がある、と論じていますが、本日はそこまで話すことができないので、ここで終わります。おそらく商品貨幣から信用貨幣が出てくるという話だけでも、従来の考えとはかなり異なるようにみえるでしょうから、ここだけで十分だと思っています。

イメージでしかありませんが、現代の貨幣をイメージして書いた銀行のバランスシートです。私では泉さんのように上手な絵は描けませんが、このように捉えています（スライド 8）。現代の貨幣は銀行が手形等の債権を取得して、その担保を引き当てにして貸し付けを行う際に、預金通貨が銀行券の形で創造されます。この銀行の負債に出てくる銀行券と預金のことを信用貨幣といいます。

ここで預金設定による貸付が先にあって、銀行が自由に貨幣を創造できるようにも見えます。実際にそのように言われる方もいると思いますが、マルクス経済学では伝統的にそうは考えていないはずです。銀行が取得する債権の価値、借入をした資本、ないしは企業が在庫として保有している、資産としての商品の販売可能性です。要するに、商品経済における価値生産に限界づけられて、信用を創造される量が決まってくると考えられていると思います。

まずは商品の価値があるところがポイントになりますが、商品経済で形成される価値がまずはあって、その価値の実現を先取りする形で信用貨幣を創造します。これが商品貨幣論の意味です。したがって、信用貨幣の流通根拠は、借入と資本の商品の販売可能性と、それに基づく、貸し付けたお金の安定的な返済還流にあります。大まかに書いてしまっていますが、この資産の中に入っている金という特定の商品 1 個に基礎づけられているわけではないということです。

変容論の場合は、貨幣は物品貨幣と信用貨幣の 2 パターンに変容して、並列的に展開されると考えられているので、物品貨幣のみが貨幣として出てくる場合は、兌換銀行券の形で信用貨幣が出てきます。信用貨幣のみの場合は、兌換によって具体的に請求される資産のない貨幣が出てきます。このような 2 パターンで考えています（スライド 8）。従来の貨幣信用論との関係でいうと、まずは流通論で説明される物品貨幣があって、それに基礎づけられるかたちで、つまり兌換があるかたちで信用貨幣が現れるという 2 階建て構造をやめることになります。

不換銀行券制度の理解についてです。私の理解が特殊であると岩田先生に言われましたが、まずは制度としての不換銀行券は二つの意味で解釈しています。一つは金との兌換が停止されて、銀行債務としての銀行券が、債務の償還期間が設定されていないものと捉えて、銀行券の無期債務化が生じたと捉えています。無期かどうかは実際によく分かりませんが、銀行券の債務性が失われていないことを商品貨幣論は説明したいということです。

もう一つです。債務で請求される資産が金から離れたということです。銀行券と預金が銀行の債務、負債であることは変わっていないはずですが、債務として請求される資産の中に入っている商品が、金のような特定の物品でなくなってしまったという意味でとっています。つまり、特定の金という物品を指定できない債務なので、銀行が持っている資産全体が請求対象となっているということです。ここが段階論の研究、ないしは信用論の研究との関わりだと考えています。このような銀行券が不換になる状況は、一般的に成立するわけではありません。むしろ、兌換請求が行われない景気循環の安定性が確保

された、特殊な歴史的な状況の中でこの制度自体は現れるだろうということです。

ですから、目的としては、信用貨幣と不換性の両面を併せ持つ現代の貨幣が、資本主義の中で生成される契機・萌芽を原理論の内部に明示します。それで、商品の素材や使用価値から貨幣を説明する立場を「単純商品貨幣説」と言いました。しかし私の立場はそうではなく、名称が定まっていませんが、物が貨幣になるという説とは区別して、価値論にこだわったマルクス経済学らしい商品貨幣説をつくろうということです。

この後にコメントをしてくださる海さんの博士論文が、単著の形で今年に出版されました。『貨幣の原理・信用の原理』（社会評論社、2021 年）ということで、不換銀行券、預金通貨を原理的にどう捉えるかということを論じています。その中で、不換銀行券のような貨幣は貨幣体、または貨幣体に貫かれているはずの本質的な何かと、結びつけられて理解される傾向があると指摘されています。これは即物的な貨幣選定論にほかならないと、批判的にこれまでの貨幣論を捉えていると思うので、海さんの博士論文とも問題意識は共有できると考えています。

物品貨幣と信用貨幣は単純な商品流通の理論レベルで並び立つと私は考えています。従来の説明のように、商品から物品貨幣としての金貨幣を説いて、これから信用論に接続して、信用貨幣を説くというような一筋のストーリーにならないようなかたちで考えたいので、商品概念から見直していきます。つまり、素材的な要因だけというか、素材的な要因で単純に理解されないような商品貨幣を考えたいです。

簡単に先行研究を確認しておきます。マルクスは基本的に金貨幣論と考えていいと思っています。マルクスの貨幣論はとても複雑だとは思いますが、金貨幣論的な内容をかなり含んでいたと思います。そうすると、商品を使用価値と価値の二要因で概念化して、価値表現の発展を追跡する価値形態論をマルクスは展開したのに、商品の価値の大きさに統一的な表現を与える一般的価値形態の位置には、金が収まると結論づけました。価値形態論から交換過程論の範囲では、最終的に貨幣商品は金になると言ったと思います。

金になる理由がとても複雑です。歴史的、制度的、文化的要因等々があって、突き詰めると宇野の『経済原論』（岩波文庫、2016 年）に書いてあるように「最も適した使用価値を有する商品に帰着する」（36 頁）とあります。最終的にはそのように決着をつけて、使用価値論に傾斜した説明になったと理解しています。

マルクス貨幣論の複雑な論証過程にもかかわらず、結論だけを見ると、物々交換から貨幣を導く、新古典派の一部の議論と変わらないように見られてしまうことがあります。つまり、マルクスの場合は、商品の概念は使用価値と価値の二要因で考えていますが、しかし結論だけをとると、価値を考えないで、使用価値ないしは行為だけで財を規定して導く、財貨幣論と同じに見られてしまう、ということに私は不満があります。これでは商品概念にこだわった貨幣論とは言えないのではないか、ということです。

商品から貨幣を展開するときに、物品貨幣に変容するパターンと信用貨幣に変容するパターンが並列的に説けるように考えます。その際に原理論は金貨幣という素材や使用価値に着目した貨幣論の影響を、できるだけ受けないようにするためには、特定の制度や歴史的な事例にあまりこだわらずに、より抽象的な基準となる原論を示す必要があります。

前提条件についてです。これは教科書の最初のほうに書いてある話で、これも飛ばします。『資本論』以来のマルクス経済学の前提条件を踏まえて考えていますということです。小幡先生の『経済原論』（東京大学出版会、2009 年）の前提から基本的に変えていないはずです。

価値形態論の再構成を通じて商品貨幣論を再構成していきますが、まず主体は商品を持っている商品所有者です。これはいいと思います。その主体の商品を持っているときに、どれぐらい持っているのか（種類と量）がとても論争になってきました。たくさん持っていると想定するということです。資産としての商品ストックを有します。商品は売り物です。つまり、財ではないと捉えます。売り物ということなので、価値は交換性と理解します。これも小幡原論から変えていません。

商品経済は貨幣のない状態で想定すると、まずは主体が所有する価値の大きさが分からないことがあり、ここから価値表現が必要になります。それから、主体が欲する商品を獲得する手段がないということで、ここから交換要求が含まれます。交換要求と価値表現という二つの行動を通じて、貨幣を導くという話に価値形態論はなっています。

暫定的な結論ということで述べると、まず貨幣の形は外的条件で決まると捉えて、原理論の中で説か

れる商品貨幣が物品貨幣と信用貨幣に変容します。物品貨幣は金兌換のある兌換銀行券に結実すると考え、これを「単純な商品流通」のレベルで抽象化して受け止めると、1 種類の、単種の商品の価値に対する債務になっていると捉え直します。1 種類の商品の価値に対する債務になっている場合は、その商品の使用価値について、金であれば金の商品体が必要という話になります。

次に信用貨幣の方にいく場合です。一つの商品との兌換を請求できない債務だと捉えると、銀行が持っている資産の価値に対する債務です。「単純な商品流通」の範囲でこの資産を解釈すると、複数種の商品の合成で作られた、合成商品の価値に対する債務との解釈になるでしょう。

価値形態の論理を追っていくと、まずは価値表現が必要ということでこのように価値形態の等式を書くと「小麦 10 トンの価値の大きさは鉄 1 トンの量と等しい」となります（スライド 16)。これは従来どおりの価値形態論の展開と変わらない簡単な価値形態です。この簡単な価値形態は交換を求める形態の結果として与えられるので、交換を求める形態を書きます。そうすると、主体Aは1トンの鉄を欲します。自分が持っている資産の中から小麦 10 トンを差し出して、相対的価値形態にこれを置きます。

ここで 1 トンの鉄はAの欲求によるので変わらないのに対して、1 トンの鉄に等しい価値があるとAが思う商品には「任意性」が生じます。つまり、小麦を置いてもいいし何か別の商品、とにかく A が持っている資産の中にある商品であれば等しいと思うものをここに置けばいいので、何を置いてもいいということになります。

相対的価値形態に置かれる商品に「任意性」があるところに注目してもらいます。間接交換を求める形態を従来説通りに考えていきます。これは三角交換のかたちになっていませんが、三人で取引が終了する場合に、小麦の場合は小麦所有者が鉄所有者の要求する豚と小麦を交換して、豚を貨幣として鉄を手に入れるかたちになります。今はそのように交換が終わるかたちにしていませんが、ここで量関係が一致して交換が成立することはありますが、それは偶然のことで、通常はそのような最短の手順では交換は成立しません。

小麦に対して交換を要求する主体に到達するまで間接交換を求める形態を広げていくと、間に入ってくる鉄、豚、砂糖は間接交換の媒介物になっていくものの、小麦所有者の A から見ると直接的な欲求対象は鉄にしかないので、他人の欲求は砂糖になっていって、間接交換の媒介に使われる商品は、特に使用価値は求められない「任意性」がここでも生じます。

拡大された価値形態を書くと、このようなかたちになります（スライド 18)。間接交換を求める形態の結果として得られる拡大された価値形態は、この等式の下に広がっていきますが、小麦 10 キロの価値の大きさについてです。鉄 1 キロ、豚 200 頭と置かれます。間接交換の手段として豚があるとすると、豚の現物、使用価値が必要となりますが、間接交換が拡大していって直接的な欲求対象から乖離していくと「間接交換の媒介物の任意性」が生まれます。使用価値そのものが求められなくなっていけば、豚の価値があればいいということになります。豚の価値はそのまま渡せないとなると、そこから債務証書が引き出せます。間接交換から債務証書、価値請求権としての、信用貨幣の萌芽的な形態が引き出せる話になります。

ただし、この話は泉先生が何年か前に論文（「不換銀行券と商品価値の表現様式(2)：小幡道昭の貨幣・信用論に学ぶ」『東北学院大学経済学論集』178 号、2012 年）で指摘したことですが、ここで言われている債務証書、信用貨幣的なものは、豚の価値と豚の使用価値が表裏一体のものとして存在していて、単種商品ベースでの信用貨幣であって、ここの豚を金と置いても変わらないような内容になっています。つまり、現代の信用貨幣を説明するような意味での信用貨幣論には届かない解き方になります。

そこで単種商品ベースの信用貨幣の債務証書ではなくて、複数種の商品の価値をベースにした信用貨幣を考えると、ここが複数になる論理を考える必要があります。複数種商品を考えるときです。評価を求める形態ですが、これは 2017 年に江原先生が論文（「価値の量的表現論」『経済学論集』82 巻 1 号）で説明したものですが、相対的価値形態に置かれる商品はなんでもいいです。欲しいものだけが決まっているところに着目して簡単な価値形態を考えると、ここはなんでもいいことになります。なんでもいいのであれば、1 種類で置かなくてもいいと考えることができないか、ということがポイントです。

相対的価値形態に置かれる商品が複数種になる可能性から、複数種の商品セットの価値に対する債務証書を引き出したいという話です。複数商品による価値表現をたとえばこのような感じに置いてみます（スライド 20)。複数の評価を求める形態を念頭に、ここでは主体 C が相対的価値形態に置く商品の種

類を複数にしました。主体の資産が大量かつ複数あって、欲求の嗜好性は固定されています。同じ意味ですが、相対的価値形態に置かれる商品は任意であると、複数商品による価値表現が交換を求める形態から現れてきます。これをきっかけに説けないか、ということです。

複数商品による価値表現で、商品バスケットの価値を証券と名前をつけるとします。債務証書のことですが、信用貨幣的なものがここで出てきます。このイコールは価値形態を意味していません。商品セットの代理物、ないしは債務証書を証券と呼んでいるという意味です。豚と天然ゴムの代理物としてこの証券が出てくる場合は、使用価値が直接に必要なのでこの比率は変えることができなくなり、兌換と変わらないものになります。

それに対して、この価値量に対する請求権と証券を解釈した場合、ここの証券を構成する商品バスケットの価値量を安定させることが、この証券が受容される重要な理由になるので、商品バスケットの構成は組み替えたほうがいいことになります。

「間接交換の媒介物の任意性」から、つまり価値量だけが求められるような関係を考えると、使用価値が不問になって、この証券が求められる可能性があります。小麦 10 トンの価値についてです。いまは単位がないので、3 単位の証券のようなかたちで右側に置くことができると、証券は複数種の商品の価値に対する請求権になっているため、特定の商品を引き出すことができない債務証書になっています。小麦の価値の大きさを表す単位になっていて、間接交換の媒介物にもなっているので「単純な商品流通」のレベルでは貨幣的な要件を満たしています。商品の価値をベースにした商品貨幣になっていて、かつ商品の価値に対する請求権としての信用貨幣にもなっています。

ただし、複数種の商品のバスケットの価値に対する請求権を出したとしても、この証券が等価形態に置かれることはかなり偶然的な状況で、必ずそうなるわけではありません。とても大変な条件が必要になると思います。したがって、物品貨幣のルートは当然、排除されずに、可能性、萌芽形態として、こういう不換に近い債務証書が導けるという話になっています。

最初に書いたバランスシート的なものに対応させて書くと、商品価値ベースの信用貨幣は、単種商品の価値をベースにした債務証書を出す場合と、複数種商品の価値をベースにした債務証書を出す場合の 2 パターンを考えることができ、いずれも信用貨幣ということです（スライド 23)。ただし、債務証書が銀行券等の具体的な形態をとるためには、いま、このバランスシート上に資本がないことからも分かるように、ただの商品所有者しかいまは考えていないので、ここに資本を置かなければいけません。資本を置いた上で商業信用、銀行間の組織等が形成されるという信用論もさらに媒介が必要になってくるので、この先に解かないといけない問題がたくさん残っているとは思いますが、さしあたり江原さんの新しい論文はここに資本を入れて考えたのかな、と思っています。

この後の話はすべて飛ばします。何か質問等があれば後ほど答えます。銀行を考えた場合は、最終的にこういうかたちで説明できればいいということで、信用貨幣が銀行の負債として流通するときの発行根拠が、金兌換という一つの理由に求めることができなくて、銀行が持っている資産全体、商品経済で形成される価値にしっかりと紐付けられているという結論を念頭に置いて考えています。

段階論と信用論の話はすべて飛ばさざるを得なくて大変に恐縮です。貨幣論的なアプローチから考えると、貨幣は物品貨幣と信用貨幣の 2 方向に分岐します。商品の二要因にこだわって、価値論として貨幣論を説くと意識して考えると、こういう考え方もあるのではないか。このような貨幣論的な研究が、これまでの信用論的な研究や段階論的な研究とうまくかみ合って、三つの方向から一つの対象に向かって研究を進めている形で、議論がかみ合うといいと思っています。

最後です。参考文献としては、こういうものがあるので確認してください。時間を大幅に超過してしまって大変申し訳ありません。これで終わります。

岩田　ありがとうございました。それでは、北海道大学助教授の海さんからコメントをお願いします。

報告へのコメント：海大汎（北海道大学・助教）

コメント資料（海）

まとめ

·本報告は、マルクス経済学の貨幣論の枠内において現代の貨幣を理論的に根拠づける方法を模索・提案するものである。

「現代資本主義の特徴」

☞不純化しつつある資本主義の貨幣現象を解明するためにはマルクス貨幣論の再考が必要。

「マルクスの貨幣論」

☞現代の貨幣(不換銀行券／預金通貨)はマルクス(または宇野)金貨幣論では説明しえない。

「信用貨幣の捉え方」

☞金貨幣論は不換紙幣の登場によって無力化されてしまったが、だからといってその批判論としての「不換紙幣論」または「信用貨幣論」が説得的とも思われない。

「商品貨幣論の再構成」

☞複数種商品(資産)を抱える個別主体を想定し、その債務証書から物品貨幣と並び立つ信用貨幣の萌芽形態を抽象することで、貨幣研究の新たな展望を提示しようとする。

疑問点

⑴マルクス経済学の貨幣論はそもそも特定の商品が貨幣の地位につくという意味での「金貨幣論」または「財貨幣論」なのか。

⑵「変容論」においては物品貨幣と信用貨幣の出現が時間的に離れているが、「原理論」においては同時並列的な形をとるのはなぜか。

⑶マルクス貨幣論（価値形態論）は「物々交換」（スライド 10）をモデルにしているといえるだろうか。

⑷スライド 17 において「200 頭の豚、30t の砂糖は鉄を獲得する手段となる」とされるが、それは《D:30t の砂糖→10t の小麦》が前提されていなければ成り立たないのではないだろうか。

⑸原理論において複数種商品と兌換できる「債務証書」が不換銀行券（現代の貨幣）の抽象形態として位置づけられる理由は何か。

口頭でのコメント（海）

海　ありがとうございます。結城先生、報告をありがとうございました。私は北海道大学の海大汎（へ・デボム）です。お願いします。質疑応答の時間を5分と想定してしまい、今はごく簡単な形になって申し訳ありません。早速、始めたいと思います。

まずは報告の内容について簡単に申し上げます。報告は、マルクス経済学の貨幣論の枠組みにおいて、現代の貨幣について理論的に根拠付ける方法を模索し、提案するものです。本報告は大きく四つのカテゴリーがあり、最初の商品貨幣論の再構成というカテゴリーがメインではありますが、順番どおりに申し上げます。

第1の現代資本主義の特徴では、不純化しつつある資本主義の貨幣現象を解明するために、マルクス貨幣論の再考が必要という指摘がされています。第2のマルクスの貨幣論では、現代の貨幣はマルクス、または宇野の金貨幣論では説明できないということが述べられています。第3の信用貨幣の捉え方では、金貨幣論は不換紙幣の登場によって無力化されてしまいましたが、だからといって不換紙幣論、または信用貨幣論が説得的とも思うことができないということが説明されていました。最後の商品貨幣論の再構成では、複数商品を抱える個別主体を想定し、その債務証書から物品貨幣と並び立つ信用貨幣の萌芽形態を抽象することで、貨幣研究の新たな展望を提示しようとしています。

早速、質問に移りたいと思います。五つの質問を取り上げてみたいと思います。まず1点目から申し上げます。マルクス経済学の貨幣論は、そもそも特定の商品が貨幣の地位につくという意味での金貨幣論、または財貨幣論なのかということです。結城先生の報告では、マルクス経済学の貨幣論イコール金貨幣論、または財貨幣論というような説明がなされています。これは3番の質問とつながるところですが、それ以外の解釈はできないのか、仮にそれ以外の解釈も可能であれば、説明してもらいたいと思います。

2 点目です。変容論において、物品貨幣と信用貨幣の出現が時間的に離れていますが、原理論においては同時並列的な形をとるのはなぜなのかについてです。これは変容論や原理論という用語にあまりにも慣れていない方々には、多少は理解し難いところではないかと思い、質問をしました。

3 点目です。マルクス貨幣論は物々交換をモデルにしていると言えるでしょうか、ということです。スライド 10 番において、価値形態論イコール物々交換というような言い方もされていると思います。このような言い方、認識は、むしろマルクス経済学の外側からマルクス経済学を批判する立場の人々の認識と、重なっているような印象を受けました。例えば財 A と財 B を物々交換する際に、物と物の交換があまりにも効率的に成り立たないことを前提として、その上で交換をスムーズに成り立たせるような物品、財を貨幣として想定して、それをモデル化したものがマルクス経済学の貨幣論であって、そのような貨幣論は今日の現代資本主義の貨幣現象を説明できないのではないかということです。そのため、こうした誤解を前提に論じるのはまずいのではないか、と思いました。このような物々交換のような言葉はどうかと思い、質問しました。

4 点目です。スライド 17 において、200 頭のブタ、30 トンの砂糖は鉄を獲得する手段になるとされています。それは《D:30t の砂糖→10t の小麦》が担保されていなければ成り立たないのではないかということです。要するに質問でもありませんが、そういう記述が必要ではないかということです。

最後の質問です。原理論レベルにおいて、複数種商品と兌換できる債務証書が、不換銀行券の抽象形態として位置付けられる理由は何かということです。要するに、原理論レベルにおいて導き出される債務証書と、兌換ができない現代資本主義の不換銀行券との間にズレがあるのではないか、そういうズレをどういうロジックをもって埋めればいいかの点について説明してもらいたいと思います。以上です。ありがとうございます。

第２部の討論

岩田　ありがとうございました。それでは結城先生、このまま回答をお願いします。

結城　はい。海先生、丁寧にコメントを付けてもらい、ありがとうございます。

まず一つ目の質問です。マルクス経済学の貨幣論は、そもそも金貨幣論ないしは財貨幣論なのかについてです。一概にそうとは言えないというか、定説がどこにあるのかはなかなか分かりにくいとも思っています。たとえばマルクス貨幣論に対する批判の中で、不換紙幣論が出てくる先行研究の文脈がありますが、不換紙幣論を唱える場合には、批判されている対象としての、マルクス経済学の貨幣論は金貨幣論だと想定されています。貨幣の本質は金で、銀行券は金との兌換のある銀行券だと捉えるので、兌換がなくなったときに不換紙幣であるという解釈になると思います。そういう意味では、マルクス貨幣論のゴールを金貨幣論に設定してきた研究はある、ということです。

それから、財貨幣論は私のねじれた言い方ですが、マルクス経済学の貨幣論に対する、さまざまな立場からの批判があって、そのような諸批判で念頭に置かれているマルクスの貨幣論は、金貨幣論または金属主義的な貨幣論、ないしは実物が貨幣になる理論であると周りの人たちからは見られています。そうだとすると商品貨幣といっても、実質的に財が貨幣になるという議論と変わらない話をしているといわれています。

私自身は財と商品は違うと考えます。そのため、商品＝金＝財と、すべてをイコールでつなげ、非常に単純化した理解に基づいて、マルクス経済学は駄目である、既に役に立たない、と言ってしまうのは短絡的だと思っています。

それとセットの話で、⑶の価値形態論は物々交換をモデルにしていると言えるかというと、これは言えません。価値形態論は物々交換ではないのに物々交換であると言われて、結論として出てくる貨幣が財の貨幣になる理論と結局は同じなので、わざわざ価値形態論を立てているのに、価値形態論をとらない物々交換ベースの諸理論と結論が一緒になっている、そのような批判を受けているので物々交換モデルと見られていますが、しかしマルクス自身はそのようなことを言っていませんし、私も物々交換モデルとは考えていません。

⑷はご指摘のとおりです。これはスライドの説明不足でした。それから、⑵の物品貨幣と信用貨幣の出現が時間的に離れているとの指摘が理解できませんでした。基本的には無時間で考えているので、時間的なズレはありません。それから⑸の、原理論レベルで複数種商品と兌換できる債務証書が、不換銀行券の抽象形態として位置づけられる理由は何かということです。現代の不換銀行券制度、ないしは預金通貨の管理通貨制度を原理論レベルで抽象化して受け止めるときに、どういう受け止め方があるかと考えなければいけません。制度を無視して、信用貨幣が直接的に引き出されるというような簡単なことではないと思います。普通は制度的なサポートが必要になります。

そういう中で解釈していくと、金兌換は１種類の商品と兌換できます。兌換する商品が指定されている意味での債務証書です。そういう現物を引き出すところに、非常に重要なところがあります。不換銀行券の方でいうと、特定の資産ないしは商品を引き出せない債務であることに特徴があるので、特定の商品が引き出せないような債務の在り方を原理的に考えるとどうなるか、と捉えます。「単純な商品流通」のレベルで考えると、それはさしあたり単一商品との兌換ではなくて、複数種商品の価値に対する請求権として引き出されるものと解釈してはどうかということです。

岩田　ありがとうございました。今回は貨幣の話をしてもらいました。金兌換が停止すると国家紙幣になるという議論もよくされています。今回の報告では、不換信用貨幣になっても商品価値に根拠を持つということが出発点だと思います。それから、実証研究の方と理論研究の方ではいろいろと緊張関係があります。でも、それをお互いに刺激を与えることができるような場にしたいと思います。議論がなかなか難しいテーマですが、問題意識をすり合わせながら議論を続けます。

◆質問１５について

結城　はい。貨幣の形に二つのタイプがあるという議論からです。質問にあるように、信用貨幣のタイ

プが直接に現れる資本主義と、物品貨幣のタイプが直接に現れる資本主義があります。20 世紀末以降にもう一つのタイプに変わったように見えることについてです。

現代資本主義において、不換銀行券制度は管理通貨制度と呼ばれる通貨制度がどういうかたちで現れたのかという、段階論的な歴史認識の問題とも関わってくるだろうと思っています。もちろん歴史的には連続しているところがありますが、宇野派の議論でいうと国家独占資本主義や管理通貨制度と呼ばれるような通貨制度に、1970 年代以降、本格的に変わっていきます。そういう通貨制度の変更によって、直接的に兌換される必要のない信用貨幣が、貸付と返済還流の循環で成り立っていくような信用貨幣が、安定的なかたちで現れる状況が 20 世紀末以降に現れました。

この辺りの話はすべて飛ばしてしまって、私もすぐにすべてに答えることができません。そういう中で、金との兌換が貨幣の存立や安定的な流通にとって、本当に必要なのかということが問われてきたと思います。原理的に考え直すきっかけが 20 世紀末以降の通貨制度の変更によって与えられたと考えています。

◆質問１４について

結城　いえ、連続するとは考えていません。物品貨幣の兌換と初めから兌換のない信用貨幣の両方があります。もちろん歴史的には連続していますが、兌換信用貨幣の延長線上に連続的に兌換のない信用貨幣が出てきたという説明は、うまくいかないのではないかということを考えているつもりです。

岩田　このかっこの中は、金兌換を延期して無期化したという意味ではありませんか。それだと連続になります。

結城　そういう意味ではありません。表現が不適切でした。

岩田　もともと根本的に異なるということですか。

結城　はい。

岩田　それでは、新しい価値形態論に関わるところです。こういう質問が出ています。資産の複数種商品の価値に対する債務証書は、現代の不換銀行券になるのか？　ということです。

◆質問１２について

結城　はい、そういうことです。

岩田　これに関連して、とても高度な質問が出ています。こちらもチャレンジしてもらいます。

◆質問１６について

結城　条件はしっかりと説明しませんでした。商業信用ベースの金融債権の集中を入れることが難しいと言われていて、商業信用は後払いで、後払いをするのは貨幣なので、貨幣概念を前提とします。貨幣概念を前提とする取引を貨幣導出の条件に使うことはできません。

岩田　ここは難しいので、もう少し整理してもらうといいです。要するに、商業信用から貨幣を解こうとした場合は、商業信用自身の中に貨幣概念があるので、商業信用から貨幣を説くことはできないということを言っていますか。

結城　はい。ですから、理想的には信用論で説かないといけない問題を、流通論の中で説くことが課題だろうと思っています。

岩田　ここで何か積極的に論じることはありますか。信用論を専門にしている方は、商業信用から銀行

信用への発展とか、銀行の預金が貨幣になることを論じます。他方、原理論の専門家だと、どうしても最初に貨幣はそもそもあるのかの定義から出発するので、商業信用からスタートできないという問題があります。

結城先生から何か積極的にこういうもの、というか、商業信用はものの例えで使っているだけだから、理論的にはそうではないということになるかもしれません。あらためて結城先生から質問に対する回答はありますか。

結城　ありません。たしかに商業信用から銀行信用という、従来の信用機構論の論理構成を棄却しなければいけません。それは流通論で信用貨幣の萌芽として複数種の商品バスケットを位置づけて、条件が多いと私が曖昧にしている問題（「証券」と名前をつけて示唆された信用貨幣の萌芽形態が、どのような理論的な条件や展開を通じて信用貨幣の説明を完備するのかが保留にされていること）をクリアに説明できたときに棄却できると思いますが、そこまで言えません。

岩田　この辺りは信用論研究の方と原理論ベースの貨幣論研究の方が非常にぶつかるところなので、もう少し今後に期待したいところです。次はもう少し軽い質問になると思います。中央銀行はどのように扱われるのかについてです。

◆質問１９について

結城　まず銀行券が中央銀行債務ということを理論的に理解したいことが基本にあります。それは中央銀行券が中央銀行の債務ではないとの理解が、非常に市民権を得ているという私の認識があるためです。それに対して、マルクス経済学ベースの信用貨幣論は、中央銀行債務であるという債務性を認識させることができます。そのことを流通論というか単純な商品流通のレベルから説いていくことで、商品経済と銀行信用の関わりを、個別主体から銀行システムのところまで説いていけるところに意義があるのではないかと考えています。

岩田　要するに、この質問は金兌換が停止すると不換紙幣になる、という考えの派生形だと思います。中央銀行券が法貨規定を与えられることで貨幣として流通するならば、法貨規定を与えることは原理論の外部だろうということだと思います。結城先生としては、中央銀行も銀行の中の一つであって、中央銀行も資産に何かを持っています。中央銀行の信用貨幣もその資産を裏付けとして流通するというように、市中銀行も中央銀行も同じであるという話ですか。

結城　そういうことです。

岩田　中央銀行券が法貨規定を与えられるからといって、原理論の外に出るわけではないということですか。

結城　はい、原理論の外に出るわけではありません。

◆質問２０①について

結城　MMT（現代貨幣論）については、朝日新聞がケルトンさんにインタビューをしたときに、MMT に反対の感じでケルトンさんの隣に、一緒に出してもらったことがあります（朝日新聞デジタル 2019 年 7 月 19 日付）。それで Twitter 等でいろいろと言われたので、そういうことはやめようと思いました。

基本的に MMT は商品経済で生産される商品との価値を軽視した貨幣論になってしまっていて、債務関係が形成されると貨幣が負債として創造されるということです。MMT が言っている負債としての貨幣がどこから出てくるのかのところまでさかのぼって考えると、商品経済の中で価値がつくられる社会的再生産の関係で銀行信用を理解しなければいけない問題が生じると思います。

岩田　今回の、結城先生のバランスシートでは、信用貨幣は発行者の負債で、資産の場合に金融資産または商品となっています。MMT の人もよくそういうバランスシートを作りますが、一番左側の資産がジェット機や爆弾ということが本に出てきます。しかし本来は資産でないものが資産の側に載っている気がしました。結城先生の報告を見て思い出しました。爆弾等は政府が所有していますが、商品価値はなく消耗して消えていくものなので、MMT の想定は政府紙幣の性質を示していると思います。

中央銀行はなんだかんだといっても資産に国債があります。ここでついでに質問です。国債は返済されることは想定されていないので、金融資産ではないだろうと言われたときはどうしますか。よく聞かれます。

◆質問２０①、質問２１について

結城　負債が返済されないとは、どういう意味ですか。

岩田　返済を想定していません。

結城　コンソル債を考えるということですか。

岩田　いえ、そうではありません。国債の借金は返せないだろうという議論があります。

結城　返しています。

岩田　そうですか。国債を全額支払うことはないだろうという意見です。

結城　未来において財政破綻をするからという意味ですか？

岩田　そうかもしれません。

結城　それは財政、資産破綻をした後はもちろん価値を失うと思います。

岩田　はい。借り換えですが、しっかりと返しています。

結城　借り換えられているうちは、しっかりと国債を償還していると私は考えています。

岩田　分かりました。ここで結城先生も疲れてきたと思うので、海さんにお願いします。今の話を聞いていて、海さんから何か思う所があればお願いします。海さん自身の回答でもいいです。それから、結城先生だとこう考えるだろう、という回答でもいいです。

海　私自身は結城先生の認識と若干、外れるところがあると思いますが、基本的に商品の枠内において、信用貨幣を論じることができると考えています。質問の中には中央銀行や兌換停止等のところにも触れられていると思います。そういう点については、結城先生と午前中に報告された泉先生も説明されたように、変容論または段階論の理論を挟んで、現状分析を行います。その意味で申し上げると、原理論は商品貨幣の現象、形態、または貨幣の実際の姿そのものを論じるわけではなくて、あくまでも理論でも抽象概念というか、抽象的なカテゴリーというか、そういうところでしっかりとベースを立てることが原理論の課題であると認識しています。短い答えになって申し訳ありませんが、以上です。

岩田　ありがとうございました。もう少し時間があるので、長めの質問を紹介するのでお願いします。これです。財と商品との考え方です。

◆質問１３について

結城　一般的にただ漠然と役立つ使用価値をもつものとの違いを指摘したものです。

岩田　財とは商品になっていないということだと思います。商品価値に対するこだわりが問題になっていると思います。

結城　貨幣を説くときに、使用価値から説いていく貨幣論があります。使用価値から説いていく貨幣論で考えていくと、使用価値の面から見て、素材的に見て、最も交換の媒介としてふさわしい財が貨幣になるという財貨幣論になってしまいます。そういう財的なものが貨幣になるという貨幣論は、非常にさまざまな経済学で展開されています。財が貨幣になる貨幣理論と、商品が貨幣になるという貨幣理論をはっきりと区別するときです。

岩田　ここをしっかりと説明してもらえるといいと思います。

結城　商品に価値があるということは、この方の言う交換価値で押さえて、売り物だとはっきりと認識します。自分のためには使用価値、あるいは効用と呼ばれるものはないものと考えます。自分のための使用価値のないただの売り物だと商品を捉えたときに、貨幣論の展開は金貨幣論のような特定の物品に帰着するような、単純な貨幣論にはならないのではないか、との主張をしています。

岩田　ありがとうございます。商品と財との区別はマルクス、宇野と、今回の、結城先生の価値形態論の違いを考えるときに非常に重要なところになると思います。既に十分に説明されましたが、今後もさらに磨きをかけて分かりやすく論じてもらうといいと思います。
　最後にまた長い質問になるかもしれません。これはマルクスの、貨幣論の評価の仕方ですか。1 巻のレベルの貨幣論と信用論レベルの貨幣論ということです。

◆質問１７について
結城　そうです。そういう区別をしていません。

岩田　うかつに商業信用から銀行信用へということで貨幣論を論じようとすると、先ほどの質問にもあったように、貨幣を前提した上で商業信用を論じているだろう、という議論になります。

結城　『資本論』の解釈として、この質問をしている方が適切ではないとは思いませんが、そういう『資本論』通りの貨幣の説明を、現代の貨幣の説明に延長するというか、適用するというか、そういう方法がなかなか難しくなってきたのではないかという問題意識があります。なので『資本論』1 巻が価値の実体としての労働を前提とした貨幣論で、3 巻が総過程論という構成はとっていません。

岩田　マルクスの貨幣論とも違うし、宇野弘蔵の貨幣論とも違います。新しい貨幣論をつくるということですが、そのように言うとマルクスとは違うのではないか、宇野とは違うのではないかと言われて、なかなか議論が難しいところではあります。新しい価値形態論を、商品価値をベースにして試みるということが、今回の結城先生の報告であったと思います。マルクスとは違う、宇野とは違うと思われる方には、なかなか議論が難しいことは、これまでに結城先生があちらこちらで報告されて、そういう議論の難しさを感じられていると思います。できるだけ議論をすり合わせるように、本日は取り組んでみました。
　それでは、そろそろ時間になります。結城先生から最後の締めではありますが、さまざまな質問を受けた上であらためて思ったところ、このようなところを分かるようにすればよかった、または今後はこの辺りを研究してみたい、あるいは学生や院生のみなさんにこの辺りをより勉強してほしいということを、最後に結城先生からお願いします。

結城　はい。最後に岩田先生に指摘してもらった論点で、『資本論』や宇野の『経済原論』と違う指摘

はもちろんありますので、その指摘は、私自身はとても重く受け止めています。そう簡単に違ってはならない基準だとは考えていて、それほど違っていないというのが私の自己認識としてあります。

『資本論』を読んで、宇野の『原論』を読んで考えることを基本として研究をしてきたつもりです。とくに本日で十分に話すことができなかった論点として、段階論の研究の中で進められてきた現代資本主義論、管理通貨制度の研究、また国家独占資本主義、福祉国家論の研究の中で、現実の資本主義経済が基本形から離脱して、管理通貨制に移行しなければならなかったという歴史的な移行過程が非常に重要だと認識しています。

もう一つは、私が話した、貨幣論の再構成の話は唐突に出てきたわけではなく、戦後の、マルクス経済学の信用論の半世紀以上にわたる、長い先行研究の歴史があります。もともとは金兌換ベースの信用貨幣を考えていて、それに対して不換紙幣論が出てきました。その後に山口先生の返済還流ベースの信用貨幣論や、吉田先生の信用のみで成り立つ信用貨幣論のようなものが出てきます。段階論的な研究の中で金の消極化が進みました。信用貨幣論の研究の中でも、兌換準備金というものが実質的に役に立っていないことが指摘されるようになってきた文脈の中で、原理論がずっと変わっていないように見えます。段階論と信用論の方がどんどんと先に行っていて、原理論というか貨幣論は金で不変の状態で留まっています。

そういうことでは良くないのではないかということです。段階論、信用論の研究の進展に合わせた原理論の貨幣論も、同時に考えていかなければいけないのではないかという意識で研究しています。そういう意味では、従来の研究と連続していると思っています。

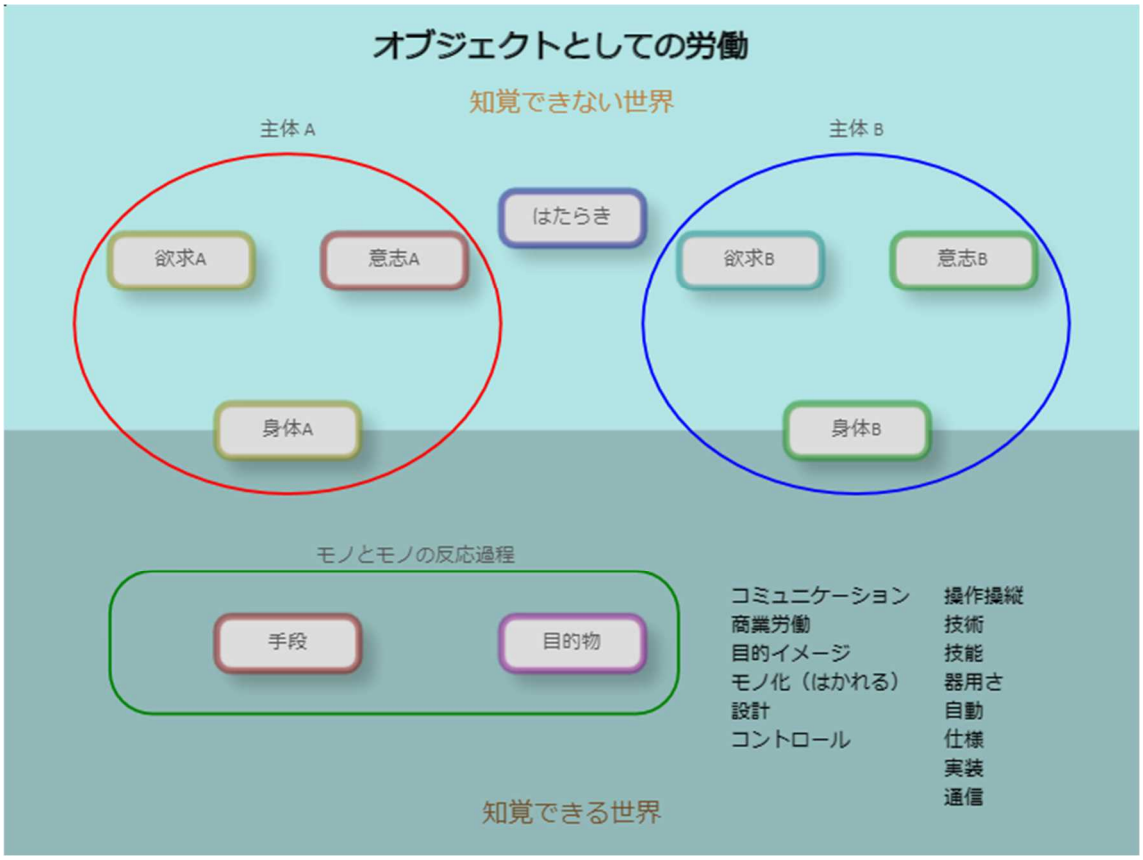
岩田　よろしいですか。海さんから特にありますか。何か聞き残したことはありますか。いいですか、はい。それでは、第２報告の結城先生の報告はこれで終わります。

第３部：労働概念の拡張

報告者：小幡道昭（東京大学名誉教授・東京理科大学非常勤講師）

報告資料（小幡）

ここでは図のみ掲載。全文は銀座経済学研究所ウェブサイト、「労働概念の拡張」
https://gken.jp/gken/2021/09/18/%E5%8A%B4%E5%83%8D%E6%A6%82%E5%BF%B5%E3%81%AE%E6%8B%A1%E5%BC%B5/



口頭報告（小幡）

小幡　小幡です。本日の報告は「労働概念の拡張」という話をしようと思います。

小幡　ここをクリックすると、これから話をするところのページに入ります。何段階かあります。1 ページ戻ってもらうと、このページの下のほうに岩田さんのブログの記事があったので、先ほど少し見ました。そうすると、ここに丁寧に労働概念の拡張を読むための若干の整理と前提があります。岩田さんが随分と丁寧に解説されているのを見て、こういうものがあると便利だと思いました。みなさんもご覧になるといいと思います。といっても、本人はそれほど難しい話をする気は全くありません。このページは私のブログですが、大体はそこに書いてある内容を話していきます。

目次を開くと、本日の話の概要のようなものが書いてあります。最初にこれまでの労働概念ということで 1、2 とあります。労働のコア概念を 3 で話をするということで、できるだけここでいうと 3 のコア概念の話と拡張の話、3、4 の話をしていきたいと思っています。時間も限られているので、できるだけ手短にしたいと思います。少し恥ずかしいですが、このブログのページは、みなさんに話すことを想定して、わざわざですます調で書いているので、そのまま読んでもらえるといいという感じです。こちらを書くときはみなさんに話すことを前提にして書いてみました。

初めに、突然ですが、人工知能の発達でいよいよ労働が要らなくなる、こういうセンセーショナルな

報道はよく目にすると思います。私も本当にそうなるのかと、よく尋ねられます。労働の姿が仮に変わらないとすれば、変わらない労働は姿を消すのは当然です。しかし、労働はその姿を変えます。そうすると、姿が変わるものがなくなるかどうかということは途端に難しい問題になります。姿が変わるものがなくなるかどうかです。変わるということは結構、考えてみても難しい概念です。

そういう中で目につく現象を追いかけ回す、新しいもの好きの人たちは、右から見てはなくなると言い、左から見てはなくならないと言い、右往左往するばかりです。こうした混乱は、労働はどう変わり得るのかということです。逆に理論的に言えることは、どう変わり得ないかという否定形のほうだと思います。そのようなことが書かれるような、新しい経済原論を組み立てることで、初めて学問的に解決できる問題だと思っています。

こう言うと、そのような理論は本当にできるのかという声があちらこちらから聞こえてきそうです。理論は変わらない法則を対象にするものだと信じているのでしょう。とはいえ、こういう信じている方々と、信念の次元でいくら議論をしても抽象的な方法論、一般の問題のようになって時間の無駄ということで、ここではとにかくできるかできないか、実際に試してみたいと思います。

第2節です。これまでの労働概念です。格好をつけて労働価値説から始めています。初めに断っておきますが、ここで今は変わることが難しいと言った「変わる」というのは、もちろん価格が変わるような個々の様子、要因の変化ではありません。価格の変化を支える基盤となっている、市場の構造が変わるという意味での「変わる」です。こういう構造変化を個々の要素、要因の変化と区別して「変容」と呼んでいます。

さて、この構造が変わるという変容の問題を考えようとするとき、マルクス経済学は強力なパワーを発揮します。とはいえ、この力は潜在的なパワーの話で、進化を引き出すには何層にも降り積もった固定観念を打ち破る覚悟、『資本論』に書いてあることでも正面からもう一度疑ってかかる気概が必要です。これから考えようとしている、労働の場合は特にそうです。

マルクス経済学では、伝統的に労働は常に労働価値説に縛り付けられてきました。ただ、労働価値説に関しては、解かれるべき問題は既に解かれたと私は考えています。こう言うとたちまち異論百出で、収拾がつかなくなりますが、本日はこの話はしません。しませんと言うことに迷い気味です。詳しくは「マルクス経済学を組み立てる」をご覧ください。これは 2016 年の春に、元の大学を辞めるときに最後の置き土産的に書いた論文です。ここに組み立てるという話で取り組んでいました。長い間いた大学でしたが、近代経済学の人たちと自分の立場をはっきりとさせるようなつもりで書いた論文があります。基本問題は解決されたという意味の話はそこに書いておきました。簡単にそこの内容を振り返ってもいいですが、ここを話していると時間がかかるので、ここを飛ばして本題に入りたいと思います。

ただ、少しだけ言っておくと、例えば労働価値説に縛り付けられたということに、私は労働価値説について、商品を生産するのに必要な労働時間が計算できるという話と、その労働時間が価値を規定するという話は分けるべきです。私は前半の労働時間を考えていくことの意味は重要だと思います。しかし、そのことを言うためには、実は労働に対してとても強い制約をかけておかないと、もともと無理なところがあります。そのような制約をかけて初めて投下労働時間（スモール t）をしめすことができます。つまり1商品を直接、間接に生産するのに必要な労働時間の決定はできるのかということで、そのためには明示的にいくつか条件をはっきりとさせる必要があります。

その条件とは例えば技能の問題についていえば、「技能なき労働」、技能の熟練を同じ意味で使うとすると、そういう労働を想定しておくことが必要です。次に「手段なき労働」についてです。手段があっても、それによって異質にならないような労働という意味です。そういうものを想定していくことが必要です。これは考えると、結構、いろいろと根が深い問題です。2番目はそういう条件です。

3 番目は「結合なき労働」です。簡単に言うと、協業や分業をしても変わるところがありません。n 人であれば n 倍をすればいいと想定しておかないと、労働時間の集計はもともとできません。n 人であれば1人の n 倍の労働が可能になる、そういう想定をしっかりと置いておかなければいけないというようなことがあります。挙げていくと、まだ技能なき労働や手段なき労働や結合なき労働、こういうものをしっかりと想定しておかなければいけないと思います。

こういういくつかの想定をしておいて、次に 2.2 の理論空間の話です。この部分は報告資料（ウェブサイト）を読んでおきます。次の2点がここまでの結論です。①『資本論』第1部の骨格をなす剰余価

値論と蓄積論において、その量的分析に投下労働時間を用いることは有効である。ただ、このことは商品が投下労働時間に比例した価格で売買されるという命題、本来の労働価値説、あるいは労働力商品が他の商品と同じく、その生産に直接間接に必要な労働時間によって売買されることです。労働力の価値規定と言われているものですが、そのような命題、本来の搾取論を必要とするものではないと思います。それが第1の結論です。

②2 番目の結論は、『資本論』における労働の変容を捉えるには、労働概念をこの前提の枠に無理に押し込めず、より一般的な内容に拡張する必要があります。その話は報告資料の上のほうにそれをたくさん、省いた形で書いておきました。

この2番目が本日の話の出発点です。無理に労働価値説のための労働概念に押し込めずに、より一般的な内容に拡張することです。ただし、労働が変わるという問題に興味がない人にとっては全く意味がないでしょうが、しかし理論的な問題であれ、現実理論の外の問題としてでも関心があれば、チャレンジしてみる意味があるでしょう。

ここで理論の構成の仕方についてです。よく方法と言いますが、理論の方法といっても、その理論を現実にどう適用するかについて、例えば段階論でします、とか、直接適用します、といったようなさまざまな言い方で、出てきた理論を現実に適用する方法です。大体は宇野弘蔵の経済学方法論というときの方法論は適用方法ですが、それとは別に理論にはもちろん展開方法があって、これをどのようにするかです。例えば分化発生論を軸でするように、そういう多様な展開方法についての問題を考えるときに、どのような方法を使えばいいのかについてです。

少しだけコメントしておくと、ポイントは2で概念を拡張したからといって、現実と変わる労働に関心があって、それを明らかにする理論をつくろうと思って、2 番目のところで概念を拡張したからといって、直ちに単純化された①の前提を変更する必要はないという点です。

両者は異なる課題を解明する相対的に独立した理論空間を構成し、おのおのの理論空間に属する前提や基本概念は、それに応じてそれぞれ固有の特性を付与されます。ここの理論空間というのは、一定の基本課題を解明するために、一群の諸前提を基礎に構成された演繹体系のことで、個々の理論空間は相互の関連を明確にすることで、上位の理論空間のサブ空間として位置付けられます。少し難しく言ってしまいましたが、理論空間の種明かしをすると、最近のコンピュータのプログラムを書くときに、ネームスペースという名前空間をよく使います。その考え方そのものですが、そういう空間をそれぞれに設定して、その関係を考えていく形です。複雑な大きなプログラムを書くときは、そういう整理をする方法を使います。

考えてみると、経済原論のテキストは昔から編、章、節等の編別構成に基づく形になっていますが、あえて理論空間と言う狙いは、編、章、節ごとにもう少し隠された諸前提を示して、その関係を明らかにしていこうという点にあります。同じ物理学といっても、ニュートン力学と相対性理論、あるいは地球物理学と宇宙物理学では、それぞれ異なる理論空間を構成しています。例えばそのように考えてみます。

地球という同名の個別要素であっても、それぞれの理論空間に属する要素として、その形で比較検討されると、地球一般として同じ物理学の中に置くのではなくて、地球物理学というネームスペースの中で、地球物理学の地球と普通は言います。そういうスペースをつくっていくことが大事です。これは実は経済原論の編別構成でつくっている場合に当てはまると思います。

①において、投下労働時間を計算可能にするのに単純労働の仮定をするのであれば、②の労働の変容では単純労働化の深化を説くべきで、②において熟練技能を考察するのであれば、①では熟練労働の単純労働への還元を説く必要があるといった、ナイーブな思考からはそろそろ卒業するときと私は思っています。そういうことを前提にして、2.3 の労働の変容に入ります。以上のように、方法論を整理することで、例えば熟練、技能は同じ意味です。次に技術です。あとは組織、労働の結合です。協業や分業等を取り込む形で労働概念を拡張し、歴史的な環境の中で、労働の姿がどのように変わっていくのかという問題に、理論のサイドから光を当てることができます。

もう一度、断っておきますが、これは経済原論で不可逆的な歴史的変化、すなわち発展が全て説明できるという意味では決してありません。原理論を現実に適用しようとすると、すぐこれを理論による決定論と解釈して、そういう理論というか昔の唯物史観のドクトリンで、歴史を無理に解釈したというこ

とは、よほどアレルギーが強いだろうと思いますが、必ず理論を現実に適用するというとお決まりの反論がきます。しかし、ここでいっているのは、歴史的発展の基礎にある分岐の可能性や構造変化の契機を示すことが、原理論でも、できるということです。

こうしたアレルギーの事情は、理論的に説明可能な貨幣は金貨幣だけである、それ以外は段階論で語るべきという主張に通じています。こう信じている人から見れば、同じく 19 世紀には機械制大工業が普及したのであり、こうした傾向を延長した先に想定される純粋資本主義では、単純労働以外の労働は考える必要なしということになるでしょう。この種の紋切り型の純粋資本主義と手を切り、貨幣にしても労働にしてもより抽象レベルを上げて、理論的に構造変化を考えることができる原理論を開発しようというのが変容論の狙いです。

ホームページ上でより抽象レベルを上げる、のところにカーソルを当てると、ツールチップが大量にあります。このような小細工をしてあり、ホームページを作るときはこのように結構、遊んでしまいます。

これが変容論的アプローチのポイントで抽象レベルを上げるということです。変わる現実に近づくために、変容論の「現実から遠ざかる」という逆説で、抽象レベルを上げるという形です。要するに、鳥瞰できるように距離を取って抽象レベルを上げていくこと、これが現実に適用するときの方法です。眼前の現実を説明しようとして抽象レベルを落として、生の現実を理論の言葉で語るだけの類似品に注意、ということです。

類似品は何を言っているかというと、ここだけのオフレコで言ってしまいます。昔から、私はよく純粋資本主義に対して、こういう疑問を投げかけると、世界資本主義というレッテルを貼られました。古い人は知っています。私は世界資本主義が逆に抽象レベルを下げてしまったと思います。生の現実について、19 世紀のイギリスをそのまま書いてしまうと理論にはならないので、理論の言葉に翻訳して話していると勘ぐります。今、話しているのはこの辺りです。

今、話したところについてです。前項で話した理論空間の狙いは、このような狙いに応える試みでした。労働価値説あるいは客観価値説で、社会的再生産の構造や純生産物の分配を説明するには、それに応じた理論空間が必要です。理論空間は芝居でいうと、書き割り、backdrop のようなもので、どの幕にもそれにふさわしい背景があります。剰余価値論という第 1 幕では適切な書き割りで、解くべき問題をしっかりと解くべきです。

しかし、それが労働に関して考えるべき問題の全てではありません。働くとはそもそもどういうことなのか、それがどのような姿をしているのか、そして今はどのような姿に変えようとしているのかについてです。このような問題を考えるには新しい書き割りを設定することが、これからは必要になってきます。演じる役者は同じ労働でも、舞台が変われば役割も変わり、演じ方も変わってきます。

これぐらいの柔軟さを原論体系全般に埋め込んでいかないと、とても窮屈な原論になってしまうと思います。理論は同じ平面の上で一部の隙間もない理論なのだから演繹的に少しでも前提が動いてはいけない、というような平板な理論を演出する必要は、今はないだろうと思います。この辺りはかなり用心して書かなければいけません。信用貨幣型の貨幣を説いているうちに、いつの間にか信用論までもっていってしまうことや、丸ごと信用論を先取りするようなことに、どうしてもなってしまいかねません。方法論は結構、大事というか、用心する必要があると思います。

次に 2.4「「労働過程」の盲点」です。これは先ほど話したことです。このような観点から振り返ってみると、『資本論』第 1 部の労働過程はたしかに独特な意味をもっていると思います。読んでいることを前提に話をしてしまいます。『資本論』第 1 部、第 5 章第 1 節、労働過程です。人間の労働はどのような姿をしているかという話を、非常に一般的に抽象的に話している節があります。

この節は、労働価値説に基づく搾取論に対して、冒頭からずっと商品の価値規定を労働に基づいてするとしてきた中で、一風違う趣をたしかに帯びています。そこでは価値を形成する労働、商品に対象化された労働という一連の議論からいったん離れて、人間の活動を特徴付けるものとして労働なるもの一般の性質が論じられています。

宇野弘蔵がここを非常に拡張しました。先ほど『資本論』を正面から疑ってかかる覚悟が必要であると言いましたが、それはここからです。新たな労働が変わるという話をするときに、この労働過程はたしかによくできていて新しい視点ですが、しかしこれで良いのかというとそうはいきません。よくみな

さんがご存じのように、ミツバチの活動と人間の労働を比べて印象深く読むことができるところです。他は難しくてもここは読みやすいと言う人も多いです。この書き割りの下で労働概念を書きつぶしていけばよさそうに見えますが、これには落とし穴があります。

研究者相手に何かをするときは、この辺りについてこのように言うときは、相当にしっかりとした解釈をして、どこに盲点があるということを示さなければいけません。それは部分的にですが、今日の他の報告でもみなさんがよく挙げていた経済理論学会の雑誌『季刊経済理論』に以前、書いたことがあります（「熟練内包的労働の一般概念：オブジェクトとしての労働」）。これをクリックすると現れます。熟練内包的労働の一般概念、オブジェクトとしての労働という難しめのタイトルを付けてしまいましたが、これが載っているのでのぞいてみてもらうといいと思います。これは以前に書いた話を、ブログのここに書いてみました。

少し難しいタイトルですが、中身がごく単純な話です。労働過程のところに戻って、熟練とは何かを考えてみようということです。当たり前のことですが、これがなかなかできない仕掛けになっています。考えればいいでしょうとなりますが、そうすると他のところとの関係が一気にさまざまな問題を起こしてしまうような形になっています。『資本論』のテキストを批判しながら話しました。結論だけ少し言います。この辺りから三つほどウェブの報告資料を読んでみます。

まず「意志と身体の未分離」です。それから、「手段の欠落」、「他者の不在」です。2番目、3番目が先ほど上のほうで述べた三つの話と大体は重なります。そのような構造になっています。これも時間がかかるので今はカットします。読んでもらえると、なぜこれが盲点なのかと思うかもしれません。私はみなさんが良いと言われれば言われるほど疑いたくなります。人間の労働とミツバチの活動を比較した、あの有名な労働過程論で本当にいいのか？　とても疑問になってきて、この論文を書きました。そこには先に挙げたような欠落があるのではないか、ということです。マルクスの中で労働価値説に縛られていない労働を書くには、そこしかないでしょう、と言ってそのまま受け止めると、他者の不在、など、この辺りがそのまま盲点になってしまうと書いてみました。

そういうことを踏まえて、ようやく本題です。では、労働概念はどのように拡張できるものに変えますかという話です。あとはここからです。

労働の概念です。これもいろいろと書いています。初めに労働という用語の定義として、ここでは欲求・必要を目的意識的に実現する活動と言葉を定義します。これはあくまでも用語の定義であって、考察対象に外側からラベルを貼ったにすぎません。ラベルを貼って終わりにしてしまう人も多いです。見てみると、AI というラベルを貼って中を分析しないことがあります。それは言葉の言い換え、定義を与えただけで、それから中身を詰めて概念をつくっていかなければいけません。欲求とは何なのか、目的意識的は何なのか、実現するとはどういうことか、そのような中身を分析していかないと概念にはなりませんが、なかなか概念をつくらずに定義で終わらせてしまう人も多いです。

少しだけ余計なことですが、書いたので話します。概念とはどういうものかについて話してみます。マルクス経済学では、『資本論』の Begriff の日本語訳として、概念という用語は多用されています。これの影響でみなさんもよく概念と言います。それは多分に 17、18 世紀のドイツ哲学をバックグラウンドにしたものになっています。経済原論では、例えば一つ一つの商品の特徴ではなく、どの商品にも当てはまる一般的な性格が対象となるので、当然、後者を意味する商品概念が中心問題になってきます。

ただ、このような概念的把握は、オブジェクトという考え方をベースにした最近のプログラム言語で、より明示的に行うことができます。ここでオブジェクトと言っているのは、属性、性格とその働き・振る舞い方、そういうものをセットにした一種の構造体です。データをどのように捉えるかというと、前はさまざまな属性だけを並べて、せいぜい配列に置くような形でしかなかったものが、その属性固有のものを捉えます。

例えばこういうオブジェクトだと、これに位置や名前や色が身体 A に付いています。属性というのは身体 A の文字です。それからこのように枠があって、位置があります。このようなものが属性で、それに応じて矢印が出ていますが、こういうファンクションが付いてきます。これがオブジェクトで中身にいくつかの属性とファンクションとメソッドが組みになっているように、最近はプログラムを書きます。概念という言葉を使ってもいいですが、こういうスタイルで中身を明示的に書くことが難しいので、私は結構、オブジェクトは使えると思っていて、実は隠れてさまざまなところで使ってきました。

本日は種明かしです。

こういうオブジェクトという捉え方は、商品や貨幣をするときにそのまま当てはまると思いましたが、労働に関しても内部構造をもたない従来型の労働力という一枚岩について、中身を持たない労働力の限界を打破できるので、とても有効な方法だと思っています。

次に 3.1「労働の定義」、労働の定義にどのように中身を与えていくかについてです。つづいて 3.2「二つの世界」です。こういうことをするときも backdrop をいかに置くかが重要です。知覚、perception ということは昔からよく使う言葉です。私はこれをあるときからよく使うようになりました。これもいろいろと種明かしがあります。知覚できる世界、できない世界という二分法をよく使うようになりました。なんのことですかと思うかもしれません。英語で言うと countable、uncountable で名詞を二分します。身近なところでは、あのようなものを思い浮かべてみれば、われわれが考えているものの世界、われわれを取り巻いている世界が countable な知覚可能なものと、uncountable な知覚できないものという構造でできていると思います。

哲学の人たちにとっては、知覚できないものはどのようにして分かりますか、ということが昔からのテーマです。知覚できないものを超越論と言うようですが、昔は興味があっていろいろとそのようなものを読みました。今は経済学をするときに、このような二分しています。一番はっきりとした分類は、客観的に計量できる対象と、それを超える超越論的対象の区別だろうと思います。

知覚できるほうの対象、つまり客観的に計量可能な対象を片仮名のモノと表記するとします。この片仮名のモノをよく使って議論を進めていきます。backdrop はどのようになっているかというと、世界の下のほうの知覚できる countable なモノの世界と、欲求や意志のようなモノが属する知覚できない世界です。このような大きな backdrop があると考えて、その上で労働、オブジェクトを展開していこうというわけです。

二つの世界ということで 3.3「身体の二元性」です。このように考えると、二分法がなぜ必要なのか、あるいは有効なのか、それは労働者という人間、労働する主体の特徴を捉えるための工夫です。意志の「しよう」、欲求の「したい」についてです。こちらのほうで考えるといいと思いますが、難しいことは置いておきます。「しよう」、「したい」という属性は知覚できないと思います。たしかに労働者の人間にこのような属性が何かしらあるとしても知覚できませんが、両者は知覚できる世界に半分は属する身体に結び付いています。五感を備えた身体を介して欲求は生まれるわけであり、手足を自由に動かせることで、初めて「したい」という意志も働くことができるという構造です。

「したい」と考えてみたときに、身体が両義性をもっていることがポイントです。このような世界に存在している、このようなモノの位置をはっきりとさせることができると思います。知覚できる世界だけでもありません、知覚できない世界だけでもありません、ここです。両義性をもった身体です。

それに対して下のほうの知覚できる世界では、3.4「モノとモノの反応過程」です。これもなかなか分からない人が多いです。モノとモノの反応過程はこちらにモノの世界があります。後でもう少し説明しますが、手段になる金槌でくぎを打つという世界は、モノとモノの反応なので、どれだけの力がかかると、どういうことが起こるのかについて、客観的に自然法則が働いているので、どれだけ意志の力で念力をかけてみても、できないことはできません。ここはモノとモノの反応過程です。客観的な結果が出てくるような、拘束性があるような世界が下のほうの世界にあると考えるといいと思います。

ここは分からないかもしれません。「反応」の部分は取ってしまってもいいですが、要するにモノの世界ということで、そこではいくら意志があっても、意志の力では何も動きません。なぜ動くのかというと、両義性をもった身体と意志が結び付くからです。

次に 3.5「目的意識的」です。知覚できる世界の諸現象に対して、目的物を設定するのは主体です。主体の意図は、この目的が実現するようにしようとするわけです。労働のコアになるのは、この「しよう」、「させよう」という意図的な活動です。この行動の仕方を目的意識的と呼びます。もちろんいくら「しよう」、「させよう」と念じても、自然法則に反することはできません。何が実現可能なのかは、主体が知るべきことです。

労働の概念は駆け足で言ってしまいました。「したい」の中に当然、あるもやもやとした体からの結び付きがなければ、直接、間接にあり得ないような、何らかのもやもやとした欲求があります。意志がもう一つあります。意思のほうもやもやしては駄目です。はっきりと何かを「したい」、「しよう」とい

う意志がある必要があります。普通はこの欲求と意思の二つが重なって、欲求や意志を動かしながら、となります。ただしそれだけでは駄目で、両義性を持った身体を操作して、身体の外にある金槌をたたくと、くぎがめり込むという形で、知覚できる世界に働き掛けます。図のように2段構造になっていると言えば分かると思います。

これは1人で考えたときには簡単です。しかし、人間の労働はそれで終わりではありません。今はコア概念だけを三つ挙げました。人間の労働とは目的意識的、ということでコア概念ということで定義を出しました。定義はこれで結構ですが、どのようにするのかという内容を分析すると、二つの世界、バックグラウンドを置いて、身体の二元性を明らかにします。その上でモノとモノの実現の問題、モノとモノの反応過程は目的意識やこういう定義を、しっかりと内容を詰めていけばコア概念はできると思います。

ここが定義のようなもので、これで終わるものではないことは何となく分かってもらえましたか。労働の定義、労働のコア概念をつくってみました。さて、時間が押してきたので、これで終わりとするのがいいと思います。

実はここからが本日の本題の、労働概念の拡張です。あらすじだけを、あと5分ほど話します。せっかくなので岩田さんのものを見てからにします。このように整理してくれたので、この整理を使わせてもらいます。このように書いてあります。ここから話をすればよかったでしょうか。岩田さんは上のほうを全て外してしまったかもしれません。

コア概念からの基本相への変容は、実は拡張の考え方です。コア概念はここが定義ですが、それに概念のバックグラウンドを付けて、どのようにオブジェクトとしてつくるか、概念の定義をするのかについて話をしました。そうすると、拡張の方向性が三つほど出てきます。

人間の労働はどのようにできているかについてです。これは岩田さんの説明です。ブレイヴァマンが構想と実行の分離を強調したことはよく知られていますが、実はこれはとてもシフトした（一部に偏った）労働の定義になっていると思います。しかし、人間の労働について先ほどの図で拡張の可能性を考えてみると、目的物の設定があります。

一つ目は、人間は他人の欲求を明確な働き、機能に変える部分について、こちらの A さんが B の欲求の形を作るところに働き掛けます。こうなると自分の欲求ではないので、もやもやとした空腹感をどういう働きを持ったもので満たすことができるのかというと、もやもやとしたものをどういうものにすればいいのかについて、A の再度の働き掛けで作り上げます。これが結構、大事なファクターになってくると思います。

これは、どのようにこの2人がコミュニケーションをしながら、相手の欲求を明確な形にするかということです。この活動が自分のときも本当は必要です。無意識にできるものについて、これができることは他人のもやもやとした欲求を明確な形に仕上げることです。抽象的に言うと、そうなります。

例えば商業労働をするのであればまずは、他人のもやもやとした欲求を明確な形に仕上げるところを、人間の労働のコアなところの中の第1フェーズ（相）として置くべきだと思います。商業労働の中身はこのようなことですが、しかし具体的な労働を直接、突然に入れるのはやぼです。入れません。十分に抽象化してから、こういうレベルでの理論をすることが必要です。

次に 2 番目の相です。それはどうすれば実現できるのか、ということが次の問題です。『資本論』や普通の労働論を見ると、目的設定をすると、あとは、ヨーイドン、で目的物に向かって働き掛けます。実はそのようにする前に、逆向きに目的物のほうから見えない働きがあります。これは見えないイメージですが、それを目玉焼きというはっきりとした目的物に変えます。これはモノの世界、こちらは見えない世界の機能ですが、それをさらに具体的な実現可能なものに変えます。ここまでが必要となります。

そのためには、次に目的からさかのぼって、どういう手段でできるのかです。これは1個ではなくて、さまざまなものを組み合わせて手段を体系化していくプロセスが2番目に必要です。それが2番目にあれば、第2の拡張です。相としてはイメージ、目的物を作り上げるという第1相のこの部分と、今度は目的物からさかのぼって手段の体系を作り上げるという第2の相があります。この2つの相を踏まえた上で、3 つ目の最後の相です。これがうまくできていれば自動的にこのようにいきますが、外的要因でかく乱されるのに対して、身体を使って、絶えずコントロールする手段を作ります。自動車を運転するようなイメージです。これは、どれだけ機械が出てきても労働として行われてきました。自動機械とい

っても、今はここで本当に目的と手段の間を、逆にこちらのほうから完璧に戻していくことができれば、今までの 20 世紀に広く存在した操縦型の労働に置き換えることができるかどうかが、おそらく問題になってくると思います。そういう構造になっています。

早足になってしまいましたが、そういう岩田さんがまとめてくれた意味です。元の定義に飛んでしまっていますが、先ほどの岩田さんのところに三つの表でうまい具合に描いてありました。それを見てもらうといいと思います。

このような感じです。図でいうと第 1、第 2、第 3 の三つぐらいの性質を持ったものとして、人間の労働概念については、まずは拡張して考える必要があるだろうということが本日の話です。それをするとどういう効用があるかという話も当然、していかなければいけません。だいぶ長丁場の話になりましたが、ここまでです。こういう拡張をコア概念の上に考えていきます。みなさんがよく話している営業という問題を、労働についても理論的に考えてみることができるし、それをベースにすれば、今の変わりゆく労働のようなものも、右往左往して新しいものを見つけていろいろなことを言うレベルよりは、もう少し客観的、学問的な議論ができるお題ができるだろうという話でした。以上です。

第３部の討論

岩田　ありがとうございました。今回の報告の目的は、労働価値説にとらわれないところで労働過程を考えるときに、さまざまな見方ができるでしょう、より視野が広がるでしょうという話です。労働価値説以外は聞くつもりがない、という方もいらっしゃるかもしれませんが、今回はそれについて取り上げません。小幡先生が本日に紹介した別の論文（「マルクス経済学を組み立てる」）を読んでもらうことになります。まずは割と簡単そうなところからお願いします。労働のコア概念です。

◆質問３０について

小幡　この絵は結構、面白いと思って、自分が描いてみました。主体が２つあります。いってみれば今までの労働過程論は、まずは単体１人の労働者しか考えていなくて、それで何となく自分の頭の中にある欲求について、ミツバチが突然に働き掛けますが、それを対象物にして欲求について、本当はこちらですが、見えないイメージを作り、それを六角形の巣をイメージします。突然にこのように働き掛ける構造になっています。いずれにしても、単体の労働者の世界でした。

もちろん労働する主体は単体でも働くことはありますが、人間の労働の特徴は、人の欲求でも自分の欲求でも、あるファンクション、機能にもやもやとした欲求を、はっきりとした仕様をもった形のものにまずは作り上げます。この労働の活動があります。このようなものは労働ではないと言いますが、目的意識的活動と言う以上は、どのように人間は目的設定をするのか、どういう能力があるのかということを第一に考えなければいけないだろうと思います。

ここの部分を第１フェーズ（相）と考えました。感情労働の質問もあります。要するに、こういう相手の感情をどのようにするかです。自分が感情で感情に働き掛けるのではなくて、意志の力で相手の感情をはっきりとした形に作り上げていくことができるのか、実はこのような活動が広くあります。これが第１のフェーズだと思います。それのベースになっているのは、人間のコミュニケーションでは、身ぶり、顔つきであろうと、さまざまなコミュニケーションの力をもって働き掛けます。このフェーズがあることは非常に見ておかなければいけません。それが第１です。

次に手段です。ここが感情労働と言われている方の質問は、自分の意志でどのように自分の感情をどこに変えればいいのかについてです。欲求プラスアルファぐらいです。この世界では自分で自分に働き掛けるような話ですが、もう少し広げて考えたほうがいいと思いました。感情労働の話に答えてしまいました。

岩田　感情労働についての質問は、実は泉先生への質問でした。

小幡　これは答えませんでした。1 番目のものは、商品経済的な関係になれば、この商品が他人のための使用価値であることにつながっていきますが、より広く商品であろうと、なかろうと、というレベルの話を今はしています。

岩田　相について質問があります。目的設定、手段設計、逐次コントロールの、三つの相があります。少し言い方が違いますが、目的を設定して、手段を設計して、そして実際に自然過程をコントロールして労働を行うということです。3 つの相の関係がどのようになっているのかということです。

◆質問２９について

小幡　この場合は排他的ではありません。例えば貨幣論では排他的というのが強く出ます。物品貨幣か信用貨幣なのかは、「変容」のレベルでいくと両方があるとはならないという意味では、みなさんと同じように排他性があると私は考えています。

しかし、全ての変容論が存在として排他的、というわけではないと思います。そういう意味で、同時存在といえば同時存在ですが、同時存在のときに気を付ける必要があるのは、同時存在ということは三つが重なって分からなくなっている、というのでは全くありません。同時に存在しながら A、B、C、第 1 相と第 2 相と第 3 相ははっきりと区画します。理論なので A、B、C にはっきりと分かれるという

意味では同時に存在しますが、「同時にＡであり、かつＢである」ということはあり得ないという意味では同時存在ではありません。

変容論の大きな場合の分岐の話では、同時にすることさえ防ぐことができれば、私は理論上ではできていると思います。ＡとＢの二つが重なってしまうような概念は、理論の中でよほどのことがなければつくるべきではないと私は思います。Ａ的Ｂのようなものをつくっていくことや、Ｂは広義のＡであるというように、二つを重ねてしまうようなロジックの作り方をすると、Ｃがはっきりとできるような推論はできなくなってしまうので避けます。

ただ、存在として同時に二つがあるかないかという意味では、実在の形で物品貨幣と信用貨幣が同時に本位のレベル、つまりそれで価値表現をするという機能においては２種類が同時に併存することはない。つまり貨幣の場合は２つの相が同時に存在しない。その意味では貨幣では二つの相は排他的です。

岩田　はい。まだ重い質問が後ろに残っていますが、最初に軽いところからしないとみなさんが分からないので、こちらからお願いします。

◆質問２８について

小幡　はい。資本主義の発展の中において、労働がどのように発展してきたのか、歴史的変容という言葉を私はできるだけ避けたいですが、歴史的変容はここです。変容はロジカルな分岐の可能性の話をしているので、歴史的に変容することは発展と言います。ここは外的条件がいろいろと入ること、技術の状態や労働者の組織能力の問題等、さまざまないくつかの外的条件を入れながら、歴史的な発展は考えていかなければいけません。

ただ、発展といっても、むやみやたらにどうにでもなるわけではありません。そのベースには労働の基本的なコア概念があり、理論上で拡張の可能性ができていれば、どういう方向での外的条件が入ったときに伸長があり得るのか、そのようなことを考えるベースになるでしょうと私は考えています。

岩田　ありがとうございます。まだ時間があるので、もう一個だけ軽い質問をします。より具体的に話してもらうと分かる気がしますが、具体的にせずに抽象的に考えるべきだと言われるかもしれませんが。

◆質問２７について

小幡　未来の時代の労働を「相」から考えると、どう違いますかとあります。AI の時代のようなことを聞くと、理論でしている人間は引っかかってしまいます。AI は何ですかとなってしまいますが、今はその辺りについて、それほど理論にシビアではない人もいると思います。今の AI の時代と言うことについて、私はコンピュータサイエンスのようなものだと思います。人工知能については中身の広い範囲をおわない。そうではなく、センサーや手のように動くアクチュエーターといった物によるさまざまな組み合わせを考えたほうがいい。人工知能と言われているものに考察を絞り込まないほうが私はいいと思います。

その話はともかく、私はここで結構、20 世紀の操縦型労働を強調しました。本文を読むと詳しく書いてあります。『資本論』には機械制大工業になると労働は単純化して、どんどんとなくなっていくと、機械と労働の排他性がとても強く書いてありますが、よく考えてみると、20 世紀に広がっていった機械は、実はオペレーターやドライバーがいます。ミシンでも何でも、ある意味で非常に理論性が強い機械が出てきますが、自動車といいながら必ず運転手がいなければ意味がありません。そういうものを「自動」車と言うのか？　疑問にもなるでしょう。そういう意味では、操縦型労働は労働を非常に多く吸収するような性格の機械でした。

AI の時代というか現実を見てみると、そこも操縦型労働に対する圧力が非常にかかってきています。コンピュータサイエンスが発展してきます。もう一つはセンサーの発達、それによって大量のデータが文字にならずに、目で見たような画像レベルでデータが入ってきます。入ってきたデータも全てデジタルデータなので、今までに扱っていた文字や音と同じデータとしてコンピュータの中で操作できて、大量処理ができるようになりました。

そのような技術が出てくることで、今までに人間が見て手で操縦をする、ハンドルを回す、身体を使

っていた部分に対して、相当に柔軟なアクチュエーターという手や足のような働きをするようなものがいろいろと出てきました。その総体が今の労働の構造を変えようとしていることは確かだと思います。

岩田　相から言うと、何か言えることはありますか。

小幡　相から言うと、3 番目の逐次制御が操縦型労働の最大の役割でしたが、そこの部分のウエートが後退していくことはあります。その分、逆に手段設計のほうが実はとても労働吸収的です。コンピュータは命令をすれば自然にしてくれるものではありません。今の段階では、プログラムを書くことはとても時間がかかります。それもいずれはどんどんと自動化されていく世界だと思いますが、今のところはコンピュータのプログラムを書くようなレベルです。広い意味ですが、そういう部分、手段設計のほうに労働がずっとシフト、変形していっています。相から言えることはそういうことだと思います。

岩田　こちらの領域からこちらの領域ということですか？
小幡　そうです。

岩田　理論家の方は具体例に踏み込まないところがあるので、実証的なことについては、みなさんご自身で考えてもらうといいかもしれません。
　次は報告に即した上で、とても難しい質問がいくつかあります。時間がかかるかもしれませんが、丁寧に答えていただきたいと思います。

◆質問３１について
岩田　要するに、これは、1 人では目的意識はなくて、他者に対してでなければ目的意識がないのではないかということです。割り切ればそういう意味だと思います。

小幡　今まで考えてきたように、自分の欲求を目的にしていくことは当然にできることを第１前提にしています。そして、自分自身の空腹感が、例えば目玉焼きの形で現れるでしょう。まずは先に何かもやもやとした空腹感があって、それを何でどのように満たすのかは悩むことはない、とは思わない人もいるでしょう。いつも自分の場合でも、もやもやはあって、それから目玉焼きというように頭の中で、意志で考えなければいけない人もいると思います。私は大体、そういうことはなくて、もやもやとしたものが具体的な機能をもったものと一体になっています。
　しかしここでのポイントは、それしかできないかというと、そうではない、ということです。もともと商業活動はそうですが、人間は他人に対して働き掛けて、相手の欲求に対して本当にそういうものは実現できますかというような形で、コミュニケートをしながら相手の欲求を明確な形にすることができると思います。
　これは本文に書きましたが、この領域は商人の仕事、つまり資本家の仕事なので、労働ではないと割り切ってしまわずに、もう少し一般的に労働過程、広く目的意識的な活動としたときに、そこまで人間の労働の範囲を広げていくことがおそらく必要だろうと考えています。むしろ、第２の相が今までに盲点になっていたけれど、目的を設定することがただ自分の欲求を目的物に変えるだけではなくて、相手のもやもやした欲求を明確な形に作り上げていくという活動が広くあります。
　この活動は具体的にいうと、資本主義の下で商業労働にたくさん吸収されてしまう場合もありますが、しかし商業労働と同じ意味ではありません。別の形です。本日も出てきた共同なんとか、コミュニズムのような感じでいえば、あれには中身がいろいろとあると思いますが、生活過程をもう少し理論の中にはっきりと置けば、そういうところに広がっていきます。そして、別のスタイルの労働になることも十分にあり得ると考えます。そういう変容の可能性を含んだものとして捉えておくべきで、資本主義の下での商業労働だけにこの部分を押し込んで、それが価値を形成するかしないかの問題だけに絞り込んでしまうと、今、起こっている労働の、大きなシフトの問題が見えなくなるだろうと思います。
　私が繰り返し強調しているのは片仮名のコミュニケーションです。意思疎通です。人間には非常にその能力があって、そこに今の人間の、労働の大きなウエートがかかっていることが大事だと思います。

コミュニケーションは言葉と言葉、フェース・トゥ・フェースでするだけではありません。コミュニケーションは英語で意思疎通という意味と同時に、インフォメーションテクノロジーのときに ICT といって、Information and Communication Technology で、情報通信技術の通信がコミュニケーションです。2 番目の意味の通信という過程が必ずあります。意思疎通のコミュニケーションには通信が伴って、通信の部分にコンピュータを軸にしたネットワークの世界が広がってきています。意思疎通は昔ながらの形ではない意思疎通、コミュニケーションの世界が広がってきています。

ここに人間の労働の大きなコアの相が膨らんで広がっていくことも射程に入れて、今の労働の変容を考えなければいけません。表面的に見て、サービス労働が増えた、減ったようなレベルで捉えていると、全く問題の本質が見えてこないだろうと考えて、第1相をAとしています。明確に2相、3相と切り分けて設定していくことが大事だと私は思っています。

岩田　ありがとうございます。1 相についてです。他人の目的を自分の目的とできるように、いろいろと相手の考えていることを理解して、こういうことですかと他人の目的を設定することが強調されているところだと思います。ただ、この質問はその先を言っています。小幡先生が前に進めたいと言っていることを前提とした上で、もう少し前に進めてみるとどうなるかという話になっています。先に言えばよかったです。

小幡　先に進めているというのは、他者の労働と呼べるものですか?

岩田　自分だけだと目的は簡単に入ってしまうので、他人の目的を自分のものにするようにしなければ、自分だけではそもそも目的意識活動にならないのではないかと言っているようです。

小幡　他人の目的ですか?

岩田　目的設定のところで、自分の目的であれば、それほど明確に意識化しなくてもいいので、他人の目的を自分の目的にしようとすると、非常に意識的な活動が必要ですが、自分の目的の場合は、ぼんやりとしていてもなぜかうまくいってしまうということです。他人に対するものでなければ、明確な目的意識的な労働にはならいのではないかという質問です。

でも、自分の目的であって、おそらく 2、3 の辺りはかなり労働になると思うので、それほど問題はないと思います。1 だけを切り出してみると、そういう問題が起きるかもしれないという質問だと思いました。

小幡　もう一回、繰り返します。意識をどこまで強くするかは別として、私は自分でもできます。ただ、他人との関係でコミュニケーションを通してとなると、はっきりと目的意識的にしなければできないだろうと思います。そのため、2 番目で強く色が出てくるという識者が出てきますが、潜在的には 1 人だけの世界でもあり得るという答え方です。

岩田　1 人だけでも自分が本当に何をしたいのだろうかについて、たしかにあるかもしれません。本当に眠いけれど、勉強をするかどうかということがあるかもしれません。

小幡　自分で論文を書いているときも大体はそうですが、もやもやしたものがあります。果たしてこれを人が読んで意味が分かるものに形づくろうという、結構、もやもやとしたものがあります。今の議論をしているような世界は一応、コミュニケーションがとれていると思いますが、論文を書く世界では、本当に他人の言おうとしていることを明確な自分のもの、あるいは第三者が分かるようなものに置き換えていくような活動を意識的にしなければならなくなります。

自分で書いているときは、何回か書いているともやもやしたものが何となく形にできますが、討論をしながら一つの結論や文章を書くことや意味のあるものを作る活動についてです。これが広い意味で人間のコミュニケーションの力が強く出てくるところだと思います。少しずれてしまっているかもしれま

せんが、そういうことです。もやもやとはっきりの話は、いつもしながら考えています。

岩田　ありがとうございます。もう一つだけ報告に即した重い質問があります。「相」についてです。

◆質問３２について

岩田　小幡先生の教科書の内容（小幡『経済原論』）に関したものです。自然過程に対して労働が関わるという話をされました。先ほどの金槌の話であれば、金槌とくぎの頭がぶつかることは自然過程です。それをコントロールすることが労働のコアということで言っています。逐次制御だと思いますが、こちらのほうから中心に考えていくと、だんだんと人間労働の介在する余地が少なくなると思います。

おそらく①、②のほうを言いたいということで、①の質問からです。3 つの相のうち、小幡先生の生産過程論の場合は 3 番の逐次制御論のほうが大きいのではないかという話だと思います。生産過程論と労働過程論の違いかもしれませんが、何か思うことがあればお願いします。

小幡　生産と労働の問題はとても簡単に垂直水平に分けてしまって、私は「労働なき生産」という考えをとっています。生産とは基本的に増えるか減るかという、モノの世界の話です。外的にさまざまなショックや何かがあっても、金槌で打っても思うようにいかないことがありますが、身体を使ってコントロールをするならば、目的実現をする方向へ外側からコントロールします。労働がなければそれ起こらないかというとそうではありません。このプロセスは自然法則が支配しています。物が落ちればあるショックがあって、熱が上がれば物が溶ける、みなが設定すれば多かれ少なかれ自動性をもっている世界だと考えます。労働時間がなぜ客観性を持つかというと、このコントロールするプロセスに客観性があって、何回かたたけば、釘が突っ込むというものです。これは念力の世界ではなくてもできます。それを間違えないように 10 回打てばくぎが引っ込むことに、10 回打つのに 1 分がかかるという労働時間の客観性が出てきます。

こちら自身にあるのではなくて、ベースにあるのは物と物の世界にコントロールをかける労働量に、かけられるほうの客観性が反映されて、何時間何分という形の定量性が出てくると考えるといいということが私の立場です。①の答えはそれでいいですか。

岩田　はい。おそらく②に関係するので、そのまま②に移ります。②は 2 つに分けて考えていただくといいかもしれません。

まず一つは㋐「第三者に委ねられることに伴うコミュニケーション」で、そもそも何を生産するのかのところでコミュニケーションがあります。これはおそらく小幡先生が言うところの目的設定に当たるところです。

もう一つは㋑「生産物を所与として編成される生産過程内のコミュニケーション」で、生産過程を行う段階でもコミュニケーションがあるだろうという話をされていると思います。次に、商業活動と言われるところですが、㋐他人のために何かをしてあげる場合は、直感的には商業に限らないような気がします。生産では、㋑生産活動の中でもコミュニケーションがあって、それは必ず必要なものとしてあります。この部分は従来の生産過程論の中で論じられることです。そのような話をされていると思います。この二つを混ぜると良くないのではないかという話です。

小幡先生ははじめの部分㋐を強く主張されたと思います。この質問をされた方は、もう一つのコミュニケーション㋑もあるのではないか、ということが質問の始まりだと思います。難しい質問だと思います。

小幡　まず 1 番目の文章に書いてある話について言います。要するに今、書いた限りだと、まだ 1 人の主体が相手の目的物に向かって 1 人で働き掛ける形で書いています。協業という議論をより理論的にするとすれば、生産物は基本的には所与となったうえでの生産過程内のコミュニケーションの話です。協業論です。

本日は協業と分業の話まではとても手が届きませんでしたが、大事なポイントだと思います。どのようにして共通の目的物を共有していけるのかについて、これが今までは顔を見ないとコミュニケーショ

ンをとることができないと考えられてきましたが、コンピュータが発展してきて、今の段階で協業論はコミュニケーション論をベースにしながら、通信コミュニケーションをベースにしながらより広く考えなければいけません。理論的にも、今まで協業は付け足しで分業ばかりでしたが、協業と分業の概念的区別も明確にさせながら、独自のコミュニケーション論として確定していかなければいけない、これからの課題だと思います。本日は一切そこに入ることができませんでした。

それから2番目の、前者は商業活動が関わることもあるが、それは商品経済に固有ということは、資本主義経済のあるフェーズを考えると、大体は相手の欲求を引き出す形を付けるための、コミュニケーションを通しての活動です。そういうものについて、今まではだいたい、無言のコミュニケーションが想定されていました。分業論もそうですが、無言で物を媒介して商品を見せればいいというものです。棚に並んだものを言わぬ商品を選ぶ形で、実は商業活動をしています、そう考えていたのではないかと思います。ここに少し商業労働が出てきました。それも相手と交渉しながらコミュニケーションする、そのようなものも含まれる商業労働が少し出ました。

労働論一般をするときに、そこに絞り込んでしまうことはとても狭いと私は思います。商業活動はもちろん具体的な一つの多態化をする中で、そういう形で実装というか現実に出てくることもありますが、より多様な形で欲求を形にする活動があります。医療の問題も、私が長いこと取り組んできた教育の問題も、ある意味ではそういう活動です。おそらくそれを全て商業活動だとは言わないほうがいいです。学生の人とコミュニケーションをして、相手が言っていることを明確な形にします。説得されているのかしているのか分かりませんが、したいという広い活動をより労働論の中心部分に据えないと、今、起きていることはなかなか見えないと思います。

あるいは、そういうことを据えてみると、特に今のネットワークが発達しコンピュータが入ってきたときに、どのように大きな変容が起こってくるのかも見えないと私は思います。

岩田　ありがとうございます。本日のメインは労働過程論ですが、労働過程論の次は労働組織論（協業と分業）になります。私は労働過程論から労働組織論へつながる面白いテーマだと思いました。

あと二つ質問を紹介します。専門外の方から方法論の話が一つです。それから、今回の報告とは少し外れるかもしれませんが、抽象的人間労働の関係ということで、通常の経済原論体系や『資本論』体系の中で、本日の報告と他の場所との連関です。本日は backdrop、書き割りと話をしていましたが、他の書き割りとの関係がどのようになっているかの質問と考えてもらえると、割と滑らかに答えてもらえるのではないかと思います。この二つはどちらが先でも結構なので、お願いします。

◆質問３５について

小幡　これは私の性格、好みもあるかもしれませんが、前半でかなりくどく方法論の問題について長く話してしまい、後半に時間を取ることができなくて申し訳ありませんでした。その前半の方法に関わることで私も興味があるので、この辺りは次に考えてみたくなります。

経済原論を長いこと取り組んできて、本当に不自由だと長いこと思っていたことは、一枚岩というか一様な原論体系という考え方がとても支配的です。先ほども少し言ったような労働過程論の中で熟練を考える場合でも、先の労働価値説のように労働時間の計算においても、熟練の問題を労働価値説としっかりと整合させなければいけない、という制約が強くかかる構造になっています。

それは最初に言ったように、マルクス経済学のどこに一番インパクト、効果があるかというと構造変化、要するに変容です。市場の構造が変わること、労働の内部にこのようなストラクチャーや構造があって、三つの相があります。それが連鎖していると作っておけば、構造変化の話がより良くできる理論・スタイルのベースがマルクス経済学にはあります。しかし、熟練労働を言うと、それと投下労働価値説でどう計算上は一致しますか？という質問になります。しかし熟練について、そのときにその質問をする人たちはもともと熟練について何も考えていません。あたかも熟練をシャベルか何かのように作って、労働者が持ってくるようなものにして、つじつま合わせのような議論ばかりをするようになっていて、これでは駄目だと思いました。

本日の最初に言ったように、そういうところを柔軟に仮想的に課題に応じて前提を明示し特徴付けるより、それぞれの理論空間を切って積み上げていく方法を使ったほうがいいのではないかと思っていま

す。そのことについて、例えば経済学以外の理論的な学問では、それなりにできているのではないかと思っています。とはいえ、他の学問には中に入っていないので分かりませんが。この種の追求について、これまでのマルクス経済学では、熟練を言ったら、こちらがおかしくなるのではないか、労働価値説がむちゃくちゃになってしまうのではないかと感じるような、その手の議論で縛り付けることがあります。しかしおそらく量子力学をしている人に、古典力学との整合性に問題の中心があるように問う人はいないでしょう。それぞれの理論空間で説明していく方法をとります。

おそらく整数論と解析学をしたときに、離散的なものを対象にする整数論と連続的なものを対象にする解析について、数学が一致しているか一致していないかということにならないと思います。少なくとも、原論はそこの縛りが強過ぎて、せっかく構造変化の問題が見事にできるようなところにもかかわらず、自分で縛ってしまっています。そこを何とか改革したいと考えていろいろと模索しました。

唯一のモデル論は唯一ですが、その内部には理論空間がしっかりと切り分けられた唯一のモデルと考えていいと思います。経済原論は唯一のモデルなのかについてです。いくつもあるとは全く言いません。ただ、内部に異なる理論空間がしっかりと折りたたんでしまわれている、そういう全体です。

岩田　今の答えは経済原論の中にも複数の理論空間があるということで、質問は他の経済学体系との違いもあります。こちらはどうしますか。

小幡　他の経済学体系ですか。私は絶対に他の経済学体系とは混ぜません。これは信念の問題なので、あまり語っても仕方がないかもしれません。

岩田　他の経済学との相違は「マルクス経済学を組み立てる」という論文にあります。ミクロ経済学では貨幣がない、その辺りでいくつかあります。すみませんが、時間の関係でここまでとします。では、最後の質問をお願いします。

◆質問３４について

小幡　抽象的人間労働概念はどうなるかについてです。私は抽象的人間労働論について、この辺りは全て、抽象的人間労働は要りませんと教科書に書いてしまいました。社会的労働という概念も物神性論のところを読むと、私的労働と社会的労働がマルクスのテキストの中で出てきます。物神性について考えたことがある人は分かると思いますが、私的労働はそのまま価値の実態をなすものではありません。平たく言ってしまうと、商品関係を通して社会化された社会的労働として、初めて価値につながるということです。亡くなった大谷禎之介先生がよくそういう話をしていたと思います。しかし私はそれも全て捨ててしまいました。その話は結構、長くなりますが、結論としては、関係ありません、ということです。

岩田　無理に関連付けるよりも、方法論が変わったということにしたほうが話は分かりやすいということだと思います。今日はそれ以上、話が続けられませんが、小幡先生の教科書の中に、抽象的人間労働を使わない理由が書かれています。ちょうど時間になりました。大体の質問については答えたと思います。明らかに取り上げないと言ったテーマ以外は、大体は取り上げて答えてもらったと思います。

本日の質問を受けていろいろと討論をした上で、前の二つの報告も含めて、特に今後、学生や研究者の方々に対して、今後の方向ということで提起するものがあればお願いします。

小幡　岩田さんに研究会を設定してもらいました。私が考えていたようなことと、第１報告、第２報告はそれぞれが違う角度かもしれません。ある意味で角度は違っても、方向は似たような方向性をもっていました。今までのマルクス経済学への批判というか、そういうものを積極的にベースにおいています。批判は決して悪いことではありませんし、『資本論』を批判し、宇野を批判します。何のためにするかというと、そういう批判が必要なのは、今、あるいはもう少し前からですが、現実が大きく変わってきている中で、マルクス経済学の理論がもつ融合性を生かしていくには、かなり大胆に根本のところから考え直す気概や覚悟が必要だからです。そういうことをしようと思う人がいるだけでも、私は本日の話

をいろいろと聞いて面白く思いましたし、私もフォローしてみなさんについていきたいと思っています。そうは言いつつも、かなりぼろぼろになってきているので、あまり新しいことはできません。

最後にどのようなことをしていますかということです。学部の学生や大学院生を見ていると、今は東京理科大学で講義をしていますが、本日にしたような話は、実は学生に向かって話しています。なので、このページは自由にご覧ください。私は恥ずかしいことはあまり考えないので、さまざまな質問を学生に投げかけて、回答を見ています。目的とは何か、道具の話等です。『資本論』のテキストを引用して、学生にこれはどのように読みますかというようなことを言いながら、誘導しながらいろいろとしています。このようなページで学生も結構、回答があります。何枚も出ていませんが、回答が出てくるようなこのようなこともしているので見てください。

そういう意味でもう一つです。昨年に行った情報通信技術とこれからの労働という講義も駒沢大学で行いました。このようなものも別に専門家相手ではなくて、学生を相手に情報とは何か、通信とは何か、そのようなストーリーです。情報通信技術が労働に対してどのようなインパクトを与えてくるのか、そのようなことを講義で行っています。これも学部の人で興味があれば、教科書を買わなくてもこの辺りを見てもらえると何となく分かると思います。面白い問題もいろいろとあるので紹介しておきます。

本日は本当に私も長い時間で聞かせてもらって勉強になりました。みなさんと共に新しい原論を作っていきたいと思います。以上です。

まとめのあいさつ

岩田　ありがとうございました。まとめとしては特にありませんか。最後に私からのあいさつをして終わります。プログラムは 10 分間になっていますが、すぐに終わります。

参加されたみなさま、本日は長い間、ありがとうございました。多くのみなさまのご参加、そして質問や感想を寄せてもらいました。今回の企画は、現代の資本主義を考えるために、マルクスや宇野の報告を踏まえながら、それにとどまらない新しいマルクス経済学の方法が示されたと思います。新しい方法というのはこれまでの方法とは異なるので、さまざまな前提が違うこと、それは納得できないというように、議論が難しいところがあります。実証研究と理論研究との間にも、いろいろと緊張関係があります。しかし、それでもお互いに問題意識をすり合わせながら議論を深めていくことが必要になります。

今回の報告の内容は完全なものではなくて、新しい内容が示されて議論が始まったことが重要です。東京経済大学の学術フォーラムは、本来はこの後にレセプション、懇親会があって、これから本当の議論が始まるところもありますが、今回は残念ながら行うことはできません。しかし、このウェブサイトはまだ続いているので、今後も質問、感想、より聞きたかったことをぜひ送ってください。ぜひ感想等も送ってください。それに対して、報告者の方を中心にして回答をする、また議論を続ける場合もあります。それから教員、学生の方は、ゼミや授業で議論を続けてもらえるといいです。

また、今、小幡先生が紹介されましたが、銀座経済学研究所、その他のウェブサイトがあります。私のブログもあります。他に役立つサイトもあれば、ご紹介ください。そういう場でも議論を進めていってほしいと思います。そのような場に積極的に参加して、学生の方は自分の勉強、研究者の方は自身の研究にぜひ生かしてもらえればと思います。先ほど言ったように、ウェブサイトはまだ続いています。同じように当 Google フォームから質問、感想等のぜひ聞きたいことを送ってください。

それでは、本日の企画はこれで終わります。参加者の皆さま、ありがとうございました。報告者のコメンテータの方、それから準備や運営に手伝ってくれた方々、ありがとうございました。（了）

質問一覧

質問１．「資本主義の諸タイプを構成する必要がある」とのことですが、諸タイプとはどのようなイメージになるのでしょうか？

質問２．今回は方法論中心ですが、イメージしやすくするために、開口部、外的与件の変化の具体例を挙げてもらえませんか？　20 世紀中葉、今の現代、これらの違いなど。それとも、意図的に具体例を論じないほうが良い、ということでしょうか？

質問３．「開口部」の活動は活発になったり不活発になったりするのでしょうか。だとすると、その「開口部」の活動の活発・不活発の程度を規定する基本的な要因というものは何（資本主義社会におけるどのような状態）なのでしょうか。

質問４．村上先生の質問に対する回答の中で、原理論と段階論はセットであり、段階論を修正すれば原論も見直さなければいけないと述べ、付け加えて「労働力商品化」のみを外的条件として想定すれば、原論の組み立てとして十分だろうか？と言われました。「開口部」も原理論の外的条件として想定しなければいけない、ということでしょうか。

質問６．資本主義が発展していくとその内部に非商品経済的要因が広がっていくことはありませんか？巨大企業内の「官僚化」や、大きな労組と大企業の関係とか。

質問７．「非商品経済的要因」についてその中身としてどのようなものをお考えなのでしょうか？

質問８．泉報告への質問現代資本主義を分析するために、政府と市場が共に拡大しているとすると、政府の「経済的」活動を理論的にとらえるのか。資本家的活動とは異質な「経済的」活動が肥大化するとき、政府の行う「非商品経済的な」分析が必要なのではないか。（参考　ハイルブローナーは公共部門を「一つの経済部門」として捉えている。）現代資本主義を分析するためには、公共部門と私的部門の両方の理論が経済原論として必要となるのではないか？

質問９．グレーバーが言うような基盤的コミュニズムとしての相互扶助関係というようなものを非商品経済的要因として考えたりしていますか。

質問１０．報告者は両大戦間期のロシア革命や大恐慌の資本主義に与えた影響を過小評価していないか？ソ連型社会主義が崩壊したからと行って、それが資本主義に与えた影響は無視できないのではないか？

質問１１．労働論を「主体とモノ」の二分法から出発して展開するのは無理があるのではないか。例えばその場合，感情労働はどう説明されるのか。労働「主体」が，自分の感情を「モノ」としてコントロールするというのは擬制的に過ぎるように思われる。現代の労働を考えるためにはデカルト的な心身二元論の批判が必要ではないか。

「感情労働についての報告者の回答には納得できない。対人サービスにおける顧客（の感情）は，外延をもった対象という意味での「モノ」ではあり得ないと思います。また，感情労働がコントロールするのは基本的には労働者自身の感情であって，顧客のそれではないとも思います。他者の感情は原理的に不可知である以上，コントロールできるのは〈他者の感情に働きかけようとする自己の感情〉だと考える方がよいように思います。だからこそ，感情労働論では「顧客に向けられた労働者自身の感情と労働対象としての顧客の感情」のうち，「主として前者が考察の対象」になってきたのだと考えられます（阿部浩之「感情労働論理論とその可能性」『季刊経済理論』第 47 巻第 2 号，2010 年，65 頁）。このような労働過程を「目的意識的活動」という従来型の労働規定で描写しようとすると，「主体」の「意識」

が自己の「意識」に働きかける，といった循環的なかたちになってしまって，説明になりません。「主体」と「モノ」，あるいは「身体」と「意識」といった構図で労働を捉えようとすること自体にやはり問題があると考えます。

質問１２．結城氏スライド 23 についての質問です。資産の複数商品の価値に対応する債務証書が現代の信用貨幣（不換紙幣）の根拠となるという理解でよいのでしょうか？

質問１３．（結城氏 34）「商品論において、商品と財を区別した甲斐がない」と述べられているが、商品と財との区別の中味は、他人のために役立つ＝交換を前提とするもの、すなわち使用価値だけではなく価値（交換価値）を持つもの（commodity）と一般的にただ漠然と役立つ使用価値を持つもの（goods）との違いを指摘したもの――商品⊂財――と考えるだけではダメですか？

質問１４．兌換停止の制度化・無期化」は重大な問題だが、詳しい説明がない。もしそうだとすると、物品貨幣の兌換信用貨幣と、初めから兌換のない信用貨幣とが連続的につながってしまうのではないか。または、それでいいのか？

質問１５．①貨幣のかたちに二つのタイプがあるという議論を敷衍すると、「信用貨幣」のもとで営まれる現代の資本主義は、資本主義の代表的なタイプの一方が出現しているという理解でよいでしょうか。②資本主義の歴史的発展に限定するとして、16 世紀以来、途中何度かの中断を挟みつつも、「物品貨幣」を貨幣のかたちとする資本主義のタイプとは異なるタイプが、現代の資本主義である理解してよいでしょうか。③貨幣のかたちから見ると、資本主義は、過去 500 年間持続したタイプから、20 世紀末以降もう一つのタイプに変わったように見えるのですが、この点、どのようにお考えでしょうか。

質問１６．ただし、複数種の商品のバスケットの価値に対する請求権としての証券が等価形態に置かれるための条件が多い」（スライド 22）とあるが，この条件をもっと特定する必要がある。さしあたり信用機構はその条件になると考えるが，「商業信用ベースの金融債権の集中」（スライド 23）を入れることは難しいと思う。商業信用は「後払い」の取引であり，「後払い」されるのは貨幣だから，商業信用は貨幣概念を前提する。貨幣概念を前提する取引を，貨幣導出の条件につかうことはできない。複数種の商品のバスケットを信用貨幣の萌芽として位置づけるためには，商業信用→銀行信用という従来の信用機構論の論理構成を棄却しなければならないと思う。

質問１７．マルクスの資本論第１巻の商品論における貨幣論は、価値の実体として労働を前提したものであり、他方で、第３巻の総過程論では、信用機構・中央銀行論はほとんど展開できていない。原論体系においては、純粋な流通形態としての貨幣形態の生成を規定するものであり、いわゆる総過程論で信用機構・中央銀行論においてあらためて「通貨論」として論じる必要がある。こうした区別がなされていないように思われるが、どうか？

質問１８．複数諸品による価値表現から証券、そしてその発展形態としての信用貨幣が導かれる。（スライド２１）信用貨幣が流通するためには発行主体として銀行が必要になります、銀行は商品貨幣論から見たとき、外的要因になるのでしょうか。

質問１９．スライドを読むと、中央銀行は原理論の外部に位置づけられ、外的条件として処理されると思われます。その場合、中央銀行に対する理論的説明やその意義についてはどのように理解すれば良いでしょうか？

質問２０．①MMT について、今回の報告との関連があれば述べて欲しい。②財務省の 2002 年の公式見解「日・米など先進国の自国通貨建て国債のデフォルトは考えられない」について、どう考えるか。

質問２１．報告者は，「元本が借り換えで返済されているという点より，利子がきちんと返済されている点が重要」と発言したがそれが重要だと思う。国債はあくまで商品だというためには，国債に価格がつく前提として利子が必要だと思う

質問２２．コメンテータ海先生による疑問点（5）原理論において複数種商品と兌換できる「債務証書」が不換銀行券（現代の貨幣）の抽象形態として位置づけられる理由は何か。」に対して報告者が十全な回答がなかったのでは？

質問２３．初歩的です。「紙幣」という用語について「銀行券」との違いの説明をお願いします。

質問２４．（プログラム掲載スライド 30）マルクスが「貨幣の謎が消え去る」ということの意味は、人間労働（抽象的人間労働＋具体的有用労働の連関）が露出する（・・・等労働量交換の論証問題はひとまず考えないとして・・・）、ということと考えますが、このように解釈していいですか？ダメだとすると、どのように解釈すべきだと考えますか？

質問２５．（プログラム掲載スライド 50）「現代の貨幣は金貨幣論から見ると貨幣ではない」・・・？いわゆる貨幣の３つの機能（商品価値尺度手段、商品流通〔交換／支払い〕手段、商品価値の自立的貯蔵手段）に基づけば、現代の貨幣（不換紙幣〔現金通貨、預金通貨、デジタル通貨〕）も金貨幣も兌換紙幣（金預かり証としての信用貨幣）も、すべて貨幣となる・・・というようなシンプルな解釈――このようなシンプルな貨幣解釈を前提とするだけでも「商品→貨幣→資本」という経路は充分説明できると思いますが――では、現代資本主義経済分析における貨幣論として決定的に足りないものがあるとすれば、それはどのようなものなのでしょうか？

質問２６．歴史的・現実的には、単純に銀行券・信用貨幣として論じるのではなく、国際基軸通貨の問題として論じるべき問題であると思われるが、どうか？　歴史的には、第一次大戦前のパックス・ブリタニカ段階におけるポンド・スターリング体制、第二次大戦後のドル体制の問題である。金貨幣との関係では、ドル体制が分析対象となっていると思われるが、現実の他の国民通貨は、究極的には、国際基軸通貨との交換性が資本主義世界における各通貨の貨幣性を支えているといってよいのではないか？その意味で、ここでの議論は、「ドル体制」におけるドルの貨幣制の本質をどう捉えるかという議論となると思われる。

質問２７．20 世紀の操作操縦型の労働と、AI 時代の労働を「相」から考えるとその違いはどう説明されますか？

質問２８．資本主義の発展段階において、労働がどのように変容してきたのか。「三つの基本相」を分析の基準として、資本主義の下での労働の変容を考えたとき、基本相の要素である“コミュニケーション”、“技術”、“技能”、“操作操縦”などは、歴史的変容のもとでは伸長したり、縮小したりしながら変容するということになるのでしょうか。

質問２９．三つの「相」の関係は？　排他的？　同時存在？　因果関係？

質問３０．労働のコア概念について質問します。資本主義のもとでの労働を考えた場合、主体 A が欲求 B を把握して、働きとして目的物を設定する行為は、「商品が他人の使用価値」であることと共通すると考えてよいのでしょうか。

質問３１．他者とのコミュニケーションを通じて初めて「目的」が明確化されるというなら，労働に「目的意識的活動」という単独の労働過程でも成り立つような定義を与えてきた点も，再考されるべきではないのか。それに関連して，「自分自身の空腹感ならはじめから、たとえば目玉焼きのかたちで現

れるでしょう。さきにモヤッとした空腹感一般がまずあって、それをなにでどうやって満たすか、悩むことはありません。」とあるが，そうでもないような気がする。漠然とした空腹感と種類と量が特定された欲求は，単独個人においても区別される。しかし自分一人だけの問題なら，適当になんでもいいから食べてしまえば空腹は満たされるので，あまり目的意識的活動が要請されない。他者がいてはじめて，労働と呼べるような人間的活動がなされるのではないか。

質問３２．①自動運転＝労働不要論に対抗する形で，拡張の方向性，第一ないし第二の相を示されていますが，小幡氏の「自然過程としての生産過程論」からすると，分業が自然過程に即して行なわれる技術＝自動化が先生のお考えの本筋で，人間の技能が介在する分業＝習熟効果は自動化に至る一コマにすぎないのでは? 個人的関心で言えば，労働の定量性が自然過程としての生産過程論で与えられている(過程の量的収支で生産，消費を分けられている)ために，人間労働の介在する余地が小さいのでは？②欲求に対する目的設定が「第三者に委ねられることに伴うコミュニケーション」（前者）と「生産物を所与として編成される生産過程内のコミュニケーション」（後者）とが区別されていないように見えます。

前者は商業活動が関わることもあるが，それは商品経済に固有のこと。他方，後者は普遍的な生産過程で起きることで，目的のモノとその物量から，労働も労働手段，労働対象もその手段と化し，効率的編成を強いられ，定量性を得る。この場合の生産物が有体物か無体物(サービス)かは関係ないものの，対人サービスと生産過程外の商業労働を同じ労働生産過程論で導出してしまうと，直接的生産労働との異同が曖昧になるのでは？

質問３３．報告は、「投下労働」による労働価値説の問題点にかなり限定して、労働のコア概念に関する議論となっていると思われるが、小幡原論体系における「労働」概念において、「労働の二重性」の問題を含めて、価値の実体的関係としての社会的労働の有機的質量編成の問題はどのようになっているか、もう少し説明してほしい。

質問３４．小幡報告の労働概念の拡張と捉え直しは、労働の二重性における抽象的人間労働の概念とどういう関係にあるのか、あるいは「社会的労働」の概念の拡張にもなっているのでしょうか？

質問３５．経済原論は、量子力学と古典力学のように、ある理論空間でのモデルであることを述べられています。量子力学と古典力学の間は、それぞれにおける理論空間における事象の説明をできるとともに、両者の理論空間の間の相違があきらかになっているものと思います。経済原論が経済学のひとつの理論空間であるということは、他の経済学体系との間にどのような理論空間の相違があるのかを示す必要があると思います。経済原論は唯一のモデルなのか、それとも異なる理論空間の経済学もありうるのかどうか、ということについてお考えになられていることをご教示ください。

質問３６．マルクスの労働価値説、剰余価値説は、現代の情報技術 IT の時代にもあてはまるのでしょうか。

質問への事後の回答

泉氏による回答

春先から何度か打ち合わせを重ねた「フォーラム」も無事に終わり、個人的にはホッと一息つきました。いわゆる学会報告とは異なる環境に、思いのほかプレッシャーも感じていたようです（学会報告に慣れているというわけではありませんが……）。
また、開催まで一か月を切ったあたりに、急遽、村上允俊氏にコメンテータをお願いすることになりました。お忙しいなかご快諾いただき、雑駁な報告に的確なコメントをご準備くださったことに御礼申し上げます。以下、村上氏のコメントに対する回答と、参加された方々から寄せられた質問に対する回答をできるだけ思い出しつつ、改めて文字にしてみます。

村上氏のコメントへの回答

【①についての回答】

基本的にご指摘の通りだと考えます。コメント（2）にも関係してくると思いますが、私が理解する限りでの宇野の発展段階論の枠組みは、「政府」が後継に退くと「自由競争」が伸び、逆ならば逆という、シンプルな造りになっていると思います。このシンプルさが、ある時期までの「時代」を見通す有効で強力なフィルターの役割を果たしたことは十分に評価しつつ、それでは捉えきれない「時代」に突入しているのではないか？という着想でした。

なお、「政府」については、当日の報告時にも補足しましたが、「行政」だけでなく、「立法」も「司法」も含意したいと考えていますので、素直に「国家」と書けばよかったなと思っています。

【②についての回答】

「非商品経済的要因」と報告者は一口に言うけれど、それって一体なに？ というのは、参加者の方々も質問されており、今回の報告で一番関心を惹いた論点だったようです。これまで「非商品経済的要因」と一括されてきた中身を穿鑿する必要があるというのが結論ですが、ご指摘のように、そこには「自作農や家事労働」といった領域から、「政府」のような領域まで幅があると思います。今回、そうした「非商品経済的要因」として、割り切って「政府」を取り出してみたわけですが、1970 年代以降の「政府」と「自由競争」の伸長の背後では、「自作農や家事労働」といった、従来、市場を通して処理されてこなかった領域の市場化が進むということを念頭に置いていました。ここでの「政府」についても当日口頭で少し触れてみましたが、たとえば、価格の度量標準（価格単位）の制定を行う「国家」の役割を「非商品経済的要因」と割り切るわけにはいかないように思います。ハッキリとした方針がワカっているわけではないのですが、何が「商品経済的要因」をなすのか、という問題をギリギリまで詰めていくその補集合として「**非**商品経済的要因」は明確になるのではないか、と現段階では考えています。

【③についての回答】

二つの答え方があるかな、と考えています。（1）宇野の経済学体系において、原理論と段階論はセットの関係にあり、19 世紀末以降の資本主義を「末期」と規定する段階論の見方に疑義が生じるのであれば、その疑義は、対をなす原理論の側にも波及するという答え方。ただ、この答え方では、現状を資本主義の「末期」と理解する人たちからは相手にされません。今回の報告では、（1）の答え方でガンバってみましたが、原理論に内在するかたちの答え方もあると思います。それは、（2）資本主義なるものを論理的に構成しようとすると、その姿はホントに宇野が説いたような「純粋の資本主義」になるのか？ という答え方です。この方向で原理論の精緻化に取り組まれたのが、山口『原論』、小幡『原論』であると私は理解しています。

【④についての回答】

素朴に、「始まりがある物事には終わりがある」と思い込んでいます。なぜそんなストーリーが必要なのか？ という問いに対して、現状、相手を説得できそうな回答を持ち合わせていないことを自覚できました。

参加者の質問への回答

【質問１、２への回答】

関連するご質問だと思いましたので、まとめて回答します。「資本主義の諸タイプ」は、総体としての資本主義のタイプというのをイメージしています。そのため、どこか特定の領域を取り出して「何々タイプ」の資本主義を提示するといった方向はさしあたり考えていません。とはいえ、「では、その総体としてのタイプとは何だ？ 方法論だけやって中身がないじゃないか！」といったかなり強い非難が、別の研究会に招かれたときに投げつけられました。この手の考察は、聴き手の神経を逆撫でしてしまうのでしょう。私自身の『原論』を提示できればご納得いただけるかもしれませんが、それはいましばらくお待ちください。とはいえ、さしあたり部分的な領域のハナシでイメージするとすれば、貨幣のカタチの変化が分かりやすいのではないかなと思っています。16 世紀くらいを「資本主義」のスタートにとるとして、途中何度か中断を挟みながらも、だいたい 500 年くらいの間、「貨幣」の地位は特定の商品種（具体的には金や銀でしょうか）が占めていたように私には見えます。この「タイプ」が、20 世紀末に、特定の商品種としては確定できない貨幣のカタチに変化したのではないか、というのが私の見立てです。貨幣のカタチを決める地点に「開口部」があり、特定の商品種を貨幣に仕立て上げてきた「外的条件」が、特定の商品種としては確定できない「外的条件」に取り換えられた。それに連動して、信用貨幣のカタチも変化した、といったことをこの間考えてきました。

「外的条件」は「制度」といってしまえばいいのかもしれません。

【質問３への回答】

「開口部」はその存在が論理的に推定・確定されるものであり、そこに「外的条件」が作用するというスタイルで私は理解しています。ある領域の「開口部」が大きくなったり小さくなったりするという、「開口部」自体の伸縮の問題は考えていませんでした。

【質問６への回答】

「巨大企業内の『官僚化』や、大きな労組と大企業の関係」を「非商品経済的要因」というかどうかは別にして、その内部に「非商品経済的要因」を抱えながら、それぞれの「時代」の総体としての資本主義が存在すると理解しています。

【質問７への回答】

いろいろあると思いますが、「商品経済的要因」の方を厳密に確定することで、「それ以外」というかたちで「非商品経済的要因」は明確になると思っています。

【質問８への回答】

「公共部門と私的部門の両方の理論」を、これまで提示されてきた『経済原論』の手法で構成することはムツカシイかもしれません。

【質問９への回答】

グレーバーのいう「基盤的コミュニズム」の内容を知らないままに、「相互扶助関係」という語感だけで、「非商品経済的要因のような気もします……」と当日発声しましたが、コメンテータの村上氏から別途、「グレーバーの議論って、そんなに単純じゃないよ」と教えて頂きました。『負債論』、分厚さに萎えてしまって本棚の肥やしになっていますので、時間を作って挑戦したいと思います。

【質問１０への回答】

資本主義にとって、「両大戦間期のロシア革命や大恐慌」は大きな影響を与えたと思っています。当時の「時代」を体感できていないのですが、資本主義が「末期」に直面しているという見立てに強い説得力を与えた出来事だったのであろうと考えます。

【質問１１への回答】

21 枚目のスライドをお示しした際に、「最近、『生産論』も『流通論』と同じ出発点（主体とモノ）から論理的に構成できるのではないかと考えています」という趣旨の発言をしました。その点に関するご質問です。私も制作に関わった『これからの経済原論』（ぱる出版、2019 年）の中で、労働力としての主体を、「意識」と「身体」とからなる存在として提示してみました（70 頁）が、近年のこうした流れを危惧されたものと拝察します。労働論の基本的な造りは、「意識」が「身体」をコントロールし、「身体」が「モノの世界」をコントロールするという組み立てにあると私は理解していますが、「感情

労働」についてはこの造りでは歯が立たないのではないか？というご指摘だと思います。「感情労働」についてそれほど詳しいわけではありませんが、質問者は、「労働『主体』が，自分の感情を『モノ』としてコントロールする」といわれます。一つの見方だと思いますが、他方で、〈労働主体が、自分の身体をコントロールして他者に知覚可能なかたちに『感情』を演出する〉と捉えることもできると思います。この場合、主体が「意識」でコントロールしているのは「身体」であり、さしあたり、労働論の基本的な組み立てで対応可能かな、と思います。人間は、「心」と「身」というそれぞれ異なる二つの実体からなり、それぞれが異なる法則に支配されて動いているが、人間においてはこの二つの実体が巧く結合されて一つの個体として構成されているという、「デカルト的な心身二元論の批判が必要ではないか」というご指摘には賛成で、この問題を事実上取り扱っている最近の労働論をさらに深掘りしてみるつもりでいます。

「感情労働も労働論の基本的な組み立てで対応可能だと思います」という回答に対して、さらにご指摘いただきました。いくつかの問題が絡まっているように見え、ゾクゾクします。ご指摘の要点は、感情労働を「『目的意識的活動』という従来型の労働規定で描写しようとすると，『主体』の『意識』が自己の『意識』に働きかける，といった循環的なかたちになってしまって，説明になりません」という点にあると理解しました。前回答の繰り返しになりますが、感情労働においても主体の「意識」がコントロールしているのは自分の「身体」ではなかろうか、と私は考えます。肚のうちでは「かったるいわぁ…」と思いつつも、お客様の前ではそんな素振りはおくびにも出さず、姿勢を正して眉間を脱力し、口角を上げて相手の話を傾聴するといった身体操作を行うことで、傍目には〈微笑みを絶やさず親身に対応してくれる人〉をさしあたり他者に対して演出できるように思います[1]。もちろん、そうした演出の受け取り方は人それぞれで、「なんかコイツ、嘘くさい」と評価されてしまうこともあるでしょう。そうした評価を覆す必要がある場合には、チョット砕けた感じを演出するために身体操作を切り替えるとかいったことを行うのではないでしょうか。また、「対人サービスにおける顧客（の感情）は，外延をもった対象という意味での「モノ」ではあり得ないと思います」という点については、顧客の感情も顧客の「身体」を介して提示される[2]という意味で、労働主体にとっては知覚可能な外的対象としての「モノ」の一種として扱うことができるように思います（突き詰めて考えてみたわけではないのであまり自信はありませんが……）。さしあたり以上のように考えているため、感情労働論が、労働論の基本的な組み立てを放棄させることになるとは思っていません。

[1] 感情労働に限らずこうした身体操作に関してさらに考えてみたいことは、ある労働に求められる文字通りの「体勢」を整えることで、「意識」の側も「仕事モード」に切り替わるといった論点です。「意識」が「身体」をコントロールするというのとは逆に、「身体」が「意識」をコントロールしているように見えるケースですが、そのことが、目的を設定し手段を逆算して「自然過程」を明確にし、目的実現に向けて「過程」を逐次的にコントロールするという労働論の基本的な組み立てにどのような関係するのか／しないのか、という点は今後考えてみたいと思っています。

[2] 主体にとって直接知覚できない「価値」そのものが、他商品の使用価値のすがたを借りて現れるという組み立てとチョット似ていてオモシロいと思います。

村上氏による回答（グレーバーに関する参加者からの質問について）

【質問９への回答】

まずもってグレーバーの試み自体に、「商品経済」／「非商品経済」というこれまでの枠組みを乗り越えようとする側面が見られるため、不用意な対応付けは避けたいところです。資本主義的企業ですら「コミュニズム」的に操業されていることをグレーバーが指摘している箇所に顕著ですが（『負債論』、144 頁）、「コミュニズム」は「資本主義」とすら、互いに排斥し合うような関係性ではないことが強調されており（あらゆる社会に「基盤的」）、16 枚目のスライドのような、「純粋の資本主義」と「非商品経済的要因」をはっきり分ける図式自体に馴染まないと言えます。それでも無理に質問に回答しようとすれば、発表者が「非商品経済的要因」としたものに部分的には含まれる、といったような歯切れの悪い答え方しかできないように思います。グレーバーの意図を汲みつくそうとすれば、「純粋の資本主義」と「非商品経済的要因」という二分法自体をアップグレードする必要があるのではないでしょうか。

結城氏による回答

海氏のコメントへの回答

【⑴への回答】

「マルクス経済学の貨幣論」の「そもそも」がどこにあるのか、それ自体が論争的なテーマになりそうです。さしあたり、スライドで取り上げた宇野の『経済原論』（新原論）では、貨幣商品が使用価値的な要因で金貨幣に帰結すると述べているように読めます。マルクス自身が貨幣商品・金と述べていることもあり、貨幣商品に最もふさわしい商品として金を導く説明は少なくなかったのではないでしょうか。本報告は、少なくないマルクス経済学者が「金貨幣」を自明のものとしてしまうことで、せっかく価値形態論という複雑なロジックを用いて「商品貨幣」を説明したにもかかわらず、最終的な結論が使用価値的な要因で締められてしまっていることを問題にしています。

【⑵への回答】

「変容論」「原理論」の説明がずれているように見えるのは、報告者のスライドの問題かもしれません。物品貨幣と信用貨幣の出現は同時並行的で、そこに時間的な乖離はありません。

【⑶への回答】

いえません。しかし価値形態論が金貨幣論に帰結するという結論から読むと、価値形態論が物々交換論として再解釈されてしまう嫌いがあります。

【⑷への回答】

ご指摘の通りです。拡大された価値形態を考えるため、三角交換にならない作例にしました。

【⑸への回答】

不換銀行券を「不換」と「銀行券」（債務証書）の二面に分けて抽象化します。流通論で債務証書を取り出す作法は従来の研究でも明らかにされてきました。物品貨幣をベースにした債務証書の説明が兌換銀行券の抽象化として適切であるならば、問題は「不換」だけになります。単種商品ベースの債務証書では、商品体と価値の分離が不十分となり、兌換銀行券の抽象化の域を出ません。そこで、複数種の商品を資産として保有する主体を想定し、資産全体の価値に対する請求権としての債務証書を導きました。なおこの場合でも、主体間の債権債務関係を仲介するエスクローが必要であり、説明が不足しています。

参加者の質問への回答

【質問１２への回答】

そうなります。

【質問１３への回答】

財は使用価値をもつものです。財の使用価値は「他人のための使用価値」に限らず、「自分のための使用価値」を含みます。したがって、財交換は使用価値と使用価値の交換になります。財交換の市場では使用価値を追求する主体をベースに理論化されます。商品の使用価値は「他人のための使用価値」に限定されています。商品は「売る」ためだけに所有している「資産」なので、他の主体の商品との引き換えでなければ交換に応じることがありません。他の商品と交換できる性質が「交換性」（＝価値）であり、交換性としての価値の大きさが「価値量」です。商品売買の市場では、価値量を追求する主体をベースに理論化されます。

【質問１４への回答】

物品貨幣の兌換信用貨幣と、初めから兌換のない信用貨幣とが連続的につながるのは、理論的には妥当とはいえません。物品貨幣から説明される兌換信用貨幣と、初めから兌換のない信用貨幣とは異なる原理で説明されます。ただし、歴史的には連続しています。

【質問１５への回答】

①②その通りです。③過去500年間の資本主義が貨幣のかたちからみて持続したタイプと整理してよいか、判断できません。貨幣が資本主義のタイプを規定するとの分析枠組みが完備されていないためです。

【質問１６への回答】

ご指摘の通りです。

【質問１８への回答】

なりません。原理論では、商品貨幣論をベースにして、銀行（銀行信用、銀行資本、銀行業資本、銀行間組織等）が機構論で説明されます。

【質問１９への回答】

中央銀行を原理論の外部に位置づけるか否か、外的条件とするか否かについては言及していません。再考された商品貨幣論・流通論をベースに機構論を再考する必要があります。

【質問１７への回答】

ご質問の趣旨が十分理解できないため、適当な回答になっていないかもしれません。さしあたりの所感を述べます。「資本論第 1 巻の商品論における貨幣論は、価値の実体として労働を前提したもの」→ご指摘の通りです。資本論の理論構成を踏襲すると物品貨幣としての商品貨幣論しか説明できなくなります。そのため、「価値の実体として労働」の前提を外します。

「第 3 巻の総過程論では、信用機構・中央銀行論はほとんど展開できていない。」→ご指摘の通りです。そのため、再構成された流通論をベースに信用機構論を再構築します。

「いわゆる総過程論で信用機構・中央銀行論においてあらためて「通貨論」として論じる必要がある。」→この文が十分咀嚼できません。流通手段論として不換紙幣を位置づける必要があるとのご指摘でしょうか。私の理解する内容と一致していないかもしれませんため、「通貨論」の内容をもう少し説明していただけないでしょうか。

「こうした区別がなされていないように思われるが、どうか？」→ご指摘の通りだと思われます。「こうした区別」はなされていません。

【質問２０への回答】

①については、現代貨幣論（MMT）は、現代の信用貨幣の特徴の一面を的確に捉えており、学ぶところが多いです。商品貨幣論は、銀行信用を通じて供給される通貨の量が、銀行の取得する資産（商品）の価値の大きさに、本質的に規定されると考えます。それにたいして、おそらく MMT は預金設定による負債の創造が裁量的にできると考えすぎている嫌いがあります。

②については、言い切ればいいというものではありません。

【質問２３への回答】

「紙幣」は貨幣の形状です。理論的な意味はありません。「銀行券」は銀行の負債として形成される貨幣です。

【質問２４への回答】

経済学の理論構成の善し悪しに評価を与えるのは非常に難しい問題です。首尾一貫性の観点から判断すれば「いい」です。しかしフォーラムではこのような解釈をとっていません。「人間労働（抽象的人間労働＋具体的有用労働の連関）が露出する」と整理すると、貨幣は物品貨幣としてしか説明できなくなるためです。

【質問２５への回答】

機能論的な説明は経済学の理論として十分ではないと考えます。貨幣の見た目（現象）に基づく「シンプルな解釈」となっており、「なぜ・どのようにして、価値尺度として機能するのか？」等々の問題に答えられません。

【質問２６への回答】

指摘の通りです。歴史的・現実的には、単純に銀行券・信用貨幣として論じることはできないため、国際基軸通貨の問題として議論する必要があります。

小幡氏による回答

【質問１１への回答】

今日話した労働概念の拡張は、たとえば「感情労働」が説明できないからダメ、というレベルの問題でありません。「感情労働」と言いはじめた人たちは、それなりの具体的な現象があったのでしょう。おそらく言葉としてのインパクトが「感情労働」にはあり、こう名づけたのだと思います。原論の抽象レベルに持ちこむには「感情」なるものが概念として構成されておらず、これが説明できるかどうか、には答えることはできません。

「デカルト的な心身二元論」なるものも内容がわからないですが、私に理解できるかぎりでいえば、心と身体を分離し、動物の身体は一種の機械だが、人間だけにはこの身体を離れて心がある、コギトする意識がある、というデカルトの主張のことでしょう。本日の報告はもちろん、こんな二元論にはたっていません。意識がつねに身体に拘束され、また身体を通じて作用することを強調しました。

【質問２７への回答】

AI というのは狭すぎるので「情報通信技術とコンピュータサイエンス」というように広く捉えますが、そのうえで、これが「20 世紀の操作操縦型の労働」とは異なる「変容態」を生みだしつつあることを、学問的に説明するには、労働概念の基礎から三つの相に拡張する必要がある、というのが本日の報告内容でした。

【質問２９への回答】

「排他的？同時存在？」はよくきかれる質問です。いろいろ考えていまのところ、「変容」という理論層（レイア）と区別して、「多態化」というもう一つ上層に設定するのがよい、という結論にたっています。

たとえば、コンピュータで色を処理するときに、赤R、緑G、青Bという、光の三原色を使うのはご存じだと思います。いまご覧になっているディスプレイがこれです。何万、何十万か、細かいピクセルがならんでいるはずで、その一つ一つがR,G,Bの三つの光源を独自にもっているのでしょう。その意味で、R,G,B が排他的です。はじめから三つが混じって発光しているわけではありません。これが「変容のレイア」に相当します。ここでは三相は排他的です。

しかし、ディスプレイの表面では#ffffeeeeeddddのように、R は ffff、G は eeeed、B は dddd という組合せで何万色にもなって見えるわけです。私たちは、排他的なR,G,Bを別々にみているわけではありません。こっちが「多態化のレイア」になります。このレイアでは同時存在ということになります。変容のレイアをベースにもつ多態化のレイアでは、労働の三相も同時存在するわけです。もちろん、労働の多態性を考察するときには、何万も考えても意味がありませんが。

【質問３０への回答】

「資本主義のもとでの労働を考えた場合」にはそうなります。商品の場合は、つくった「結果」を「選ばせる」というスタイルになりますが、その一段前に遡った他者との接し方がある、ということになります。これは先の教科書の 109 ページの問題 72「商品は「他人のための使用価値」をもち，労働力は「他人のための労働」として発揮される。さて，この二つの「他人のため」は，どのように関連するのか，述べよ」と問い、これにも 312 ページに解答と解説をつけておきました。

【質問３１への回答】

「他者がいてはじめて，労働と呼べるような人間的活動が明確になされる。」＝「明確化される」と本日の報告で述べたとおりです。本日の報告で「労働に「目的意識的活動」という単独の労働過程でも成り立つような定義を与えてきた」わけではありません。

【質問２８への回答】

基本、イエスです。細かいことをいえば、まず「変容」と「歴史的発展」（「発展」を「歴史的変容」とよぶ、でもＯＫでしょう。）を区別したうえで、「“コミュニケーション”、“技術”、“技能”、“操作操縦”」自体が「伸長したり、縮小したり」するというより、「歴史的発展」のもとで、それらの影響力が変わる、と私は表現しますが、これは自然言語につきまとうブレの範囲、好みの問題です。

【質問３３への回答】

「労働の二重性」云々というのは「具体的有用労働」と区別した「抽象的人間労働」の話しだと思い

ます。この区別は『資本論』が商品価値を説明したところで「価値の実体」という考え方をつかったことに由来するものです。私は「商品には価値がある（「ある」を強調して「内在する」ともいいますが）」という命題はマルクス経済学の市場概念のコアであるが、これは「実体がある」「実在するのは実体である」という『資本論』の考え方を必要としない（逆に「ある」の意味を見誤らせる）と考えて、教科書（小幡道昭『経済原論：基礎と演習』でも「問題 11：商品の使用価値に対する価値の規定は，さらに価値の形態と実体とに二重化される。商品の価値は，価格比として価値形態と，それを規定する労働の量関係としての価値実体からなる」という人がいる。このような価値の形態と実体という対概念は必要か」（30ページ）とたずね「必要ない」を正解としています。その理由は279-80ページの「解説」で学部学生にわかるように説明しました。

「社会的労働の有機的質量編成の問題」が「社会的再生産の編成の問題」なら、「マルクス経済学を組み立てる」で論じたように、「価値の実体的関係」によらずとも充分説明できます。

【質問３５への回答】

「理論空間」という話に関心を寄せていただきありがとうございます。「（マルクス経済学の）経済原論は唯一のモデルなのか」という問題について、ノーです。唯一モデル論は「理論」に対する旧い考え方です。私は理論空間的な発想で、主流派のミクロ･マクロの経済学と向きあってきました。しかし、あちらサイドはこれが理解できないらしく、「マルクス経済学の『理論空間』など、いっさい認めない。経済理論はミクロとマクロしかない。これがグローバルスタンダードだ」というスタンスで、この人たちとは終始対立しながら、けっきょく「マルクス経済学を組み立てる」という論文を置き土産に大学を去ることになりました。

今日の報告では、マルクス経済学の特徴を活かすには、マルクス経済学自身もその内部に「理論空間」的な発想を明示して再構築する必要がある、という方向で話をしました。どうしようもなく頑迷なミクロ、マクロと目先の優位性を競うために経済理論を研究しているわけではありません。「歴史的に発展する資本主義を理論的に分析する」というマルクス経済学の基本課題に向かって、新しいアイデアをだし必要な理論的工夫を積み重ねることが肝要で、近視眼的な人たちが気にする優劣は、「理論空間」の適不適の問題として、いずれ歴史的に決着をみるでしょう。

【質問３６への回答】

理論として、「労働価値説、剰余価値説」が課題としていることと、「現代の情報技術 IT の時代」で考察すべき課題とは、区別すべきだ、と、本日の報告の１で述べました。たしかに「現代の情報技術 IT の時代」における賃金の問題、純生産物の分配の問題も重要なテーマです。「労働価値説、剰余価値説」はこの分配の原理を分析する基礎になります。しかし、それは基本原理に焦点をあてたもので、それにさまざまな要素を追加してゆけば、現実にどんどん近づけてゆける、という性質のものではありません。「あてはまる」というとき、抽象化すれば、資本主義のもとでの分配原理が共通している、という意味では正しいのですが、逆にこれを複雑化してゆけば、現実に近似してゆく、というわけにはゆきません。

（了）

関連文献

泉正樹［2021］「資本主義の歴史的発展と経済原論：「変容論的アプローチ」からの展開」『東北学院大学経済学論集』(194・195)
岩田佳久［2022］「商品集積体と債権化から信用貨幣を導出する新しい価値形態論：or の関係で結びついた商品集積体を基礎として」『季刊経済理論』59(1)
小幡道昭［2009］『経済原論：基礎と演習』東京大学出版会
小幡道昭［2016］「マルクス経済学を組み立てる」『經濟學論集』 80(3)
小幡道昭［2019］「熟練内包的労働の一般概念：オブジェクトとしての労働」『季刊経済理論』56(2)
海大汎［2021a］『貨幣の原理・信用の原理 ―マルクス=宇野経済学的アプローチ』社会評論社
海大汎［2021b］「信用貨幣の生成原理に関する一考察」『經濟學研究』71(2)
村上允俊［2021］「段階論の理論的前提とその限界」『社会システム研究』24
結城剛志［2021］「ポスト資本主義と貨幣」『神奈川大学評論』99
Iwata, Y. [2021] "Even inconvertible money is credit money: Theories of credit money in Japanese Marxian economics from the banknote controversy to modern Uno theories," *Journal of Tokyo Keizai University: Economic*, 311.

ウェブサイトなど
小幡道昭：銀座経済学研究所　https://gken.jp/gken/sample-page/
　　東京理科大学「経済学」授業サイト　https://gken.jp/tus/
　　駒澤大学「経済理論」授業サイト　https://gken.jp/kug/
岩田佳久：現代資本主義と経済学原理論　https://moderncapitalismandprinciple.blogspot.com/

東京経済大学学術研究センター
ワーキング・ペーパー・シリーズ

バック・ナンバー照会先：東京経済大学学術研究センター
〒185-8502　東京都国分寺市南町 1-7-34
TEL：042-328-7959　　FAX：042-328-7772　　E-MAIL：kenkyu@s.tku.ac.jp

＜経　済＞

番　号	著　者	タイトル	年月日
2002-E-01	除本理史	在比米軍基地による環境汚染問題－スービック海軍基地の事例	2002 年 9 月 20 日
2004-E-01	除本理史ほか	東京における大気汚染公害の「未認定」患者に関する被害実態調査報告書	2004 年 4 月 19 日
2006-E-01	除本理史ほか	四日市公害被害者の現在に関する調査報告書	2006 年 6 月 14 日
2007-E-01	除本理史ほか	三重県四日市市の公害・環境問題と自治体環境政策に関する調査報告書	2007 年 4 月 10 日
2007-E-02	尾崎寛直ほか	四日市の公害・災害問題に関する社会学的・教育学的研究調査報告書	2007 年 5 月 16 日
2010-E-01	除本理史ほか	西淀川公害と「環境再生のまちづくり」	2010 年 9 月 15 日
2010-E-02	尾崎寛直ほか	新たな大気汚染「未認定」患者の救済制度創設に向けた調査研究報告書―東京都医療費助成条例の政策効果を中心に―	2011 年 3 月　1 日
2016-E-01	周牧之ほか	環境とエネルギーの未来―国際シンポジウム報告書―	2017 年 3 月 3 日
2018-E-01	周牧之ほか	地域発展のニューパラダイム―学術フォーラム報告集―	2019 年 1 月 25 日
2021-E-01	岩田佳久ほか	マルクス経済学の現代的スタンダードを語る―学術フォーラム報告書―	2022 年 2 月 22 日

＜経　営＞

番　号	著　者	タイトル	年月日
2002-B-01	町田祥弘	わが国の外部監査における内部統制評定の実態	2002 年 1 月 18 日
2002-B-02	水谷昌義	国鉄自動車路線名称の変遷	2003 年 3 月 5 日
2005-B-01	安田行宏ほか	Does Corporate Lending by Banks and Life Insurance Companies Differ?- An Examination of the “Marginal Lender Phenomenon” in Japan -	2006 年 3 月 14 日
2007-B-01	柳瀬典由ほか	Did Japanese stock market react rationally to the risks of reinsurance transactions after the September 11th?	2007 年 9 月 21 日
2009-B-01	渡邊章好	Efficiency of a Budgeting Scheme Adaptive to the Business Environment	2009 年 9 月 16 日

＊　本ワーキング・ペーパーは，学内での共同研究等の議論に供するため，または，執筆者が研究目的で個人的に配布するために，作成されたものである。引用等の利用に当たっては，本ワーキング・ペーパーが完成原稿ではないことに十分留意されたい。また，本ワーキング・ペーパーの内容にかかる一切の責任は，執筆者本人に帰するものであり，当センターにおいては関知するところではない。